

日南市中心市街地活性化事業 報告書

これまでのまちづくりの想いを
未来へつなげる

平成 29（2017）年 3 月

日南市

油津まちづくり会議

はじめに

日南市長 崎田 恭平



本市は、海、山、川の豊かな自然に恵まれ、古くから交易で栄えました。江戸から昭和初期にかけては、飢肥杉の取引や、マグロなどの海産物の搬出や漁業で栄え、海の玄関口であった油津地区は、県南地区の商業の中心として、集積された商業地域を形成してきました。

しかし、車社会の進展による居住の郊外化や少子高齢化が進むにつれ、他の多くの地方都市と同様に、油津地区においてもかつての市街地のにぎわいは薄れてきました。

そのような中、日南市では、今の時代にあったまちの賑わいを作るべく、油津地区における中心市街地活性化基本計画を作成し、郊外店とは異なる市街地の魅力形成や、平成14年度から進められた、堀川運河再生事業により整備された堀川運河やその一帯を観光資源として活用し、観光客の滞在時間を延ばすことなどに重点を置き、日南市中心市街地活性化事業に取り組んでまいりました。

本事業は、行政だけでなく、民間事業者や市民の皆様が自ら取り組まれる事業もあるなど、非常に多岐にわたる事業でありましたが、専門家の先生のご助言もいただきながら、今年度をもって完了というひとつの区切りを迎えることとなりました。

本事業は、平成28年度をもって終了となりますが、まちは絶えず変化していくものであり、さらに、まちづくりも変化しながら続いていくものと考えております。油津地区で取り組んできた本事業をまちづくりの基礎とし、今後も市民の皆様と共に考えながら取り組んで参りたいと考えております。

最後に、本事業に携わっていただきました多くの市民の皆様をはじめ、油津まちづくり会議の皆様、また中心市街地活性化基本計画の策定、実施にあたり多大なご尽力をいただきました中心市街地活性化協議会の皆様、さらに、それぞれのお立場からまちづくりに携わっていただきました多くの方々に心から感謝申し上げます。

油津まちづくり会議委員長

吉武 哲信



平成 24 年 11 月に国の認定を受けてスタートした日南市中心市街地活性化事業は、平成 28 年度をもって終了します。平成 24 年当時、現在の油津の姿を誰が想像し得たでしょうか？油津商店街は確実に姿を変え、今や全国的に注目を集める存在になりました。もちろんこれからの課題も多くありますが、日南市の中活事業はめざましい成果を挙げてきたと評価してよいでしょう。そして何よりもここで記すべきは、この成果を生み出した多くの方々の存在です。行政、専門家、商業者、企業、市民・住民等々。本事業を契機として新たにマチに関わられた方々も多くおられます。

この「日南市中心市街地活性化事業報告書」は、日南市中心市街地活性化事業の全体構成と個別事業を俯瞰できるだけでなく、そこに参加された方々の「熱意」や「思い」、「苦労」や「工夫」が伝わるものになっています。これからも油津や日南市での活性化活動に携わる方々への資産でもありますし、他の地域でまちづくり関連事業に携わる方々にも重要な情報を提供してくれるでしょう。このような報告書が取りまとめられたことも事業の大きな成果です。

さて、私は平成 14 年度の堀川運河再生事業から、今回の中心市街地活性化事業にかかわる油津まちづくり会議まで、15 年間に渡って日南市とお付き合いさせていただきました。長きに亘り、皆様と共に日南市の将来に向けての仕事をさせていただいたことに、感謝いたします。そして、今後の日南市のまちづくりが皆様の力の結集によって、ますます充実していくことを祈念しております。

日南市中心市街地活性化事業の総評（速報）

日南市中心市街地活性化事業（以下、中活事業）は、平成24年度から平成28年度までの5年間実施された。日南市中心市街地活性化基本計画（以下、基本計画）には、基本方針として「1. 誰もが楽しめるまちの形成」、「2. 便利で安心なまちの形成」、「3. 新たな来街を促す観光地の形成」が掲げられた。この基本方針のもと、2つの目標が示され、それぞれに目標指標が定められた。この目標指標に対して、基準値（平成23年度の実績値）および目標値が定められ、毎年の最新値により、取組の進捗状況及び目標達成に関する見通しが、定期フォローアップとして報告された。これにならば、中活事業の完了を目前にした平成29年3月1日現在、目標達成状況は以下の通りである。

1つめの目標は、「来てよかった、また来たいまち」、目標指標は1日平均歩行者・自転車通行量である。基準値3,599人/日、目標値4,100人/日に対して、平成28年8月の最新値は3,914人/日であり、基準値を超える増加はみたまものの、目標値には達していない。2つめの目標は、「住みたい、住み続けたいまち」、目標指標は定住人口である。基準値3,281人、目標値3,400人に対して、測定の基準日である平成28年10月1日現在、最新値は3,079人である。中活事業期間中の定住人口は減少し続けており、目標は未達成である。

ところが厳しい目標達成状況ではあるものの、多くの市民が「油津のまちが変わった」との印象を抱き、中活事業関係者は積み残した課題は認識しつつも、手応えを感じている。これは市民と行政・民間事業者・専門家らが5年間、油津のまちづくりにともに取り組んできた「実績」と「成果」の表れといえる。

手応えの拠所となる「実績」は、中活事業関係者がともに取組み実現してきた「中活事業推進のプロセス」である。油津まちづくり会議を最上位に位置づけ、「①基本方針の明示とオープンな場づくりによる意識の共有」が進められてきた。確かな実行力と柔軟な実現性を担保してきたのが、「②縦串・横串を刺す関係者調整」、「③適材適所のチームビルディング」、「④体制を変化させるプロジェクトマネジメント」であった。さらに「⑤不動産のWGが担うディレクション機能」が要となる中活推進体制が、中活事業推進のプロセスを支えてきた。

中活事業推進のプロセスの「成果」は、市民とともに作り上げてきた「賑わい再生のプロセス」である。関係者が検討し議論した各事業が着実に実行されることで「①日南・油津のPR効果と「来たいまち」への転向」が図られ、事業効果は市民の意識を着実に変化させた。1つ1つの事業が積み重なり、市民の参画意識や活動意識が醸成された結果、「②市民の活躍機会と交流人口の増加」が見られるようになる。こうして再生した賑わいは、商売にとられない職種や働き方を生み出した。1人1人の人生や価値観を動かし、油津のまちを舞台とした「③キャリアデザインの萌芽」へと展開しつつある。

5年間実施された中活事業を評価するにあたって、基本計画に定めた目標が達成されなかった点は、その要因を適切に把握し、以後のまちづくりに対する課題とともに真摯に受け止める必要がある。一方で、目標指標の数値には表れない「油津のまちの変化」は、まちの様相や市民・関係者の実感として、存在している。本報告書は、中活事業の適切な評価および課題を認識する（第1部）とともに、5年間の実績と成果を記録し（第2部）、油津のまちづくりの次なる展開へと引き継ぐためのものである。

目 次

第 1 部 中心市街地活性化事業の概要と評価

① 中心市街地活性化事業の概要 ～中心市街地活性化のあゆみ～	1
【参考】油津 5 年間のまちづくり年表	6
【参考】中心市街地活性化事業体制図	8
【参考】中心市街地活性化事業予定箇所図 （油津まちづくり行動計画（案）平成 28 年 3 月版を修正）	9
② 中心市街地活性化による油津まちづくりの評価	
(1) 中心市街地活性化事業の推進体制に関する評価	10
(2) 中心市街地活性化事業がまちづくりに及ぼした効果	
① 通行量 ～商店街エリアの通行量は増加、堀川周辺エリアは減少傾向～	12
② 歴代 Yotten 来場者数 ～こどもの居場所、Yotten の変遷にみる賑わいプロセス～	13
③ 新聞掲載数 ～新聞にみる油津の話題性と市民の活躍～	14
④ 視察受け入れ数 ～木藤氏および油津応援団による視察受け入れ数増加と取組みの注目度向上～	15
⑤ イベント件数 ～来街のきっかけづくり、イベントの頻度とタイプがもたらすまちづくり姿勢の変化～	16
⑥ 「港町油津“へえ～”“ほお～” まちあるき」参加者・主催者データ ～地域コミュニティの性質の変化～	17
⑦ 新規出店数および新規雇用者数 ～足を運ぶ場所として機能を取り戻しつつある油津商店街～	18
⑧ 人口推移 ～油津 5 年間のまちづくり成果としての人口の減少スピード変化～	19
まとめ 中心市街地活性化事業が油津のまちづくりに及ぼした効果	20

第2部 中心市街地活性化事業のあゆみ

① 中活事業 5年間の取り組み

2012(平成24)年度以前 中活準備期

- 1. 中心市街地活性化事業基本計画の策定・認定 21

2012(平成24)年度 体制模索期

- 2. 油津まちづくり会議、油津まちづくり会議WG 起ち上げ 23
- 3. 日南市庁内まちづくり懇談会、日南市活性化ネットワーク(+C) 25

2013(平成25)年度 体制拡大期

- 4. 交通部会の設置 27
- 5. サボマネの全国公募、選考会 28
- 6. サボマネ着任、Yotten リニューアルオープン 30
- 7. 夢ひろばWS 31
- 8. 中心市街地活性化庁内勉強会(講師;高尾・木藤) 32
- 9. 日南の幸開き スタート 33
- 10. 株式会社 油津応援団設立、ABURATSU COFFEE オープン 34

2014(平成26)年度 活動人財発掘期

- 11. デザイン部会の設置 35
- 12. 水辺利活用社会実験(夏、秋)、
ウォーキングレッスン・へえほおまち歩き試行 36
- 13. 油津赤レンガ館コワーキングスペース開設 37

2015(平成27)年度 拠点整備活発期

- 14. 自転車ライフ談議所の開始→日南海岸サイクルラインへの発展 38
- 15. へえほおまち歩き本格実施 39
- 16. ウォーキングレッスン継続実施 40
- 17. 油津 Yotten・ABURATSU GARDEN 整備 42

2016(平成28)年度 体制移行検討期

- 18. 新たな観光客の急増(広島カープ・クルーズ船など) 43
- 19. サイン整備完了 44
- 20. 観光3拠点リニューアル(ゲオ跡地、赤レンガ館、堀川資料館) 45
- 21. 複合ビル Itten 完成・オープン 46
- 22. 市民活動支援センター開設 47
- 23. 子育て支援施設オープン 48

② 中活関係者による振り返りコメント

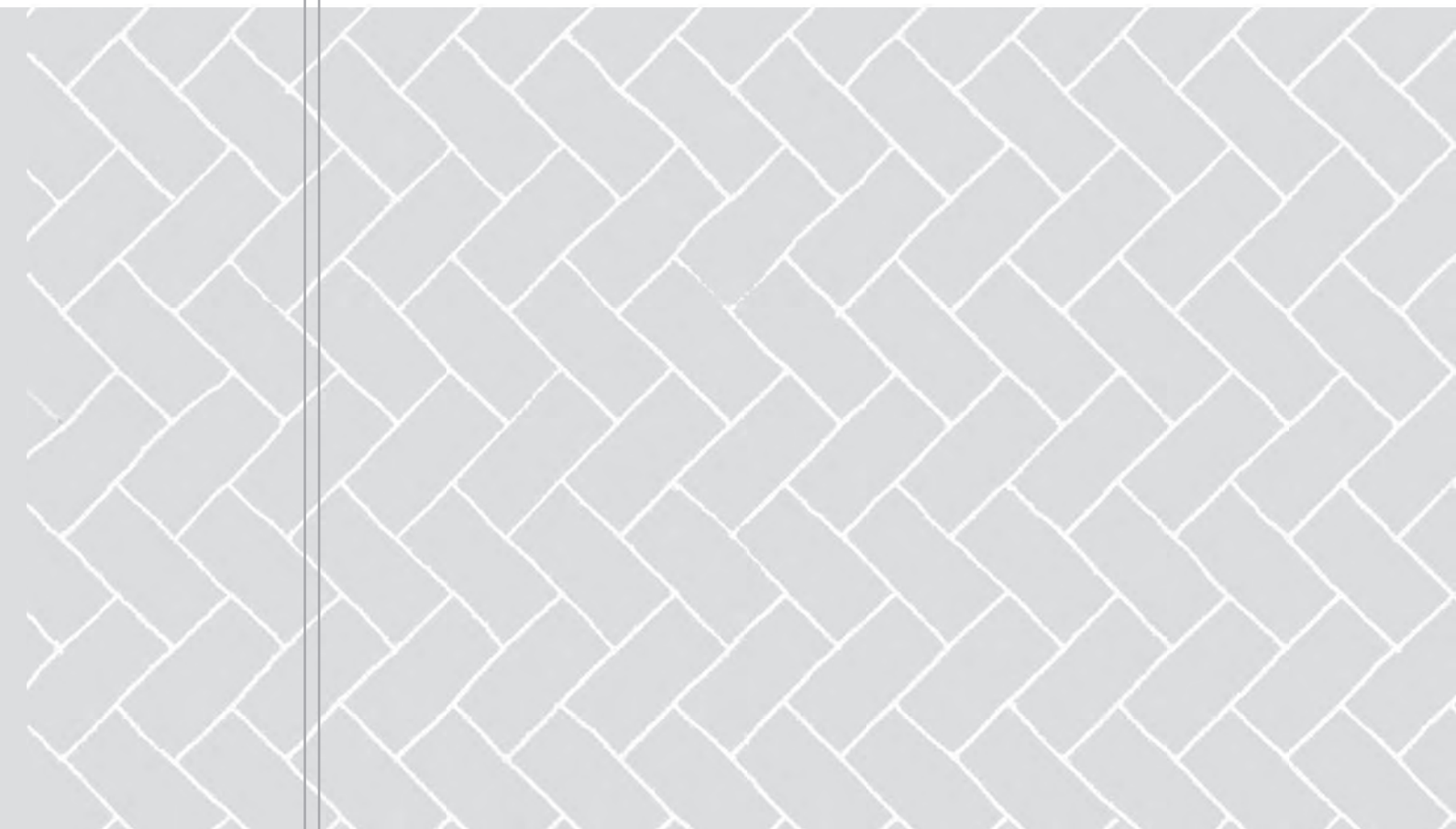
まちづくり会議 委員	49
デザイン部会 委員	55
行政 担当者	57
市民（事業者、企画・運営者）	61

附録

・テナントミックスサポートマネージャー 選考委員長 講評	64
・平成 27 年度 日南市中心市街地活性化シンポジウム 「自分のまちは自分で〇〇 ～私はこんげしてえとよ～」記録	66

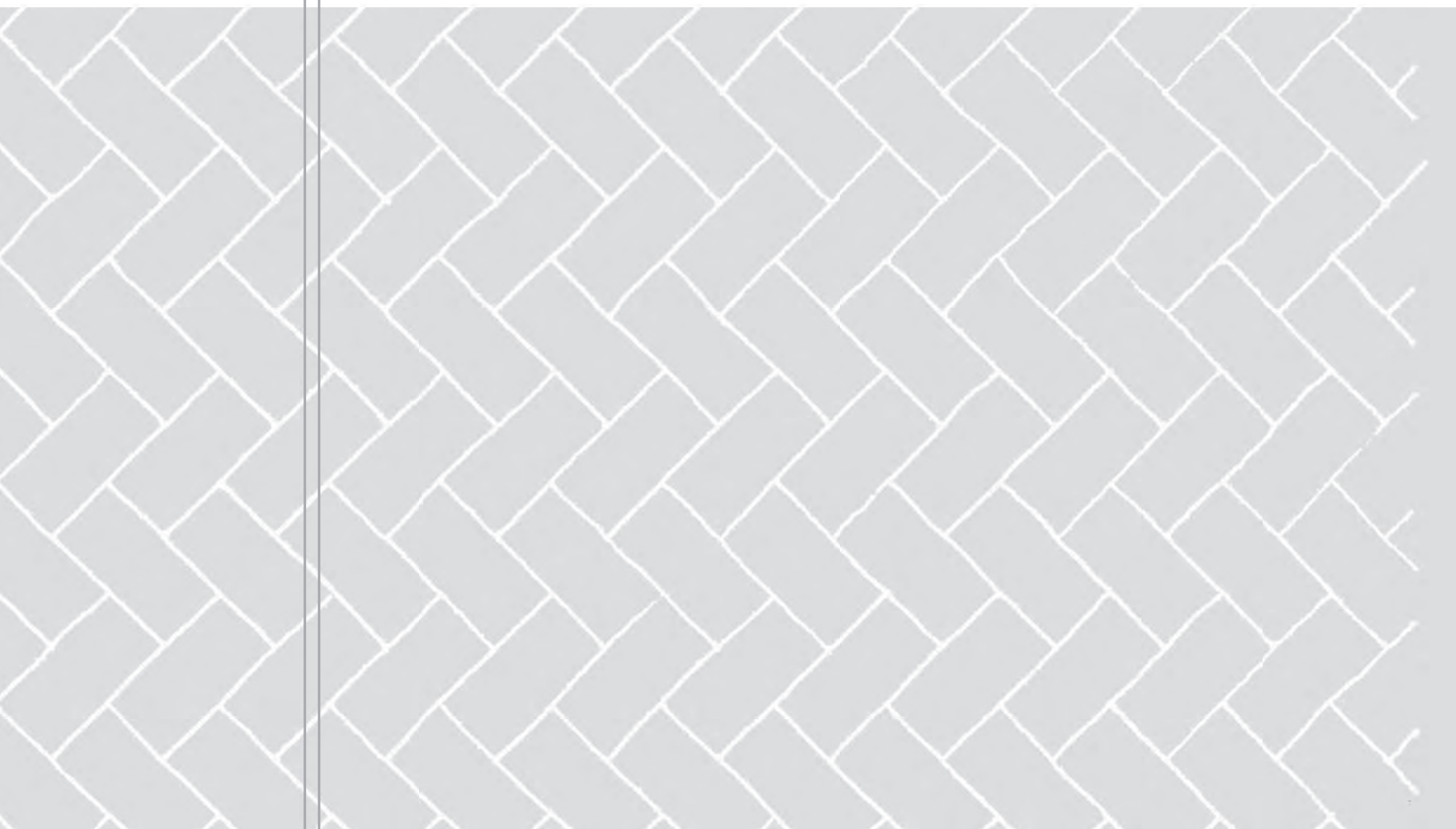
第 1 部

中心市街地活性化事業の概要と評価



① 中心市街地活性化事業の概要

～中心市街地活性化のあゆみ～



中心市街地活性化事業 5年間の取組みの流れ

1 〇〇〇〇〇〇 中活準備期 -2012（平成24）年度以前-

日南市中心市街地活性化基本計画（以下、基本計画）の対象地となった油津地区は江戸時代以来、木材の積出しやマグロの漁業基地など、漁業と商業で発展してきた港町である。当該地区は、重要伝統的建造物群保存地区に選定されている飫肥地区や市役所が立地する吾田地区と並び、市の中心的な役割を担う地域である。商業、金融、医療、公共交通等の施設が集積し、国道・鉄道・港を有する交通の要衝であることに加え、堀川運河の保存再生や赤レンガ館の買取り保存など、市民のまちづくりに対する思い入れが深い地域でもある。

2002（平成14）年には日南市まちづくり市民協議会、翌2003（平成15）年には油津地区・都市デザイン会議が設立され、堀川運河を中心としたまちづくりに取組んできた。地区の観光ポテンシャルが高い一方で、人口減少や高齢化、歩行者通行量の減少や商店街における空き店舗の増加など、地域活力の低下が著しい状況が続いた。

地域活力を高め、日南市の顔を再生すべく、2012（平成24）年11月に国の認定を受け、油津地区での中心市街地活性化事業が本格的に動き始めた。

関連トピック 1. 中心市街地活性化事業基本計画の策定・認定 【白坂】

2 〇〇〇〇〇〇 体制模索期 -2012（平成24）年度-

平成24年度は、中心市街地活性化事業の推進体制づくりが進められた「体制模索期」であった。中心市街地活性化事業に着手した当初、日南市中心市街地活性化協議会と油津地区・都市デザイン会議の意思疎通が図られていない状況にあり、基本計画の実施には協働体制の構築が大きな課題であった。これを受け、協働体制の構築と関係者の合意形成に向けた協議の場として、「油津まちづくり会議（委員長：吉武哲信氏）（以下、まち会議）」を設置した。まち会議ではその特性上、各事業の詳細に関する議論や調整を図ることが難しいことから、まち会議の下部組織として、「油津まちづくり会議ワーキング（以下、まち会議WG）」を設置、そのコーディネートを「日南市中心市街地活性化事業チーフディレクター」に就任した九州大学・高尾忠志氏が務めることとなった。これらにより、油津における中心市街地活性化事業の方向性や事業スケジュールの管理と関係者の意識共有を進め、中心市街地活性化事業を構成する約50事業を一体的、統合的に進める体制の枠組みを構築した。

まち会議ではまず、大きな方向性として「油津まちづくり会議基本方針五箇条」を示すとともに、事業推進のための行動計画（アクション・プログラム）である「油津まちづくり行動計画（案）」を作成した。なお、「油津まちづくり行動計画（案）」は、まち会議において各事業の進捗に合わせた見直しを行い、平成28年度まで随時更新し続ける運用を行った。

さらにこの時期、持続的な取組みを促していくため、若い世代をターゲットとした参加の場を設けた。市全体を対象とした市民ヒアリング調査を行い、相互のつながりと意識の共有を生み出すことを目的とした「日南市活性化ネットワーク（通称；日活）」と、庁内の若手職員がわが町のことを知り、地域の未来について考えることを目的とした「日南市庁内まちづくり懇談会（通称；まち懇）」であった。前者は後に「+C」と名前を変えて具体的な市民活動の実施に展開していく。市民および市役所職員の中で、意識の高い若手を発掘し、ネットワーク形成につなげたことが、以後の油津まちづくりに関する若手の参加の重要な基盤となった。

関連トピック 2. 油津まちづくり会議、油津まちづくり会議WG 起ち上げ 【倉岡】

3. 日南市庁内まちづくり懇談会、日南市活性化ネットワーク（+C） 【高尾】

3 体制拡大期 -2013（平成25）年度-

平成25年度は、商店街、交通、観光など各事業の推進体制が組まれた「体制拡大期」であった。中でもテナントミックスサポート事業は、テナントミックスサポートマネージャーの公募・選定プロセスが全国的に話題を集めた。応募者は333人にもものぼり、「テナントミックスサポート事業委員会（委員長：高尾忠志氏）」による第一次審査（書類審査）で9名の候補者へと絞り込み、さらに最終審査（市民向け公開プレゼン、アーケードでの懇親会、面接審査）によって木藤亮太氏を選定した。公募条件や選定プロセスに埋め込まれた巧みな戦略と大胆なメッセージによって中心市街地活性化事業全体に大きな力を引き寄せることに成功し、これ以後、商店街の変化は市民にとっての大きな関心事となった。

木藤氏が着任当初に力を入れたのが店主や住民らへの聞き取り調査や対話の機会づくり、イベント等の商店街へ出かける機会づくりといったソフト面の取組みであった。ハード面の取組みは既存の施設・店舗のリノベーションからスタートした。木藤氏と日南まちづくり株式会社により既存の「アーケードこども館」が「まちなかフリースペース Yotten」へとリニューアルされ、商店街の中心に子連れの母親や子どもの居場所が生まれた。子どもたちが放課後「まちなかフリースペース Yotten」に集まるようになり、商店街の様子はわずかに変わり始めた。

このようなタイミングで行ったのは市役所全職員を対象とした中心市街地活性化庁内勉強会であった。中心市街地活性化事業に対する認識と理解を深め、より多くの市民の参画を得るには市職員の意識改革・共有が重要な基盤となる。勉強会の講師は中心市街地活性化事業チーフディレクターの高尾氏、テナントミックスサポートマネージャーの木藤氏が務めた。

この半年後、待望のテナント誘致1件目として、飴肥杉を用いて喫茶店跡をリノベーションした「ABURATSU COFFEE」（設計：田村 晟一朗氏）がオープンした。テナントミックスサポート事業委員会委員就任から油津の中活事業に関わることとなった村岡浩司氏が開発した「九州パンケーキ」とコラボレーションしながら、市民にとって懐かしい思い出の場と油津にはなかったカフェスタイルが相まって、「ABURATSU COFFEE」は市民も来訪者も訪れる人気店となった。「ABURATSU COFFEE」を運営する会社として村岡氏、木藤氏、黒田泰裕氏、小玉博之氏を取締役として設立されたのが「（株）油津応援団」である。

テナントミックスサポート事業によるこうした動きが展開する一方で、観光や交通に関する取組みが動き始めたのもこの時期であった。交通に関しては、中心市街地活性化基本計画に示された地区巡回バス運行社会実験という事業メニューを見直し、市全体の交通体系のあり方と中心市街地に出かける足の確保を議論するため交通部会を設置した。交通部会では、日南市の交通状況の把握、国土交通省・清水喜代志氏や富山市・京田憲明氏を講師として招聘した勉強会の開催、中心市街地活性化事業で取り組むべき交通施策についての議論を約2年に渡って行ったが、具体的な方針を示す段階に及ばず、地区公共交通のあり方については今後の課題として残ることとなった。なお、交通部会は平成27年度に自転車をテーマとした検討に移行することとなる。

観光に関しても JTB 総合研究所・河野まゆ子氏や久留米まち旅博覧会・高山美佳氏を講師として招聘した勉強会を開催し、着地型観光への取り組みとして「日南の幸開き」をスタートした。これまで観光資源とみなされていなかった工場見学や体験メニュー等が観光プログラムとして展開され、観光やまちづくりとは無縁であった市民が日南観光の担い手として参画するようになった。「日南の幸開き」は平成27年度に日南市体験型観光プログラム（日南市雇用創出プロジェクト会議）に統合され、年3回実施されている。

なお、2014（平成26）年3月、2003（平成15）年度から十余年にわたり続いた油津地区都市デザイン会議は、油津まちづくり会議と統合する形で幕を閉じた。

関連トピック 4. 交通部会の設置 【萩原】／5. サポマネの全国公募、選考会 【釈迦郡】

6. サポマネ着任、Yotten リニューアルオープン 【木藤】／7. 夢ひろばWS 【倉岡】

8. 中心市街地活性化庁内勉強会（講師：高尾・木藤）【高尾】／9. 日南の幸開き スタート【宮下】

10. 株式会社 油津応援団設立、ABURATSU COFFEE オープン 【木藤】

□□□4□□ 活動人材発掘期 -2014（平成26）年度-

平成26年度は、前年度の盛り上がりを継続し、市民の参画を促す機会が多数設けられた「活動人材発掘期」であった。

いよいよハード整備が本格化するのを見越して、景観やデザインの観点から各プロジェクトの設計を総合的・専門的にアドバイスすることを目的に、鮎川透氏を部会長とする「デザイン部会」を設置した。小野寺康氏、徳田光弘氏を学識委員、篠原修氏を相談役に迎え、多世代交流モール事業や観光拠点施設整備に向けた検討が行われることとなる。

平成26年11月には「第1回 中心市街地活性化事業シンポジウム」を開催し、中心市街地活性化事業の進捗状況について、市職員が市民に直接報告する機会を設けた。日南市中心市街地活性化事業チーフディレクターの高尾氏がコーディネーターを務め、中心市街地活性化事業の概要を建設課および地域振興課、商店街や観光の振興については商工観光課が説明、パネルディスカッションでは、これに生涯学習スポーツ課が加わった。152名の市民が参加し、中心市街地活性化に対する理解や期待へとつながった。

商店街エリアは木藤氏や株式会社油津応援団の精力的な取り組みもあり、前述した「日活」「+C」のメンバーを中心として、これまでまちづくりに参画してこなかった子どもや若者が集い、賑わいづくりが繰り返された。2014（平成26）年8月、株式会社油津応援団による多世代交流モール事業が経済産業省の商店街まちづくり事業に採択されると、10月～12月に実施した設計者選定プロポーザルには全国から78点の応募を得た。設計者選定委員会（委員長：鮎川透氏）による一次・二次審査を経て、水上哲也建築設計事務所（福井県）が選定され、設計業務がスタートするに至った。

堀川運河を中心とした水辺エリアでは、県事業である波止鼻ひろば整備に関する協議調整や市民参加機会の創出を行ってきており、それに続いて夢ひろば利活用検討ワークショップを開催し、設計者である小野寺康氏が市民の議論に直接参加する機会を設け、夢ひろば利活用と再整備に向けた課題と方針を共有した。この成果をふまえて夏は水遊び、秋は読書といった新たな使い方・過ごし方の実践と、飲食店の展開可能性の検証を行う社会実験を実施し、夢ひろばに親子連れを中心とした様々な世代が集まる風景が実現した。

さらに、車への依存を見直し、健康で美しいライフスタイルを身につけるきっかけづくりとして、講師に小野寺 MARIKO 氏を迎えたウォーキングレッスンを実施した。歩き方から自らのライフスタイルを見直したい女性を中心に人気プログラムとして次年度も継続されることとなった。

くわえて、「観光半分、まちづくり半分」を目標として、油津地域協議会が主催するまちあるきプログラム「港町油津”へえ～””ほお～”まちあるき」が試行された。「案内人」が先導してルート内に点在する見所と「請負人」を訪ね、住民自ら体験や小話を語ってもらうスタイルは、これ以後、地域の記憶を携えた人材を芋づる式に掘り起こし、地域の人々の自信と楽しみの創出へとつながった。

油津赤レンガ館の利活用も大きく展開した。1階は観光客向けの歴史ガイドンス・休憩スペースとして、2階は起業家誘致を企図したコワーキングスペースとしての利活用がスタートした。コワーキングスペースの利用開始当初から東京都や宮崎市のIT企業との契約も締結され、後の商店街へのIT企業誘致に向けた布石となった。

関連トピック 11. デザイン部会の設置 【倉岡】

12. 水辺利活用社会実験（夏、秋）、ウォーキングレッスン・へえほおまち歩き試行 【倉岡】

13. 油津赤レンガ館コワーキングスペース開設 【高橋奈】

□□□□5□ 拠点整備活発期 -2015（平成 27）年度 -

これまでの3年におよぶ体制整備、人材発掘による基盤づくりを経て、平成27年度はいよいよ油津商店街に新たな拠点が誕生する「拠点整備活発期」を迎える。

11月には「油津 Yotten」と「あぶらつ食堂」、12月には「ABURATSU GARDEN」がオープンし、商店街の活性化は大きく加速した。なお、多世代交流モール（油津 Yotten+ あぶらつ食堂）（設計者：水上哲也氏）は平成28年日本建築士会連合会賞優秀賞を受賞した。

前年に試行的に実施されたウォーキングレッスンは油津 Yotten のオープンに合わせて再度実施され、商店街での宮崎看護大学と小野寺 MARIKO 氏とのコラボレーション企画も実現した。

さらに「港町油津”へえ～” ”ほお～” まちあるき」は、油津地域協議会地域活性化部会に引き継がれ、2回開催された。第4回（2016年2月）では油津小学校6年生34名による発表機会が設けられ、小学校と地域との新たな連携が生まれた。また中学生・高校生の孫とともに運営に携わるスタッフもいるなど、取り組みの定着・成長がみられるようになる。

新たな試みとして、交通部会での検討を踏まえて、日南海岸でのサイクリスト増加や飢肥・鵜戸神宮などの観光地と油津を結ぶ移動手段としてのポテンシャルに着目し、自転車を活かしたライフスタイルを考える「自転車ライフ談議所（管理人：永村景子氏）」が2015（平成27）年8月に設置された。日南市サイクリング協会や日南海岸地域シーニックバイウェイ推進協議会らに呼びかけて始まった自転車ライフ談議所は、回を重ねるごとに宮崎市・串間市からの参加者も増え、SNSを活用した情報交換も瞬く間に広がった。2016（平成28）年2月には、日南市地域振興課による飢肥杉を用いたサイクルラック設置の社会実験を実施した。あわせて、自転車ライフ談議所メンバーであった日南海岸地域シーニックバイウェイ推進協議会でもサイクリング休憩所の社会実験を実施、サイクリング休憩所「よってねポイント」の設置や「日南海岸恋人ロード」企画が相次いで展開され、日南海岸サイクルラインとして活発な活動が展開されている。

ハード・ソフト両面から油津が活気づく中、平成27年度 日南市中心市街地活性化シンポジウム「自分のまちは自分で〇〇 私はこんげしてえとよ」を開催した。小学生・高校生各2名を含む計16名の市民が登壇し、油津の変化を振り返り、「こんげしてえ」という熱い思いを語った。

関連トピック 14. 自転車ライフ談議所の開始 →日南海岸サイクルラインへの発展 【水口】

15. へえほおまち歩き本格実施 【長本】

16. ウォーキングレッスン継続実施 【辻】

17. 油津 Yotten・ABURATSU GARDEN 整備 【鮎川】



中心市街地活性化シンポジウムの様子

□□□□6 体制移行検討期 -2016（平成 28）年度-

2016(平成 28) 年、油津商店街振興会が経済産業省により「はばたく商店街 30 選」に選定された。IT 企業誘致も実績が積み重なり、油津港のクルーズ船寄港回数も頻繁になって、さらにまちの活気を後押しするように、広島カープが 25 年ぶりにリーグ優勝を果たした。商店街では優勝までの連日、パブリックビューイングが行われ、優勝パレードには約 12,000 人が詰め掛けるなど、かつての商店街を思わせる盛況ぶりが続いている。

ハード面においては、複合ビル「Itten ほりかわ」が完成した。市民活動支援センター「創客創人センター」や子育て支援センター「ことこと」、旧ゲオ跡地を利用した「日南市観光案内所」等、油津の新たな顔が誕生した。

中でも、子育て支援センター「ことこと」は、「飢肥杉を活用した日本一の木育子育て支援センターを目指して」との基本方針のもと、東京おもちゃ美術館を手掛けたパワープレイス株式会社の設計により、新しい木育実践の場として誕生する。2015(平成 27) 年 8 月のワークショップ開始以来、子育て支援センターに係るスタッフ・子育て世代の市民はもちろん、市内の高校生や地元油津の自治会長らを参加者として、飢肥杉のおもちゃづくりやスギコダマづくり、昔遊び体験や運玉づくりなど、様々な世代の市民が子育て支援施設誕生に向けて、丁寧に準備を重ねてきた。ハード整備に偏重しない油津まちづくり 5 年間の成果が次の世代へと引き継がれる基盤は、2017(平成 29) 年 4 月、いよいよ完成を迎える。

平成 28 年度は、中心市街地活性化事業の最終年度として「体制移行検討期」として重要な局面を迎えた。まち会議 WG やテナントミックスサポート事業委員会では中心市街地活性化事業終了後の油津まちづくりのあり方や体制について一年間かけてじっくりと議論が行われた。

- 関連トピック 18. 新たな観光客の急増（広島カープ・クルーズ船など）【高橋貴】
 19. サイン整備 完了 【竹下】
 20. 観光 3 拠点リニューアル（ゲオ跡地、赤レンガ館、堀川資料館）【竹林】
 21. 複合ビル Itten 完成・オープン 【藤井】
 22. 市民活動支援センター 開設 【谷口】
 23. 子育て支援施設オープン 【森山】



複合ビル Itten ほりかわ竣工式の様子



油津 Yotten での「高校生木育デザインプロジェクト」成果発表報告会

【参考】油津5年間のまちづくり年表

年度(西暦)	月	出来事
平成24年度 (2012)	4	事務局協議 開始
	6	アーケードこども館 開設
	7	事務局協議にて「油津まちづくり会議基本方針五箇条」提示 油津まちづくり会議ワーキング 設置 (日南市中心市街地活性化事業チーフディレクター：九州大学・高尾忠志氏) 日南市庁内まちづくり懇談会(通称；まち懇) (①7/4、②9/13、③10/12、④12/18、⑤2/6)
		油津まちづくり会議 設置 (委員長：吉武哲信氏)
		日南市活性化ネットワーク(通称；日活)プレイベント「わけしの集い」実施 「油津まちづくり行動計画(案)」提示
		10 日南市活性化ネットワーク(通称；日活)プレイベント「わけしの集い」実施 「油津まちづくり行動計画(案)」提示
	11	内閣府 日南市中心市街地活性化基本計画 認定
平成25年度 (2013)	4	着地型観光勉強会 (講師：久留米まち旅博覧会 高山美佳氏) テナントミックスサポートマネージャーの公募
	5	テナントミックスサポート事業委員会 設置 (委員長：高尾忠志氏)
	6	テナントミックスサポートマネージャー 木藤亮太氏を選定 交通部会 設置
	8	まちなかフリースペース Yotten オープン (アーケードこども館リニューアル) 「日南の幸開き」委員会 設置 第1回 夢ひろば利活用検討ワークショップ
		夢ひろば利活用検討ワークショップ 水遊び・涼空間 実証実験
		5 中心市街地活性化庁内勉強会 (対象：市役所全職員)
	9	観光勉強会 (講師：JTB総合研究所・河野まゆ子氏)
	11	第1回 油津オクサマ会議
	2	「日南の幸開き」 スタート
	3	「(株)油津応援団」 設立 「油津商店街応援団KITOTICKET」 開始
		油津地区都市デザイン会議 閉幕 油津まちづくり会議と統合
	4	「TABURATSU COFFEE」 オープン (設計：田村 晟一朗氏)
	5	デザイン部会 設置 (会長：鮎川透氏)
平成26年度 (2014)	8	多世代交流モール事業が経済産業省の商店街まちづくり事業に採択
	9	第1回 交通部会研修会 (講師：国土交通省・清水喜代志氏)
	11	第1回 中心市街地活性化事業シンポジウム 開催 第1回 「港町油津 “へえ～” “ほお～” まちあるき」 第2回 「港町油津 “へえ～” “ほお～” まちあるき」 第1回 ウォーキングレッスン (講師：小野寺MARIKO氏) 油津赤レンガ館 2階コワーキングスペース オープン
		12 二代目湯浅豆腐店 オープン
	1	第2回 交通部会研修会 (講師：富山市・京田憲明氏)

年度(西暦)	月	出来事
平成27年度 (2015)	4	油津軒下イロドリ市
	7	土曜夜市 復活
	8	自転車ライフ談議所 設置 (管理人：永村景子氏)
		第2回 ウォーキングレッスン (講師：小野寺MARIKO氏)
	9	第3回 「港町油津 “へえ～” “ほお～” まちあるき」
	11	「油津Yotten」「あぶらつ食堂」 オープン (設計者：水上哲也氏)
		第3回 ウォーキングレッスン (講師：小野寺MARIKO氏)
		日南市中心市街地活性化シンポジウム 「自分のまちは自分で〇〇 私はこんげしてえとよ」 開催
	12	「ABURATSU GARDEN」 オープン
	2	日南市地域振興課による餌肥杉を用いたサイクルラック設置の社会実験を開始 広島カープの春季キャンプ
平成28年度 (2016)	5	油津商店街振興会 経済産業省 「はばたく商店街30選」 選定
	9	第5回 「港町油津 “へえ～” “ほお～” まちあるき」
	10	多世代交流モール (油津yotten+あぶらつ食堂) 日本建築士会連合会賞優秀賞 受賞
	11	広島カープが25年ぶりにリーグ優勝
	12	日南市観光案内所 開設 (ゲオ跡地)
	1	市民活動支援センター「創客創人センター」開設
	2	第6回 「港町油津 “へえ～” “ほお～” まちあるき」
	3	日南市中心市街地活性化まちづくりセミナー “へえ～ほお～まちあるきの今後を考えましょう！” (講師：梅元建治氏)
		油津まちづくり会議 閉幕
平成29年度 (2017)	4	複合ビル「ふれあいタウン Itten ほりかわ」 グランドオープン 子育て支援施設「ことこと」オープン



2017年2月広島カープ春季キャンプ時の様子
天福球場(カープキャンプ球場)と油津商店街を結ぶ「カープー本道」



第6回港町油津まち歩きツアー“へえ～”“ほお～”まち歩き
油津小学校5年生が油津のまちをPRしようと地元で伝わる「弁甲節」の歌と踊りを披露

[illegible]

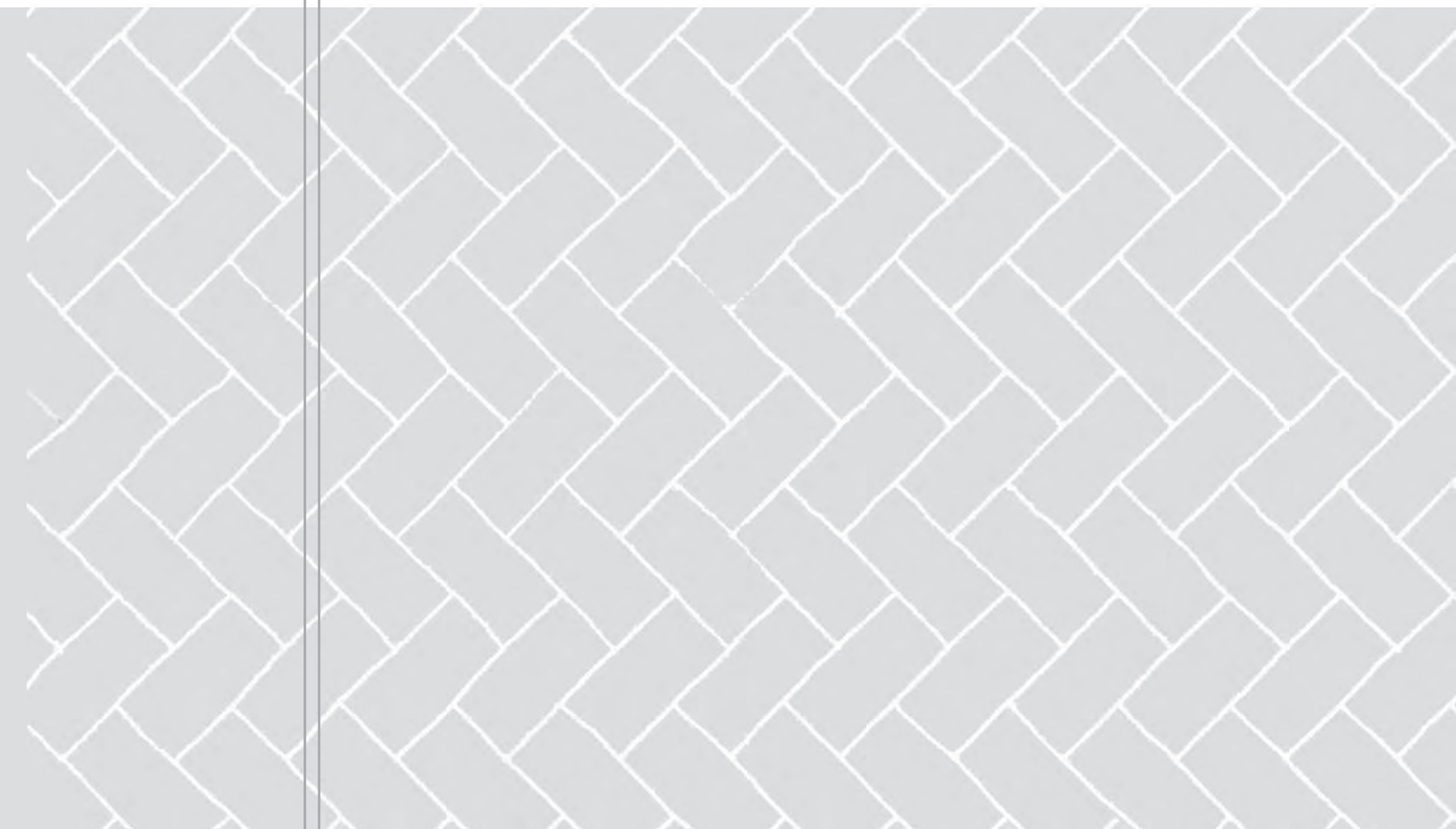
油津地区 中心市街地におけるストックと今後の予定事業との重ね図

実施予定事業（案）
整備済街路区間
整備予定街路区間
中活事業対象エリア

公共公益機関
医療機関
公園
歴史・文化施設
※赤枠：国登録有形文化財

0 0.1 0.2 0.3 0.5 1.0km

② 中心市街地活性化による 油津まちづくりの評価



(1) 中心市街地活性化事業の推進体制に関する評価

日南市中心市街地活性化事業（以下、中活事業）の推進体制が年次をおって構築され、変化してきたことは「中心市街地活性化事業 5年間の取組みの流れ」で述べた通りである。その中で、第2部で述べられるように各事業の担当職員や専門家、市民の尽力によって様々な成果が成し遂げられてきた。ここではそうしたプロセスを実現してきた中活事業全体の推進体制について、総括的に評価して特徴的であった点について述べる。

①基本方針の明示とオープンな場づくりによる意識の共有

油津まちづくり会議（以下、まち会議）では、2012年6月に開催された準備会（中活協議会と都市デザイン会議の意見交換会）で「油津まちづくり基本方針五箇条」、同年8月の1回目でまち会議の運営方針、10月の2回目において「油津まちづくり行動計画（案）」が提示され、早い段階で中活事業推進に関わる基本方針や個別事業同士の関連性が関係者で共有された。あわせて、市民ヒアリング、+C、テナントミックスサポート事業や「港町油津“へえ～”“ほお～”まち歩き」等の個別事業における市民参加機会の展開、市民向けシンポジウム等が積極的に行われ、オープンな場づくりによる事業関係者や市民も含めた意識共有が進められた。

②縦串・横串を刺す関係者調整

中活事業は、各団体の代表者等から構成される「油津まちづくり会議」、各事業の担当で構成される「同ワーキング」、市民が主体となって事業に参加する「個別事業」（テナントミックスサポート事業や「港町油津“へえ～”“ほお～”まち歩き」等）によって、「人」と「事業」を縦方向、横方向につなぎ合わせる体制となっている。まちづくりの現場ではどうしても縦割り、横割りとなり、連携や協働が十分にうまくいく、意思決定にもブレが生じやすいが、まち会議の三層構造はそうした点を補うために有効であった。

③適材適所のチームビルディング

まち会議委員長に吉武哲信氏、同WG座長に中活事業チーフディレクター（以下、CDとする）の高尾忠志氏、デザイン部会に鮎川透氏、小野寺康氏、徳田光弘氏、テナントミックスサポート事業委員会に村岡浩司氏、米田誠司氏、田鹿倫基氏、吉武氏、高尾氏、テナントミックスサポートマネージャに木藤亮太氏、（株）まちづくり会社に藤井伸行氏、交通部会に萩原岳氏、へえ～ほお～まち歩きやウォーキングレッスンに辻喜彦氏、永村景子氏らが専門家として配置され、事業主体である行政職員や市民とともに各事業を推進してきた。官民協働の場に専門家が適切に配置され、市職員や市民と緊密なパートナーシップを築いた点が大きな特徴であった。

④体制を変化させるプロジェクトマネジメント

中活事業の推進にあたっては、状況に応じてまち会議の規模を縮小し議論しやすい場としたり、油津地区都市デザイン会議の閉会にともないデザイン部会を設置したり、交通部会や自転車ライフ談義所、観光アクションプランや日南の幸開き検討等の場を設置・閉会する等して、試行錯誤しながら毎年度推進体制が見直されてきた。結果的にはこうした体制を変化させるマネジメントが、時代や状況のスピーディーな変化に対応したまちづくりを実現させたと評価できる。

⑤不動のWGが担うディレクション機能

以上に述べた①～④までの点を企画・運営していたのがまち会議WGとその座長であるCDである。5年間の事業期間で唯一変化しなかったのがWGとCDであり、毎回4～5時間に渡る議論に関係事業の担当者全員が参加し続け（5年間で30回開催）、意識共有、CDのディレクションによる事業内容やプロセスの見直し、事業間の調整、検討体制の見直し等を実践してきたことが中活事業の様々な成果を生みだしてきたと言える。また、中活事業の評価や中活事業後の方針についてもWGが中心となって検討が行われてきた。

【参考】

油津まちづくり会議 基本方針「五箇条」

- 一. 油津地区は、日南市の「中心市街地」としての役割を担っており、本会議で検討される事項は、油津地区の地域社会、地域経済の向上を目的とすると同時に、日南市全体の地域社会、地域経済の向上に貢献するものでなければならない。
- 二. 本会議で検討される事項は、他地域の物まねではなく、「日南市オリジナル」の豊かな暮らしの創造を目指すものでなければならない。その際、本会議で目指す「豊かさ」については、経済的なものに加えて、精神的なもの、文化的なものなども含めた総体的なものとして考えることを基本とする。
- 三. 本会議では、今後、中心市街地である油津地区と市内外の各地域がどのように連携していけるのか、その中で、油津地区においてどのような施策・活動を展開することが効果的であるのかについて、検討を行なうものとする。
- 四. 本会議では、日南市における次世代の暮らしを常に意識し、10年後、20年後、50年後の日南市の地域社会と地域経済に貢献することを基本方針としながら、今年、来年、再来年と言った現在から近未来に具体的に何ができるのかについて検討することとする。
- 五. 本会議を軸とした油津地区におけるまちづくりの取り組みは、今後、日南市の他地域におけるモデル的な存在となることを意識して、官民協働におけるまちづくりの推進方策について、常に評価、検証を行ないながら検討を進めることとする。

(2) 中心市街地活性化事業がまちづくりに及ぼした効果

中心市街地活性化基本計画では、(1)1日平均歩行者・自転車通行量および(2)定住人口が目標指標とされている。一方、市民活動や取組みなど、現状の油津の賑わいを形成している要因は、この2つの指標には収まらない。ここでは通行量(⑩)や人口(⑦)に加え、各種データ(①～⑥)を用いて、5年間の中心市街地活性化の効果を示す。

⑩通行量 ～商店街エリアの通行量は増加、堀川周辺エリアは減少傾向～

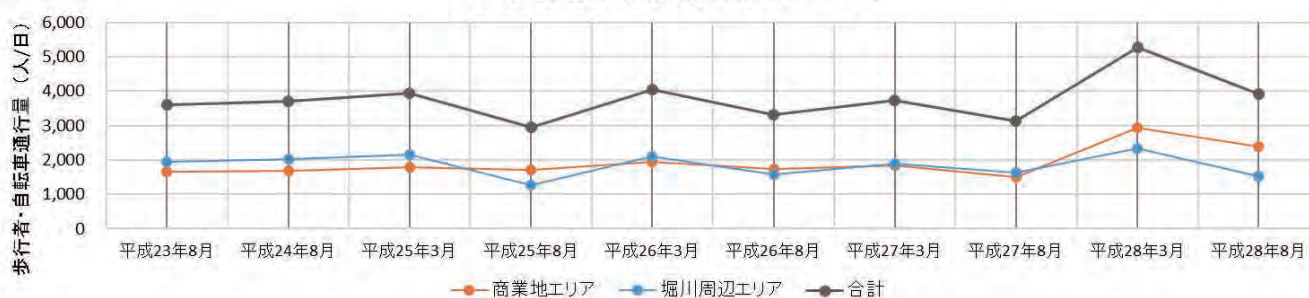
対象エリア全体の1日平均歩行者・自転車通行量(以下、通行量)は多世代交流モールオープン後の平成28年3月の通行量は過去最大値となり、日南市中心市街地活性化基本計画に掲げた目標値4,100人/日を大きく超える5,265人となった。その後の最新値3,914人/日は基準値3,599人/日より300人程度増加したものの、目標値には200人程度、届いていない。ただし例年に比べると値は高く、気象条件の悪い夏場にも、その効果が継続して表れた。これはハード整備の効果を持続するための努力と、ソフト面における賑わい効果を生み出すための基盤づくりが着々と行われてきた成果であるといえる。

エリア別にみると、平成23年8月には堀川周辺エリアの通行量が300人程度、商業地エリアの通行量を上回っていたものの、平成25年8月には値が逆転している。8月分のみ値を見ると、平成25年8月頃から商業地エリアと堀川周辺エリアのグラフが逆転するようになっており、夏場でも商業地エリアの通行量が大幅に減少することがほとんどない。一方、堀川周辺エリアでは3月と8月の増減が激しい。気象条件に大きく左右されていることが分かる。3月のみのグラフを比較すると、平成27年3月に商業地エリアと堀川周辺エリアのグラフが逆転しており、商業地エリアの増加傾向と、堀川周辺エリアの減少傾向が決定的に表れる。

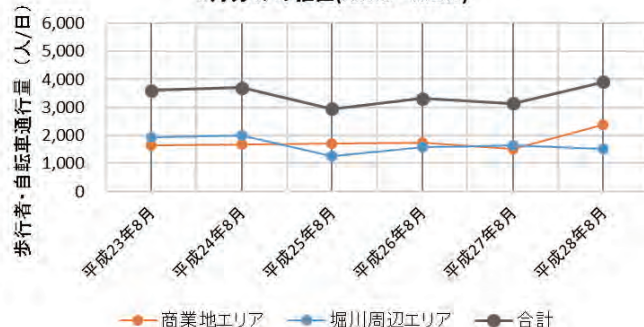
各エリアの通行量を見ると、堀川周辺エリアでは、当初の値1,938人よりも減少している。平成28年3月には目標算定値2,198人を上回る2,327人となったものの、平成28年8月には1,526人まで減り、全体的には減少傾向にある。これに対し商業地エリアは、平成27年8月頃に値が下がっているものの、平成28年3月2,938人および8月2,388人はともに目標算定値の1,904人を上回っており、当初の1,661人から増加している。

以上より、基本計画策定時に観光客の増加を見込んでいた堀川周辺エリアでは、基本計画に示された対策が期間中には実現されず、通行量は計画作成時に予測された通りの減少している。一方、重点的に取り組んだ商業地エリアでは、通行量は目標算定値を大幅に超え、大健闘している。商業地エリアの通行量が大幅に増加したことにより、中心市街地全体の通行量は増加したことになる。

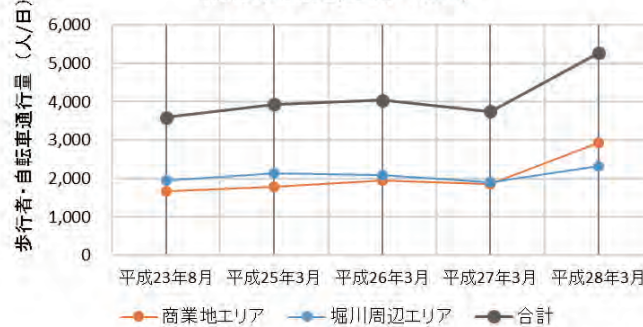
a. 1日平均歩行者・自転車通行量(H23.8～H28.8)



b. 1日平均歩行者・自転車通行量
8月分のみ抽出(H23.8～H28.8)



c. 1日平均歩行者・自転車通行量
3月分のみ抽出(H23.8～H28.3)



①歴代 Yotten 来場者数 ～こどもの居場所、Yotten の変遷にみる賑わいプロセス～

商店街の賑わい創出のプロセスは、油津 Yotten の来場者数推移に表れている。中心市街地活性化に関する事業が始まった平成 24 年 6 月に開設されたアーケード子ども館の来場者数は、オープン時の 424 人をピークとして、平成 25 年 7 月には 98 人に落ち込んでいた。この状況は、アーケード子ども館がまちなかフリースペース Yotten としてリニューアルオープンしたことで一変する。

まちなかフリースペース Yotten は、テナントミックスサポートマネージャーに着任した木藤亮太氏と、運営者である日南まちづくり株式会社が連携し、テナントミックスサポート事業 1 店舗目としてリニューアルされた。リニューアルオープンした平成 25 年 8 月の来場者数は 879 人であり、前月の 9 倍に及んだ。商店街を訪れた人の打合せ・休憩スペースや、近隣の小学生たちが放課後に宿題やゲーム機を携えて集う場所となるなど、アーケード子ども館とは異なる利用形態も生まれた。その後 4 ヶ月間は 800 ～ 900 人の来場者数をキープしたものの、同年 12 月以降は 600 人台に落ち着く。ABURATSU COFFEE がオープンした平成 26 年 4 月以降、まちなかフリースペース Yotten の来場者数は再び 900 人を超える。同年 5 月には過去最高の 1,171 人を記録するものの、6 月以降は再び 600 ～ 700 人台に落ち着いた。以後、二代目湯浅豆腐店がオープンした平成 26 年 12 月の 875 人、土曜夜市が復活した平成 27 年 7 月に 778 人、と来場者数は比較的多かったものの、減少傾向にあり 400 人 ～ 700 人台を推移した。

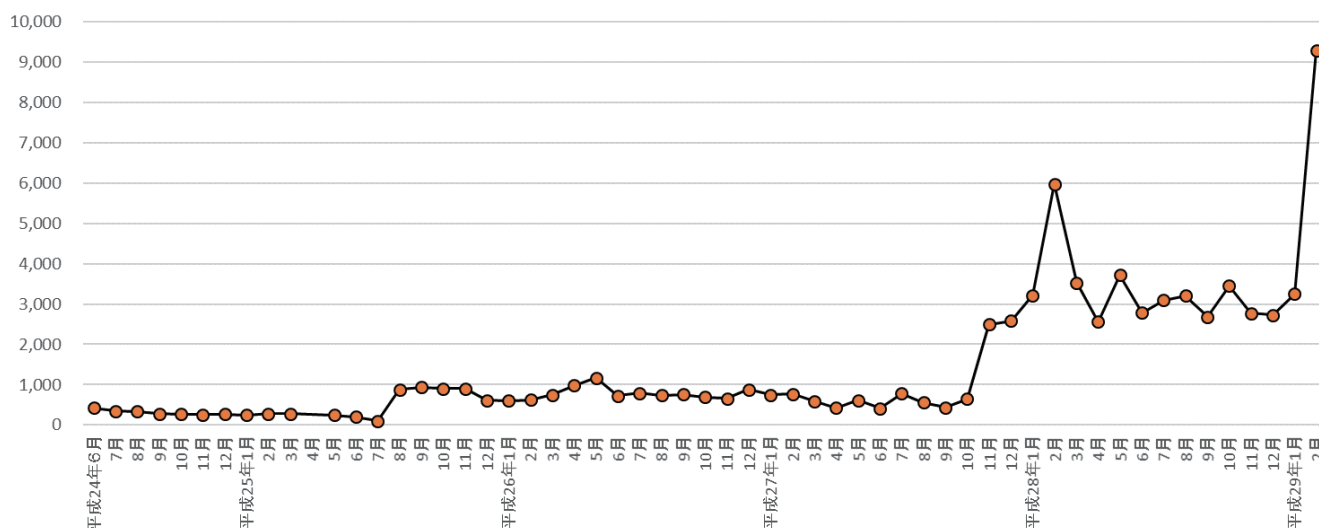
来場者数が劇的に変化したのは、多世代交流モール油津 Yotten へと移行した平成 27 年 11 月である。多世代交流モール油津 Yotten のオープン後、来場者数は 2,500 人以上を保っている。なお、来場者数の月毎の振れ幅は数百人から数千人オーダーで変化しており、最も激しいのは広島カープの春季キャンプが実施される 2 月である。オープン後、初の春季キャンプとなった平成 28 年 2 月の来場者数は 5,978 人と平常時の 2 倍近くになった。また翌年には広島カープのリーグ優勝を果たし、優勝直後の春季キャンプが実施された平成 29 年 2 月は 9,299 人に上った。商店街そのものの誘客効果の向上が、広島カープ春季キャンプの誘客力を高めるといふ相乗効果をもたらしていることが分かる。

以上より、当初は子どもの遊び場としての機能しか設定されていなかった施設が、多様な利用に供するスペース、最終的には商店街を訪れる誰もが立寄る場所へと変化したことが分かる。



多世代交流モール油津 Yotten
平日の放課後に勉強する姿も見られる

アーケード子ども館・まちなかフリースペース Yotten・多世代交流モール油津 Yotten の来場者数推移 (H24.6～H29.2)



②新聞掲載数 ～新聞にみる油津の話題性と市民の活躍～

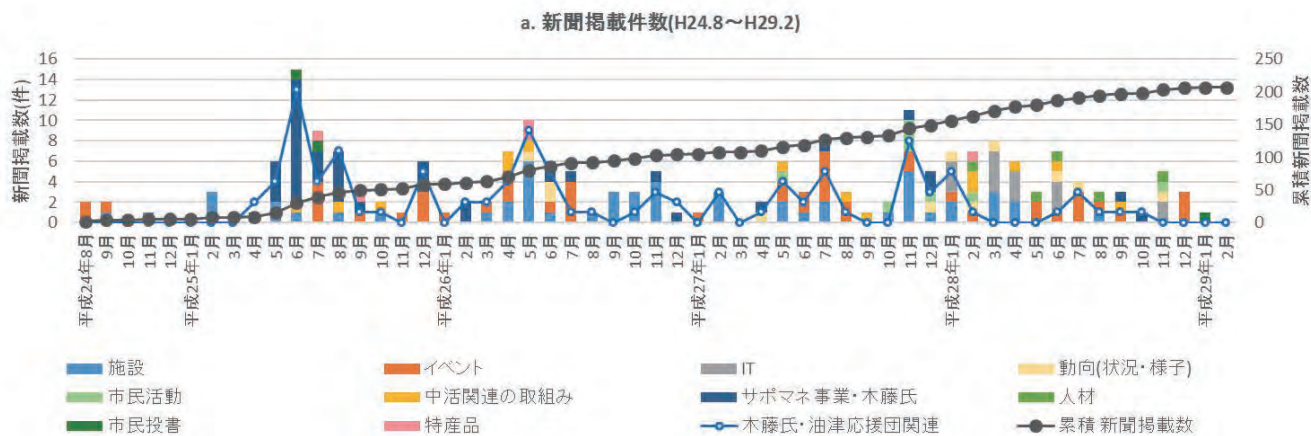
商店街の賑わい創出のプロセスは、油津が新聞記事にも見て取れる。

a. 新聞掲載数をみると、油津へのメディアの着目度が上昇したことが見て取れる。平成24年8月～平成29年2月の期間において、油津や商店街が取り上げられた新聞記事（朝日新聞、西日本新聞、毎日新聞、宮日新聞、読売新聞）は、累積で207件にのぼる。そのうちテナントミックスサポート事業や木藤氏、株式会社油津応援団に関する記事は107件であり、月毎の掲載件数を水色の折れ線グラフで示した。なお、その中から直接的にテナントミックスサポート事業や木藤氏が紹介された記事の掲載数は棒グラフにも示してある。

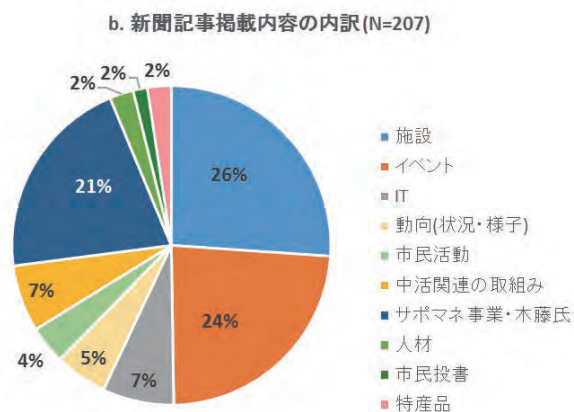
これまでほとんど取り上げられなかった油津が、新聞に頻繁に取り上げられるようになるのは、テナントミックスサポートマネージャー（以下、サポマネ）の公募が話題となった平成25年5月である。平成25年6月には、15件の新聞掲載があり、うち12件はサポマネ選考会や木藤氏に関する内容であった。このほか、新聞掲載数が10件を超えるのは、ABURATSU COFFEE オープン翌月（平成26年5月）の10件、多世代交流モール油津 Yotten がオープンした平成27年11月の11件であり、それらの新規店舗・施設のオープンに関する記事が半数であった。平成25年度はテナントミックスサポート事業・木藤氏に関する記事が比較的多く、平成26～平成27年度にかけては、施設に関する内容が多い。平成28年1月以降はITに関連する内容が急激に多くなっていく。平成28年10月以降は市民活動や人材に関する記事が増えており、油津での市民の活躍が見て取れる。

b. 掲載内容の内訳をみると、施設やイベントに関する記事が全体の半数を占めている。テナントミックスサポート事業の割合も20%を超える高い値を示している。中心市街地活性化事業に関連する、あるいは事業から派生した事柄を紹介する記事が多く、中心市街地活性化事業が話題性を持つ取組みを展開していたことがうかがえる。

以上より、テナントミックスサポートマネージャーの公募・選考が中心市街地活性化事業の話題性を高め、木藤氏の着任後は、商店街再生の経過に市民の興味・関心を引き寄せ続けたことがうかがえる。



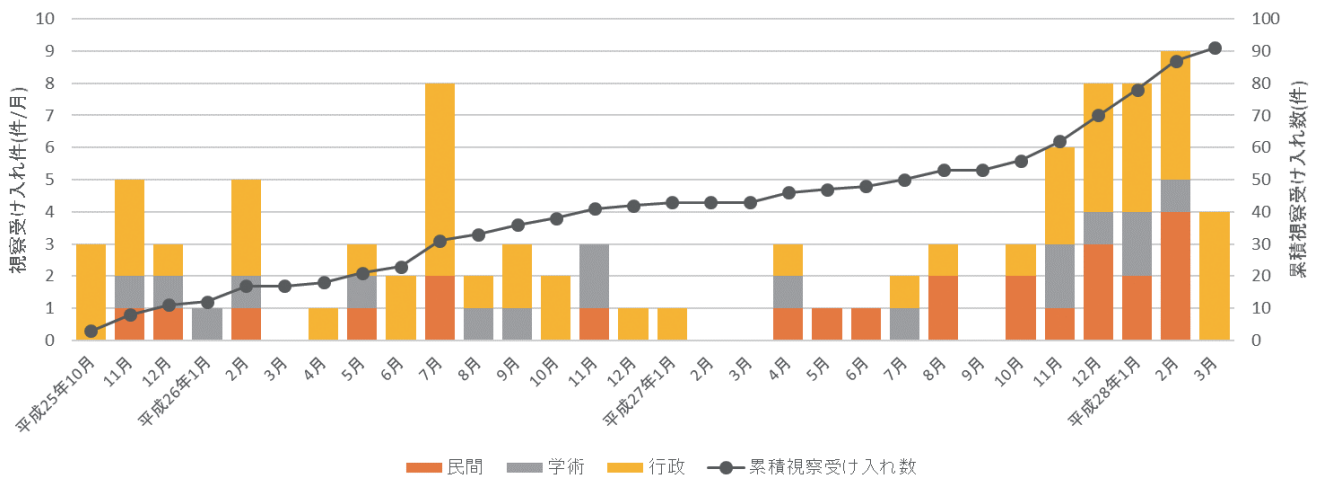
テナントミックスサポートマネージャー公開2次審査の様子



③視察受け入れ数 ～木藤氏および油津応援団による視察受け入れ数増加と取組みの注目度向上～

木藤氏の着任以後、商店街への視察件数は100件近くに上る。視察に訪れる主体は行政機関が多く、累積50件は全視察件数の半数を超える。平成27年度に入ると民間の視察受け入れ数が増えており、多世代交流モール油津 Yotten がオープンした後の平成27年12月や平成28年2月は、その傾向が特に強い。ABURATSU COFFEE や多世代交流モール油津 Yotten といった、商店街のハード面で大きな変化があると、視察の受け入れ件数も大きく増えるとともに、視察受入れ時期にも変化が生じた。受入れ体制が影響するものの、ハード面での話題性が、視察受入れ件数に現れてきたことがわかる。平成28年度10月には、視察増加を切り口とした新聞記事が掲載されるなど、全国的にも油津商店街の再生のプロセスが先進性を帯びていた様子が見て取れる。

サポマネ木藤氏および油津応援団 視察受け入れ数(H25.10～H28.3)



視察風景

④ イベント件数 ～来街のきっかけづくり、イベントの頻度とタイプがもたらすまちづくり姿勢の変化～

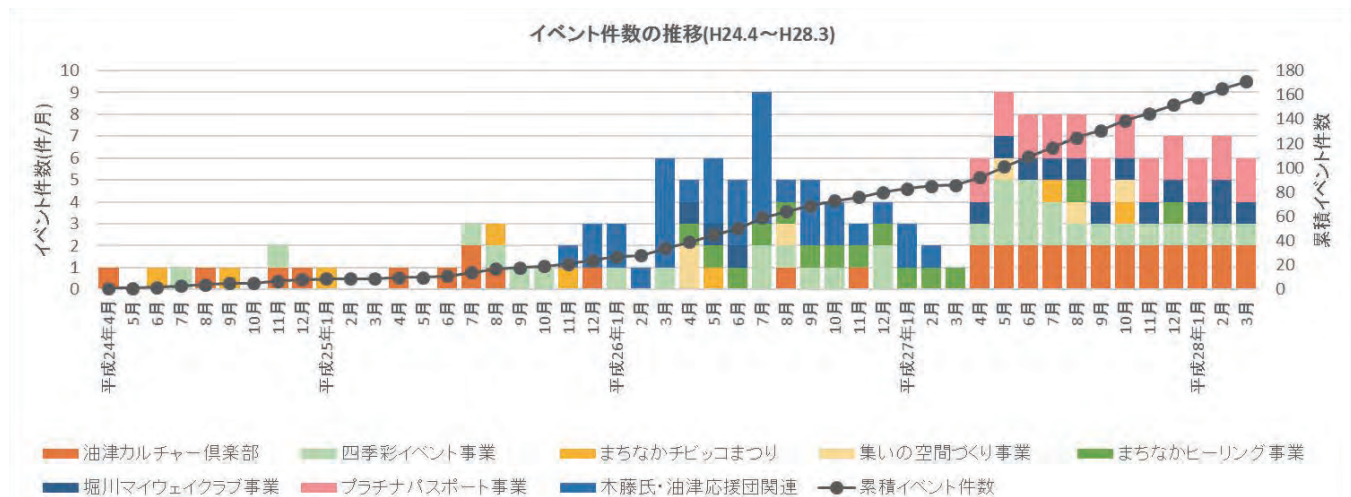
商店街の賑わい創出プロセスにおいて、ハード面の変化は話題性が高いものの、一方で来街を促し、賑わいを持続するには、ソフト面の取組みが不可欠であった。平成24～27年度のイベント件数の推移をみると、その戦略と努力が見て取れる。平成24年度には9件と月平均が1件に満たなかったイベント件数は、平成25年度25件(月平均2.1件)、平成26年度52件(月平均4.3件)、平成27年度85件(月平均7.1件)と年々増え続け、4年間の累積イベント件数は171件となった。平成27年1～3月のイベント件数が1～3件と比較的少ないが、同時期はまちなかフリースペースYotten来場者数(前出)も減少している時期であり、相互の関連がうかがえる。



定期的開催される「軒下イロドリ市」「土曜夜市」のチラシ

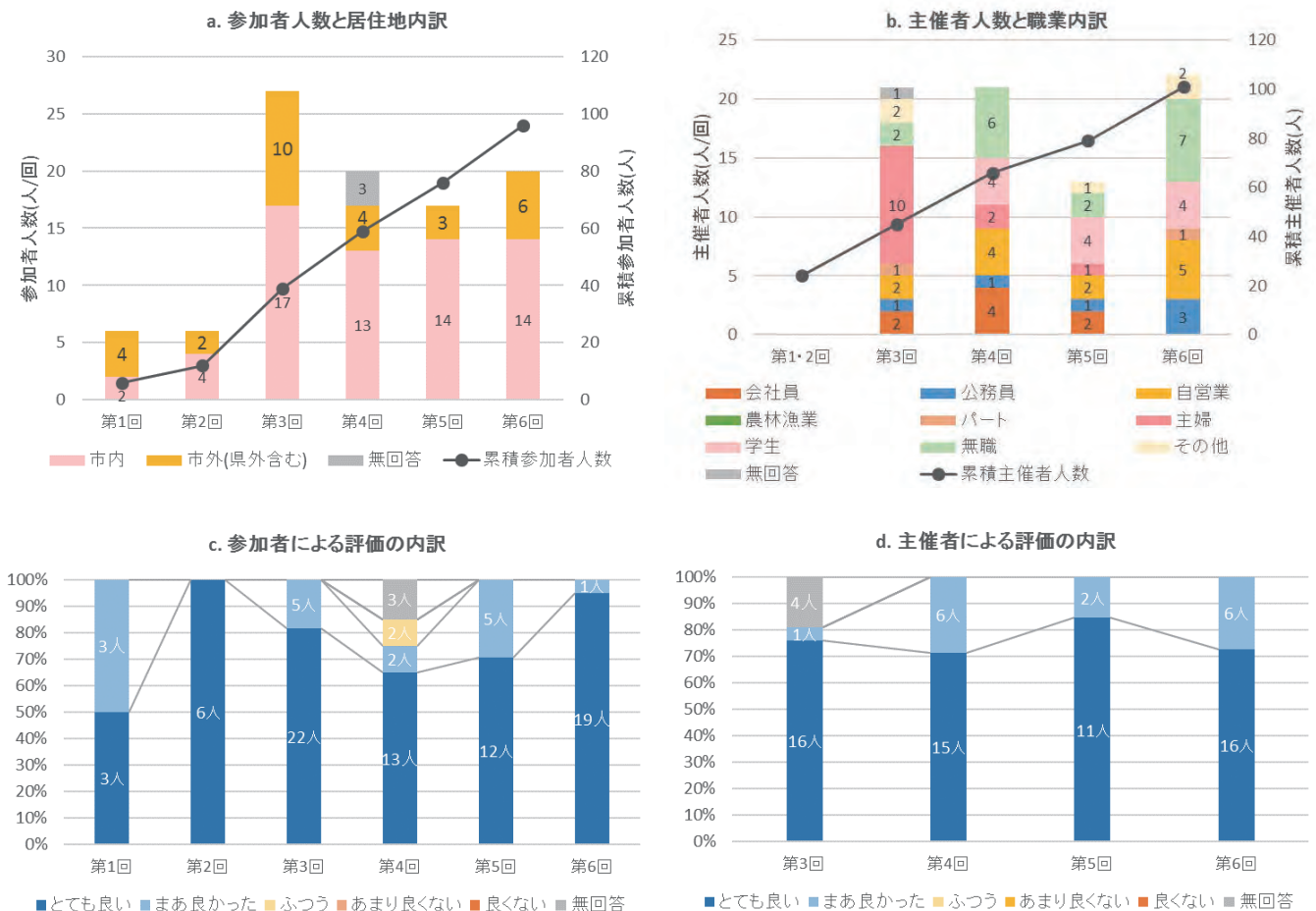
平成24～25年度は大規模集客イベントが中心であり、イベント参加人数は2万人～3万人と非常に多かったが、イベント件数は少ない。一方、平成26～27年度はイベント参加人数が3,000～5,000人程度と、前年度までを大きく下回ったものの、定期的なイベントや少人数でのイベントが増加している。平成27年度は油津軒下イロドリ市や土曜夜市など、定期的開催されるイベントが開始・定着したほか、10～20人程度の少人数でのワークショップイベントが多数企画された。このように、イベント内容は、単発的な大規模集客型から、少人数ながらきめ細かなニーズに応えるものへと変わっている。木藤氏の着任や株式会社油津応援団の設立以後、「油津商店街応援団 KITOTICKET」や「油津オクサマ会議」など、まちづくり活動に縁遠かった世代・市民が参画する機会が増える。さらに商店街では10代以下を対象としたイベントや、中高生が企画・運営で活躍する機会が増えたが、こうした変化に敏感に反応したのが、10代以下の若い世代であった。小学生が木藤氏にまちづくり企画書を持ち込むなど、まずは若い世代のイベントやまちづくりに対する姿勢が、参加するだけの受動姿勢から、自ら考え行動する能動姿勢へと変化したことが見て取れる。

以上のように、実施するイベントの内容・性質は状況に応じて変化している。中心市街地活性化事業が始まった頃は、油津や商店街を知ってもらう・出かけるきっかけづくりとして、対象者や内容も多様に展開されており、これまで商店街に縁遠かった人々が、油津や商店街へ出かけるよう仕向けている。油津や商店街の認知度が高まると、日常的に商店街に出来る仕掛けとして定期的なイベントの増加や、市民一人ひとりの嗜好やニーズにきめ細やかに対応できる少人数のワークショップが増えるなど、油津や商店街の状況に応じて、段階的にイベントが実施されてきたことがわかる。



⑤「港町油津“へえ〜”“ほお〜”まちあるき」参加者・主催者データ ～地域コミュニティの性質の変化～

イベントやまちづくりに対する姿勢の変化は、次第に油津地区住民にも浸透してくる。「港町油津“へえ〜”“ほお〜”まちあるき」は、油津地域協議会主催で、平成26(2014)年度に2回試行され、その後、平成27(2015)年度、平成28(2016)年度に2回ずつ、3年間で計6回開催されている。第1回および第2回の試行段階では、参加者6人ずつの少人数で開催し、第3回以降は20人程度で実施している。第3回は27人の参加者があり、過去最高となった。平成29年2月までに計6回が企画・実施され、累積参加者数は96名に上る。主催者側は、試行段階では延べ24名が参加、第3回以降は13名〜21名で推移しており、累積主催者数は101名と参加者数を上回った。第4回以降は中・高・大学生の参画も少しずつではあるが、見られるようになった。なおこの人数には、第4回に学習成果を発表した油津小学校児童や先生方は含まれていない。これらを考慮すると、これまでにのべ100人以上が、「港町油津“へえ〜”“ほお〜”まちあるき」の運営に携わり、参加者との交流機会を得ていることとなる。参加者、主催者数の累積人数を合わせると、油津地区内外の延べ200人近くが「港町油津“へえ〜”“ほお〜”まちあるき」により交流したこととなる。実施後の評価も、参加者・主催者とも、毎回「とても良い」「まあ良かった」が大半を占める高評価であり、質の高い交流機会が生まれていることがわかる。このまちあるきの特徴である「請負人」の発掘や、食事の提供、小学生の発表など、まちづくり活動に馴染みのない地区住民が参加できる仕組みがうまく機能し、“観光業のプロ”ではなく“地域の玄人”が活躍している。地域住民が呼び水となる交流人口が創出されているものと思われる。さらに地域住民にとっては、この取り組みを通じて地域の記憶を掘り起こし、共有し、活用することで、エリア(地区や自治会)を越えた歴史・文化的なコミュニティが築かれつつある。こうしたコミュニティ活動に、油津小学校の児童や中・高・大学生が参画することもまた、現時点でのコミュニティ力強化に加え、将来を見据えたまちづくりにとって、大切にすべき変化といえる。

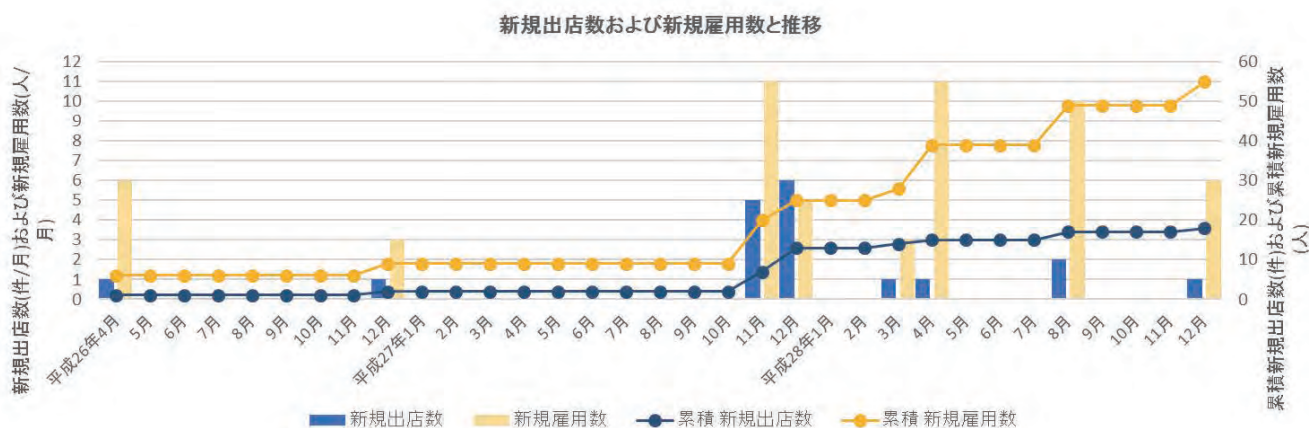


⑥新規出店数および新規雇用者数 ～足を運ぶ場所として機能を取り戻しつつある油津商店街～

商店街を取り巻く市民や、油津地区の住民にとって、油津は単なる居住地ではなく、暮らしや活動の舞台となりつつある。このような大小の変化が折り重なって、油津商店街を仕事場として、地区外の人であっても生活の中心に油津を選ぶ人が現れている。この様子は、新規出店数・新規雇用数に見て取れる。

平成26年度には4月にABURATSU COFFEE、12月に二代目湯浅豆腐店が新規出店した。ABURATSU COFFEE 開店に際しては、株式会社油津応援団が設立されたことから、新規雇用数は6人と比較的多くなった。平成27年度は多世代交流モールのオープンに伴い、新規出店数および新規雇用数が増加している。平成27年11月のあぶらつ食堂オープンの4件に加え、まちなかフリースペース Yotten 跡にも新規出店があり、計5件増加、新規雇用も11人と平均2人程度の雇用が生まれた。ABURATSU GARDEN がオープンした翌12月には、6件の新規出店があり、新規雇用数は5人であり、新規雇用は各店舗1人程度となった。ABURATSU GARDEN の営業スペースや営業形態から、コンパクトで小回りの利く店舗として、雇用数よりもむしろ店舗数増に重点が置かれたことがうかがえる。多世代交流モールのオープンにより、油津商店街の店舗の数・種類が増えたことで、これまでよりも様々なニーズに応える環境が整いつつあった。平成28年度に入ると、市が推進するIT企業誘致が加速し、油津商店街にも4件の事業所が置かれた。1事業所あたりの新規雇用者数は5～11名といずれも多く、新規雇用数は飛躍的に伸びている。

新規出店により、多様なニーズに応え得る店舗が増え、次いで事業所も増えていることから、油津商店街に出かけたくなる、身を置きたくなる魅力は向上していることがわかる。さらに事業所の参入により、新規雇用者数も大幅に増加、さらに雇用を拡大する見通しである。油津商店街は現在、「出かける場所」、「働く場所」としての機能を取り戻している状況にあるといえる。



ABURATSU COFFEE のスタッフ（写真；木藤亮太氏撮影）



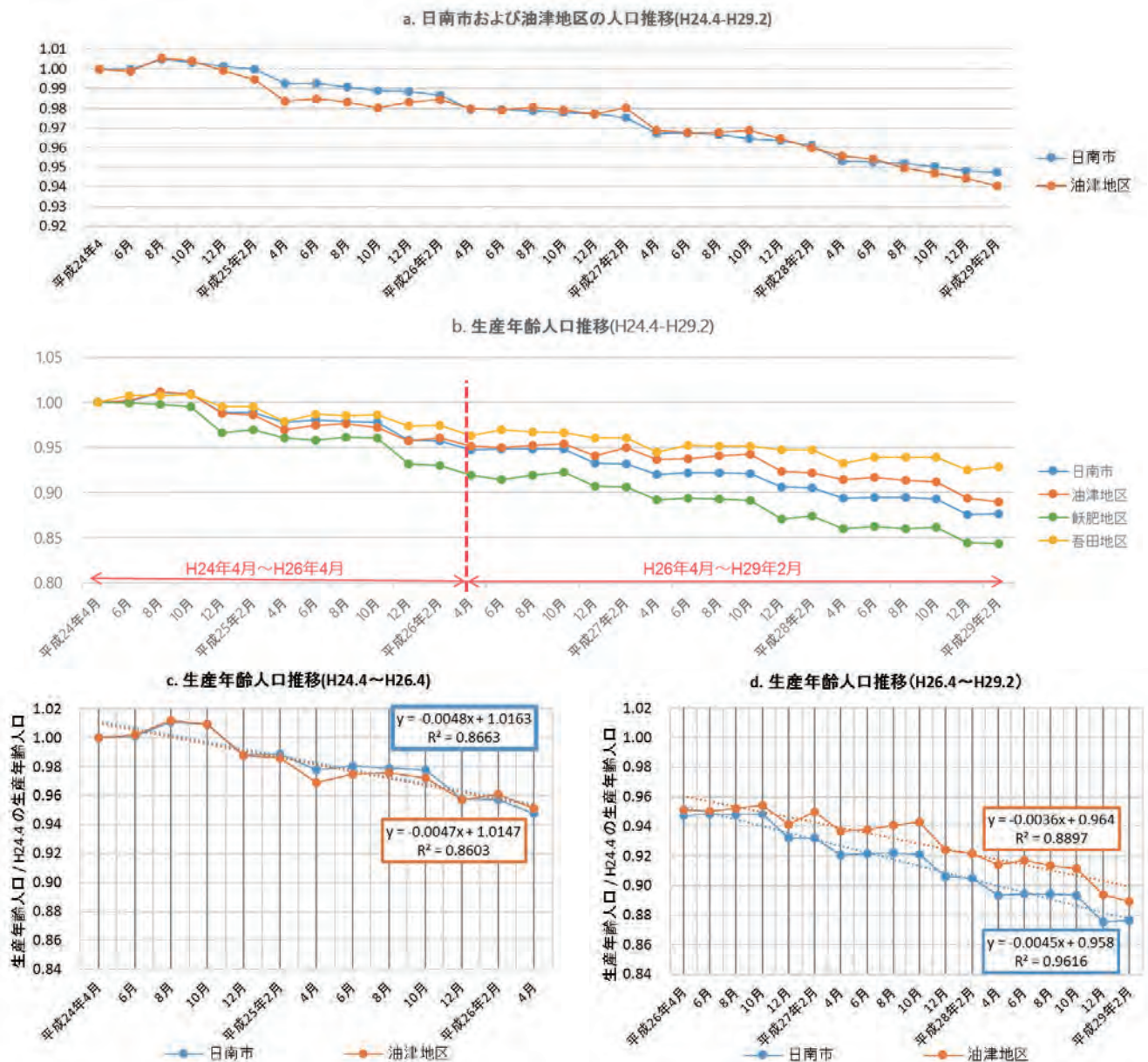
二代目湯浅豆腐店のお昼どきの様子

⑦人口推移 ～油津5年間のまちづくり成果としての人口の減少スピード変化～

中心市街地の定住人口は平成28年10月現在、3,079人であり、基準値3,281人を未だ下回った状態である。ただし世代別に人口推移を分析すると、変化の兆しが見て取れる。

全国的な人口減少に違わず、日南市・油津地区とも生産年齢人口は減少傾向にあるも。一方で平成26年4月に境に、日南市・油津地区ともに、傾きが緩やかになっている。この傾向は油津地区において特に大きく、中心市街地活性化事業の活発化が進んだ平成27～平成28年度にかけて顕著に表れていることから、その事業効果の表れとも見て取れる。また油津地区のこうした人口推移の変化が、日南市全体の値にも影響を与えていることも読み取れる。ただし油津地区では賃貸物件が不足しており、住宅に関する市の補助金もほとんど活用されていない。さらに商店街の新規雇用者の多くは油津地区外に在住している場合が多いのが現状である。

中心市街地活性化事業5年間では人口の増加には至らなかったが、若者が働く場所は創出され、生産年齢人口の減少傾向が緩やかになっている。現在の日南市の人口の社会増減を考慮すると、油津地区の人口が増加傾向に転じるのは、非常に困難な状況にある。それにもかかわらず、生産年齢人口の減少スピードが緩んでいることから、油津から生産年齢人口の転出が減少したことが考えられる。生活環境を考える際に、油津の人々にとって、油津に住み続けるという条件の優先順位が高くなりつつあることが考えられる。



まとめ 中心市街地活性化事業が油津のまちづくりに及ぼした効果

ここまで見てきた④通行量、①歴代 Yotten 来場者数、②新聞掲載数、③視察受け入れ数、④イベント件数、⑤「港町油津“へえ～”“ほお～”まちあるき」参加者・主催者データ、⑥新規出店数および新規雇用者数、⑦人口推移のデータ概観をもとに、中心市街地活性化事業がまちづくりに及ぼした効果を述べる。

油津地区の通行量

1日平均歩行者・自転車通行量は、日南市中心市街地活性化の目標「来てよかった、また来たいまち」の目標指標である。油津地区の通行量最新値3,914人/日(平成28年8月)は、基準値3,599人/日を超えたものの、目標値4,100人/日には届かなかった。基本計画に示された観光施策が実現できず、通行量は堀川周辺エリアにおいて予想通り減少し続けた。一方、商業地エリアでは商店街を中心とした精力的な取組みにより、通行量は大幅に増加、中心市街地全体で見ると、通行量は増加した。中心市街地活性化事業の開始直後には閑散としていた商店街には、確実に人の流れが生まれている。

油津地区の定住人口

日南市中心市街地活性化のもう一つの目標「住みたい、住み続けたいまち」の目標指標である定住人口は、平成28年10月1日現在、3,079人である。目標値3,400人には届かず、基準値3,281人をも下回っている。

一方で5年間の中心市街地活性化事業を終え、油津のまちの様子は明らかに好転した。例えば定住人口は減少し続けているものの、生産年齢人口減少のスピードは緩やかになっている。このことから15～65歳未満の世代の転出率が小さくなっていることが推察される。油津の人々にとって、油津が「住み続けたいまち」へと変わり始めた兆しが見て取れる。

そこで以下では、3つの観点から目標指標では捉えきれない「油津のまちの変化」について述べる。

①日南・油津のPR効果と「来たいまち」への転向

まちなかフリースペース Yotten のリニューアルオープンを皮切りとして商店街に設けられた店舗や施設は、これまで油津や商店街に縁遠かった人々が訪れる「場所」となっている。「場所」で起こる「出来事」の注目度を一気に引き上げたのが、一連のテナントミックスサポート事業である。サポマネの公募・選考過程は市民の興味を惹きつけ、木藤氏の展開する“商店街再生”は話題に事欠かなかった。過去5年間で商店街において開催されたイベントは、“商店街再生”の状況に応じて、集客ターゲットやメニュー、開催頻度が少しずつ変わってきた。巧みな仕掛け(イベント)は、多くの市民にとって、商店街に出かける「きっかけ」を「習慣」へと変えた。こうして生まれた賑わいが、「日南」「油津」のPR効果をさらに高め、視察の増加や広島カープの春季キャンプ時の賑わいに見られるように、全国から「来たいまち」として認知されるようになった。

②市民の活躍機会と交流人口の増加

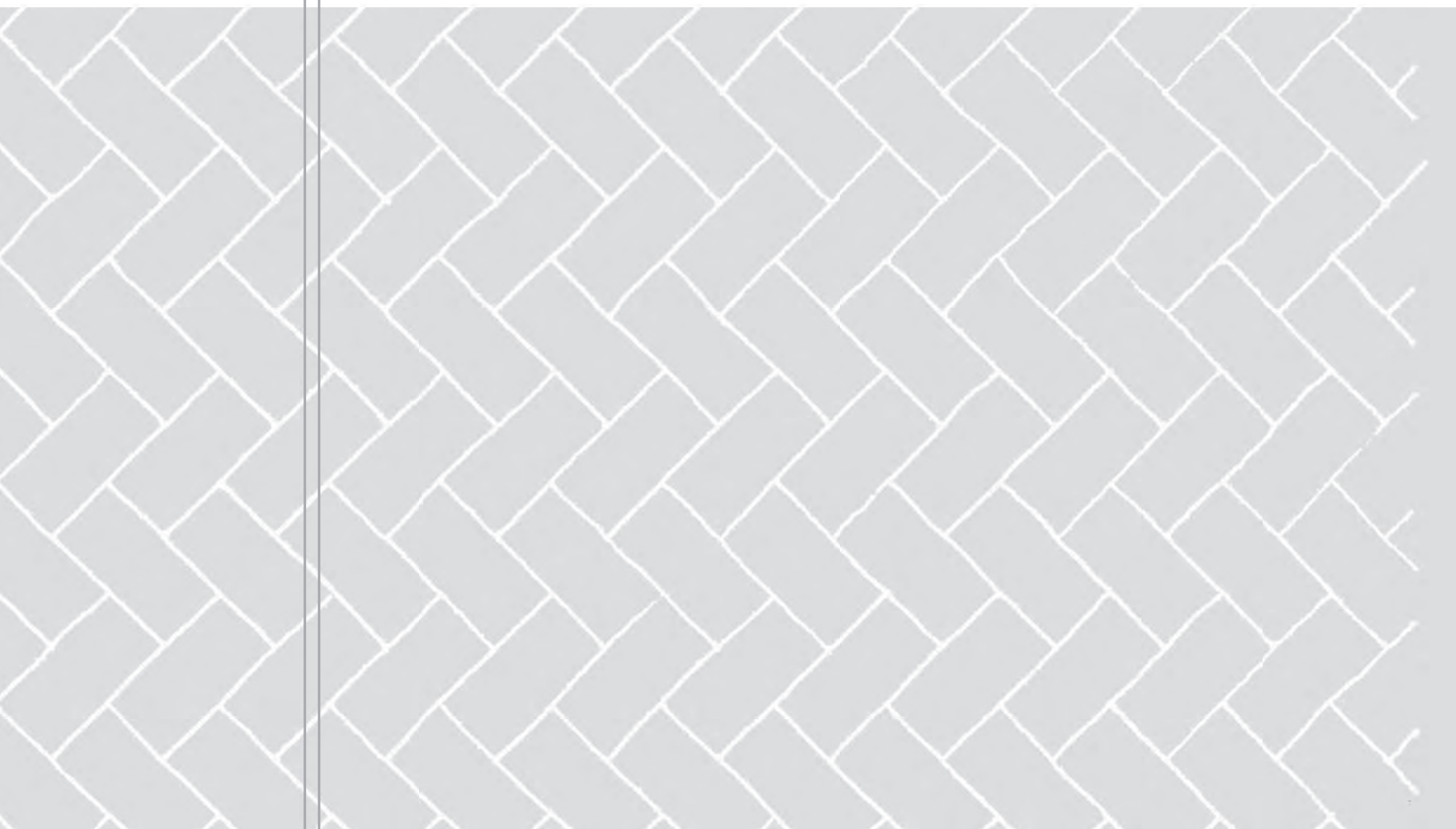
商店街で繰り広げられる様々な「出来事」は、若い世代を中心としてまちづくり活動への参画意識を高め、自ら考え行動する市民を増やした。とりわけ木藤氏や株式会社油津応援団の活躍は、市民にも派生し、まちで活躍することに対する抵抗感を緩和し、敷居を下げることに繋がった。このような意識の広がりや、テーマ型まちづくりのみならず、地域コミュニティでの取組みにもつながった。「港町油津“へえ～”“ほお～”まちあるき」では、油津地域協議会が、自らの地域の記憶を掘り起こし、共有し、活用することで、歴史・文化的なコミュニティへの発展と、交流人口創出に寄与している。

③キャリアデザインの萌芽

商店街の賑わい再生は、商店街の商業機能の再構築のみでなく、これまで商店街にはなかった職業を提供し、新たな職能を受入れている。テナントミックスサポート事業による新規出店や新規雇用は、商店街での挑戦を誘発した。それが呼び水となり、「商売」にとらわれない職種や働き方が生まれ、IT企業やゲストハウスなど、商店街に多様な店舗・事業所や人材が集まっている。地方都市の商店街において、様々なキャリアデザインへの挑戦が始まっている。

第2部

中心市街地活性化事業のあゆみ



① 中活事業 5 年間の取り組み

2012(平成 24)年度以前	中活準備期
2012(平成 24)年度	体制模索期
2013(平成 25)年度	体制拡大期
2014(平成 26)年度	活動人財発掘期
2015(平成 27)年度	拠点整備活発期
2016(平成 28)年度	体制移行検討期

日南市議会 議会事務局
(平成 26 年 4 月～現在)

しらさか あきひと
白坂 昭仁

昭和 49 年生まれ。宮崎市出身。
市外出身であるがゆえに、日南市及び中心市街地の成り立ちや役割を客観的に検証することができた。

【当時の所属】

- ・H18.4～H21.3 旧商工観光課
- ・H19.7～H21.3 旧中心市街地活性化プロジェクトチームメンバー
- ・H20.9～H21.3 旧中心市街地活性化推進室(兼務)
- ・H21.3～H22.3 産業経済部商工課(中心市街地活性化推進室兼務)
- ・H22.4～H24.3 総務部まちづくり推進室
- ・H24.4～H26.3 総務部まちづくり課



1 中活準備期 -2012(平成 24) 年度以前 -

1 中心市街地活性化事業基本計画の策定・認定

江戸時代の本市は、飢肥藩 5 万 1 千石が治める地であり、飢肥藩の台所であった油津地区は、江戸時代から明治時代にかけて、西日本各地から商用で船便を利用する人が多く訪れたことから、堀川運河沿いに旅館や雑貨商、食堂、銀行、呉服店などの商業地帯が自然発生的に展開し、本市の経済拠点を形成していった。

大正時代には、県内で初めてとなる軽便鉄道や上水道が整備されるなど、市内でも先進的に社会基盤整備が進み、昭和に入ると、日南商工会議所や日南郵便局などの公共公益施設が立地し、また、昭和 40 年には、当時としては珍しい近代的な商店街アーケードが建設されるなど、本市の中心市街地を形成していった。

しかし、平成 10 年に大規模小売店舗法が廃止されると、郊外にロードサイド型店舗の立地が進み、それに合わせるかのように中心市街地は空き店舗が増加し、まちの衰退に拍車がかかっていった。

このような中、平成 18 年にまちづくり 3 法が改正されたことを機に、平成 19 年 3 月日南市議会定例会において当時の市長が「庁内プロジェクト会議の設置を検討し、商店会をはじめとする関係団体等の賛同が得られれば、基本計画の策定に向けた体制をつくりたい。」と表明し、これを受け、平成 19 年 4 月には、日南商工会議所を中心とした「日南市中心市街地活性化協

議会準備会(以下、「準備会」という。))が発足された。

ちょうどこの頃、中心市街地に商業ビルを有する事業所が任意で物件の整理を進めていることが判明し、この商業ビルが競売になると落札者によっては、まちの中心部が未開発のまま放置される可能性があるなど、本市の中心市街地活性化の阻害要因となることを危惧した準備会が市に対し、「将来的に設立するまちづくり会社によって再開発を行うために、日南市土地開発公社で先行取得して欲しい。」との依頼があった。結果、平成 19 年 6 月に日南市土地開発公社が保全のために取得を行った。後に Itten ほりかわが整備された用地である。

市では、平成 19 年 7 月に副市長を会長とし、課長等で構成する「中心市街地活性化対策会議」と 13 課の係長級等の職員 18 名で構成する「中心市街地活性化推進プロジェクトチーム」を平成 20 年 9 月には商工観光課(当時)内に「中心市街地活性化推進室」を設置し、中心市街地の現況調査や過去に実施した事業の検証等を行ったが、平成 21 年 3 月に隣接する 2 町との合併を控えていたことや法定合併協議会が未設置だったことから、具体的な計画策定にまでは至らなかった。

その一方で、平成 20 年 6 月に市民有志により「日南まちづくり株式会社」が設立され、平成 21 年 1 月に市が法定割合を超える出資をしたことで、同

年 1 月 28 日に「日南市中心市街地活性化協議会(以下、「中活協議会」という。))」が発足した。

平成 21 年 3 月 30 日に合併により新日南市が誕生した際には、合併した両町との歴史的背景を含めて、油津地区を中心市街地として再生する必要性について、当時の副市長 2 人をはじめ、関係団体等と調整を行った。

平成 22 年 4 月に総務部長を室長とした「まちづくり推進室」を設置し、これまでの現状分析や関係団体等との意見聴取をベースに本格的な計画策定に着手した。

中活協議会との協議を重ねながら、平成 22 年 9 月に計画素案 No.1 を策定し、内閣府へ提出した。以後、内閣府及び中活協議会との協議を繰り返すなど、平成 23 年 12 月に計画素案 No.7 を提出するまで、幾度となく調整を進めてきたが、この時点で内閣府より大きく 2 点についての疑問解消が指摘された。

一つ目が、行政機能や商業機能の絶対数が他地区(吾田地区)の方が多いにもかかわらず、油津地区を中心市街地とするその根拠の明確性を示すこと、二つ目が、観光客をターゲットとした拠点施設を「油津赤レンガ館」としていたが、拠点施設であるにもかかわらず駐車場機能がないことから、その集客力の効果が不透明であったことである。

1 点目の油津地区を中心市街地とす

ることについての経緯は、本計画書に記述のとおりで整理したところであるが、2点目の観光拠点については、再度庁内及び関係機関、中活協議会との調整に時間を要したところである。

結果として、市内全域の観光地をPRし、その効果を市域に波及させるハブ的機能を有するための施設を、駐車場を有する利便性の高い施設として整備する方針を打ち出した。

その後、中活協議会及び内閣府との協議を行い、最終的に11版目となる計画書が平成24年11月30日、全国で121番目(うち6都市は第2期計画)に認定を受けることができた。



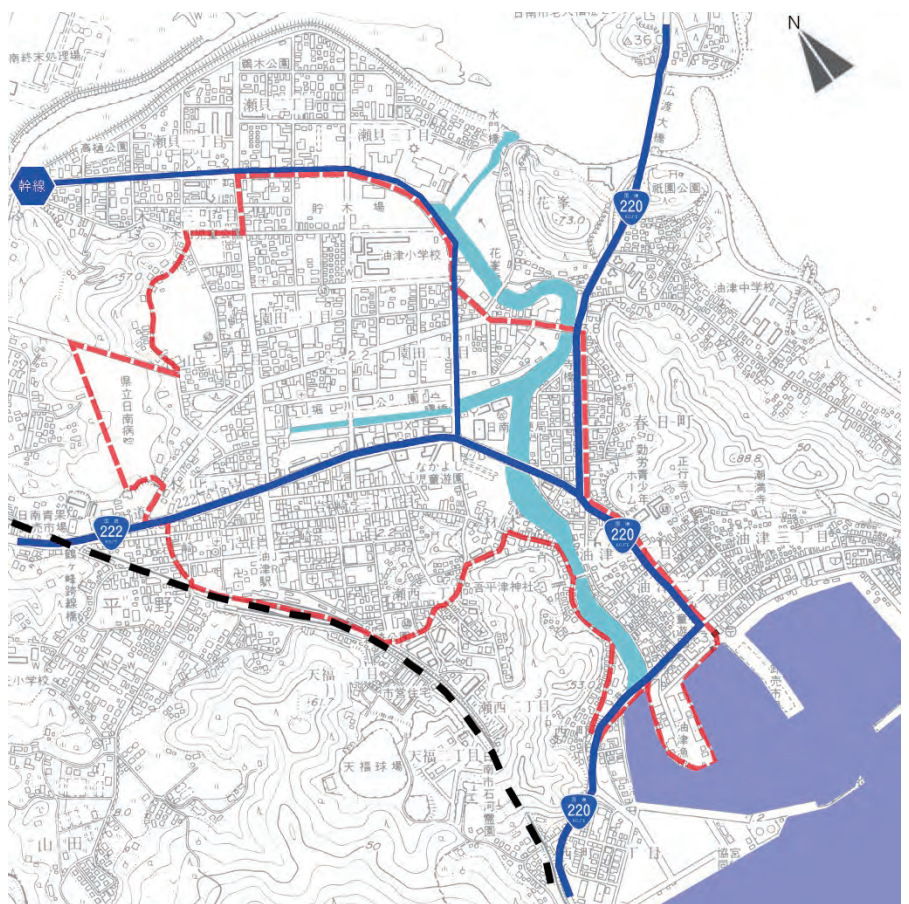
【写真3】中心市街地 航空写真



【写真1】昭和40年代の油津商店街（銀天街）



【写真2】平成25年の油津商店街



【図1】中心市街地活性化事業 エリア図

日南市役所 水道課 施設計画係
主任技師

くらおか ひろのり
倉岡 宏宜

堀川運河の整備以来、油津のまちづくりに関わる。中心市街地活性化事業の前半戦では会議・WG・事務局の運営や各課との調整、直轄事業の企画運営などを担った。異動後は油津地域協議会員として「へえほおまち歩き」の持続・発展に取り組む。

【当時の所属】

- ・H22.4～H24.3 総務部まちづくり推進室
- ・H24.4～H26.3 総務部まちづくり課
- ・H26.4～H27.3 地域振興課



2体制模索期 -2012（平成24）年度-

2 油津まちづくり会議、油津まちづくり会議WG 起ち上げ

油津まちづくり会議の立ち上げについては、この文字数では収まらないほどのボリュームと想いが詰まっているため、内容がかなり省略されていることを最初に述べておきたい。なお、油津まちづくり会議の立ち上げまでには紆余曲折あり、少し歴史を遡って整理する必要があるため、油津地区のまちづくりについて少し触れる。

油津地区の歴史的資産である堀川運河は昭和49年に埋立することが決定したが、昭和63年頃に反対運動が沸き起こり、シンポジウムの開催や新聞記事での連載など堀川運河を地域の財産として認識する動きが高まったことから、平成4年には一転して保存整備することが決まった。それから護岸や遊歩道の整備が進むものの、堀川運河の歴史的・文化的価値を活かした整備ではなかったことから、平成14年に学識者や専門家が加わって整備内容の見直しが行われ、現在の修理修復を基本とした歴史的・文化的価値を活かす保存整備を行うこととなった。堀川運河の整備は県事業であったが、市も堀川運河周辺の歴史的景観と調和した道路空間の整備を併せて実施することになり、県・市合同で堀川運河周辺の整備について検討を行う「油津地区・都市デザイン会議（委員長：篠原修東京大学名誉教授）」が平成15年度に設置された。

平成19年度には、夢見橋や堀川夢ひろば周辺の護岸整備や遊歩道整備が完成し、堀川運河整備の第一期工事が完了した。同年、中心市街地活性化への取り組みが始まり、行政ではプロジェクトチームが、民間では中心市街地活性化協議会準備会が設置され、平成21年に正式に「日南市中心市街地活性化協議会（会長：清水満雄日南商工会議所会頭）」が発足した。この間も漁港や道路など堀川運河周辺の整備は進められていたが、この時期になるとハード整備は「油津地区・都市デザイン会議」で、ソフト整備は「中心市街地活性化協議会」で議論するという感じになっていた。油津地区のまちづくりを進めるためにはお互いが連携しなければならないと考え、平成21年～22年に両会議の意見交換会を開催するものの、お互いの状況は理解しつつも連携するといった関係性にはならなかった。平成23年度末に、連携できる体制づくりについて庁内で検討し、両会議のメンバーが同じテーブルで議論するようにしようと考え、平成24年8月に油津地区・都市デザイン会議、中心市街地活性化協議会のメンバーに加え、JR九州や建築士会などの関連団体、県・市の行政職員など、総勢58名の委員で構成される「油津まちづくり会議」を新たに設置した。

幸い同年11月に「日南市中心市街地活性化基本計画」が内閣府の認定を受けたことで、計画に基づく事業に関する具体的な議論をこの会議で始めることができた。

「油津まちづくり会議」は大所帯のため、情報共有及び合意形成の場としての役割を果たし、詳細な議論については、下部組織として設置した「油津まちづくり会議WG（以下、「WG」という。）」で行った。WGは高尾忠志チーフディレクター（九州大学持続可能な社会のための決断科学センター准教授）が総括し、中心市街地活性化基本計画に基づく各事業主体が集まって、これまでと同じやり方ではなく新たな意識で事業展開を考えることを念頭に、事業内容の議論やスケジュール調整等を行った。このWGで議論するレベルにないものについては、更に詳細な議論を行うために事務局協議を行った。振り返ると、中心市街地活性化事業を軌道に乗せるためではあるが、最初の1～2年はWGや事務局協議を毎月必ず一回は行っていた。各地で業務を持つ学識者とコンサルタントがこれだけの頻度で議論できたことは今考えてもすごいことであり、日程調整が大変だったことと一ヶ月が早かったことを記憶している。

油津まちづくり会議は、委員のスリム化を図りながら別途記述するデザイ

ン部会の設置など、当初から体制が少しずつ変わっていったが、この議論体制があったことが中心市街地活性化事業をここまで熟させたと考えている。更に言うと、高尾チーフディレクターの意識改革が浸透した結果だと考える。これまでと同じように官民一体となって事業を実施するだけでは整備して終わりだったと思うが、「油津まちづくり会議の基本方針（5箇条）」に示すように、今までにない観点でプロジェクトを進めたことが人材育成にも繋がっていると思う。全ての事業が完了した時がスタート地点でありこれからが重要なことは皆承知しているが、過去と同じような意識に戻らないよう、自分のまちに対する熱い想いを抱いて今後のまちづくりに貢献したい。



【写真1】油津まちづくり会議の様子



【写真2】油津まちづくり会議ワーキングの様子

九州大学持続可能な社会のための決断科学センター

准教授

た か お た だ し
高尾 忠志

中活事業の五年間（2012～2016年度）に「チーフディレクター」を務めた。油津まちづくり会議 WG の座長として関連する約 50 事業のディレクションと推進体制のマネジメントを行った。



2体制模索期 -2012（平成 24）年度-

3 日南市庁内まちづくり懇談会、日南市活性化ネットワーク（+C）

まちづくりを進めるにあたっては、
（１）官民協働：官と民がお互いの得手不得手を理解し、縦割りの思考を超えた統合的な観点を持ちながら、現場で適切に役割分担をしていくこと、
（２）世代継承：上の世代だけが物事を決めたり、進めたりするのではなく、これからを担う若手も含めて多世代がそれぞれの持分を発揮していくこと、の２点がきわめて重要である。これは余程留意しておかなければ、すぐに縦割り、横割りが起きて、ジグソーパズルはバラバラになり、まちづくりが一枚の絵にならない。

これらは意識の問題であるから、まちづくりの現場において、上記の２点を実現していくのには時間がかかる。

したがって官民の双方における意識改革、向上に向けた施策を継続的に進めていくことが大事となるが、それを担保する仕組みは存在していない。市役所職員はまちづくりを担う重要な立場にしながら、縦割り構造における担当部署に配属され、そこで上司から一子相伝的な教育を施され、数年ごとに人事異動し、また別の分野において一子相伝的な教育を施される。その繰り返しである。民間においても自治会や消防団、商工会等の組織があるが、地域に「新しい価値」を創造しようとする取り組みや体制は限定的であろう。

自治体の中心となるまちの再生を目指す中心市街地活性化事業で取り組まなければならないのはハード事業だけ

ではなく、上記２点の実現に向けた官民双方における人材育成であるべきだと思うが、日南市に限らず全国の中活事業の事業メニューでそのような観点のものはお目にかかったことがない。それを、行政上の様々な都合があるのでそれも仕方がない、と諦めてしまったら、やはりパズルはバラバラになる。

2012年４月に「日南市中心市街地活性化事業チーフディレクター」に就任してから、市内の若手約 60 名にヒアリング調査を行い、率直なお話を聞かせていただいた。地域を思うストレートな思い、行政の進め方への不満、何かやってみたいという意欲をたくさん聞かせていただき、一方でそれを受け止め、うまくパートナーシップを築け



【写真 1】日南市庁舎まちづくり懇談会の様子

る職員が日南市にどのくらいいるだろうか、とも思った。

早速、中活担当だった河田課長と倉岡さんに提案をして、市の若手職員の意識を高める場（日南市市内まちづくり懇談会）と民間の若手の思いを結集する場（日南市活性化ネットワーク、2回目から+Cと改名）を設置していただいた。なお、「+C」はカルチャーやコミュニティ等の頭文字であり、日南市に経済指標だけでははかれない新しい価値、ストックとなる価値を加えていくチームになってほしいとの願いから高尾が提案した名前である。

市内まちづくり懇談会は、7/4、9/12、10/12、2/6と2012年度に4回開催し、若手職員が日南市の魅力を

見つめ直すよい機会となった。週末は自宅でDVDを見て過ごすと言っていた若手女性職員が、懇談会で知った場所を自主的にツアーして訪れ、その報告を最終回でしてくれたことは印象的であった。

+Cは、10/11、2/6と2012年度に2回開催し、そこで生まれたつながりも生かして、3/11に3.11イベントが開催された。日南から東北の震災に祈りを捧げる素晴らしいイベントであった。私の力不足でそれ以上このつながりを中活事業に生かすことができなかったが、これらの経験が2013年度に行ったテナントミックスサポートマネージャーの選考方法の企画や選考段階における議論のコーディネートに少

なからず役に立った。地域に埋もれてしまっているこうした熱い人物たちのハートに火をつけてくれる人をいかにして選ぶのか、それがチーフディレクターとしての課題であると認識できたことも大きな収穫であった。



【写真2】日南市活性化ネットワーク（+C）の様子

公益社団法人日本交通計画協会
交通計画研究所長

はぎはら たけし
萩原 岳

油津地区・都市デザイン会議、油津まちづくり会議の運営にあたる。基本計画に掲げられた「歩いて暮らせるコンパクトシティ」形成に向けた課題解決に向け、国の交通政策の動向をいち早く取り入れ、都市交通の専門的見地から交通部会の議論を先導した。



体制拡大期 -2013（平成25）年度-

4 交通部会の設置

中活計画の実施施策の中に「地区巡回バス運行社会実験」をはじめ、活性化に資する交通に関する取組みが盛り込まれていることを踏まえ、2012（平成24）年度の油津まちづくり会議WGの中で交通に関する議論を行い、これを重要事項とらえて交通部会を設置することとなった。

交通の問題は、まちの将来動向を見据え、長期的かつ戦略的な政策展開が必要であるが、期間が限定される中活の取組みの中でこの手順を踏むことは困難であることから、2015年実施予定の「社会実験」は、今後の地区交通の改善を図っていくキックオフプロジェクトと位置づけ、どのような実験を行い、何を検証するかについて検討していくことを目的として、2013（平成25）年度から交通部会をスタートさせた。メンバーはまちづくり課、建設課と高尾氏をはじめとするWGチームであった。

当初の議論テーマとして、地区の交通環境や地区住民の生活行動実態等について既存データ等をベースに議論を進めるとともに、一方で、「地区巡回バス運行社会実験」の目的と必要性は何か等について意見を交わしてきたが、そもそも都市構造を含め、将来の都市づくりビジョンが明確でない中で、日南市の将来の交通ビジョンが極めて描きづらいということで、議論は行き詰まり、2014（平成26）年度からは当面、勉強会等を開催して、関係



【写真1】交通部会研修会の様子

者がこれからの交通政策について学んでいくこととなった。

2014（平成26）年9月19日に第1回交通部会研修会として、国土交通省都市局街路交通施設課の清水喜代志課長（当時）を招き、これからのまちづくりの方向性や都市交通施策等についてご講演いただいた。また、翌年1月8日の第2回研修会では、富山都市整備部長（当時）の京田憲明氏を招聘、コンパクト＋ネットワークの都市づくりを進める先進都市としての具体的な施策展開についてご講演いただいた。

地方都市である日南市では現在、自動車利用を大前提とした都市構造となっており、当然市民の行動形態もこれに特化したものとなっている。そして、市民はこれが当たり前であると思いついて入っている。しかしながら、まぎれ

もなく人口減少と超高齢化の波はすでに到達しており、今後さらに大きな波が押し寄せてきている。こうした社会情勢の変化によって、日南市民が自らの生活行動を変えざるを得なくなることは明白であり、これに備えた市民の移動のあり方や方策を検討することはまさに喫緊の行政課題であることは言うまでもない。

日南線が廃線になり、バスも日に数本しか来ないなどといった状況になった時、高齢者や学生など自動車を自ら使えない市民の移動や暮らしはどうなってしまうのだろうか。そしてこれを支える市民の暮らしは・・・。

日南市はあらためて認識しなければならない。「まちのモビリティが低下し、これにより市民のアクティビティが失われることはすなわち、まちの消滅を意味する」ということを。

日南市役所 地域振興課 地域振興係 係長

しゃかこおり たかよし
釋迦郡 崇吉

テナントミックスサポート事業を担当した。サポートマネージャーの全国公募を企画・運営、サポマネ着任後は、木藤氏の活動を下支えする環境を常に整え、木藤氏と二人三脚で事業を推し進めた。

【当時の所属】

・商工政策課 商工係 主査



体制拡大期 -2013（平成25）年度-

5 サポマネの全国公募、選考会

私は、平成21年3月に商工部門に配属になり、商店街再生を考えることとなった。

私には基本的に揺るがないスタンスがある。それは、真似をしない（良い部分だけオリジナルに作り変えることはあるが・・・）、自分ができないことはすぐにそうだと判断し、適正にやれる人（これまでの人生経験から多岐にわたるネットワークがあるため・・・）にそれを頼むことである。公務員の多くは、優秀ではあるが、何でもできると勘違いしてしまいがちである。餅は餅屋であるはずなのに・・・。

よく、「できないと判断するより、できる方法を考える！」このような言葉を耳にするが、そもそも、より専門的なスキルを持ち合わせていない者が、いつまでたっても考えつくはずがない。考えついたとしても、その場限りのもので持続性や発展性などないだろう。何も事が起きないまま時間だけが過ぎ、結局、スピード感のあるタイムリーな判断ができず、これまでの役所行政の悪いサイクルのままで終わる。私は、このことを一番危惧していたため、新しいことにチャレンジしたい、そして、最後の手段であるとの覚悟と責任を持ち、「テナントミックスサポートマネージャー」という長い名称での、商店街再生を担う、外部の優秀な人材の募集を企画したのである。

また、その人材については、通常のコンサルタント業のような、その地域

に出張で出向いて調査し、報告書を出すようなものではなく、本市に住みこみ、24時間365日市民の一員として過ごし、先導的なプレーヤーとして事業を推し進めることを条件とした。

なお、その人材への委託料の額は、1千万円クラスのコンサルタントへの事業費相当である、と考え、単純に12か月で除した額に消費税相当額を足すと月額委託料90万円という額がでた。この額が、なぜ、きり良く100万円ではないのか、そして、単純な比較ができないものの、市長の給料より高い等が話題となり、本件がマスメディアに多く取り上げられることとなった。そして、全国的に難しいと言われる商店街再生事業のハードルの高さも、多くの人に認識されるようになり、本市中心市街地活性化事業も注視されるようになった。

本事業については、委託料約1,000万円、そして、募集経費においては、

多くの人材の目につくよう、都市部での交通機関の中吊り広告や専門誌等の見積もりをとり、約1,000万円程度かかるのではと考えていたが、最終的には、ネット上に10回拡散させる募集でのみ実施し、その経費としては約50万円である。結果として、蓋を開けてみると、全国各地から、そして、アメリカ在住の日本人を含む333人という多くの方からご応募いただいた。うれしい悲鳴であり、かなり慌てたことを今でも覚えている。

そして、一番重要となる選考になった。333人の提出書類を全てデータ化し、選考委員に送り、全ての方をランク付けした上で、第一回選考会で10人（1人辞退のため最終的には9人となる。）に絞った。今回の人材を選考する委員は、各分野の専門家、各種団体の代表等十分すぎるメンバーを揃え、それにあたった。



【写真1】プレゼンテーションの様子



(サービス (笑))
応募時の履歴書写真



数年後同じ場所での一枚
※自信に満ち溢れている。。。



【写真 2】懇親会の様子



【写真 3】プレゼンテーションを行う木藤亮太氏 (中央と右写真)



最終選考会に望んだ 9 名は、本事業の象徴となっていた大型空き店舗での公開プレゼンテーション、非公開面接、そして、公表していなかったが、プレゼンテーション後の関係者との懇親会においても「酒宴の席での人となり」を審査されていた。本市はいわゆる飲み会が多く、酒の席での振舞いも、信頼や信用でのコミュニティの形成や、各種事業を進めていく過程において非常に大事なことであったことからである。

結果、油津商店街の将来像を明確に示し、その一つ一つの進め方等を分かりやすく説明された、当時福岡県出身の木藤亮太氏を選考した。選考委員も彼の可能性にかけたい、そして、一人に任せるのではなく、一緒に推し進めていきたいという、誰をも巻き込む人間性に魅せられ、彼に託すことにした。また、公開プレゼンテーション時の一般参加者へのアンケートでも、ほとんどの方が木藤亮太氏を選ばれており、

選考委員だけではなく、市民も一緒に選んだ感覚となり、着任後、スムーズな事業のスタートが切れたことは言うまでもない。

また、最終選考会に望んだ 9 人は、ハードルの高いこの事業の再生請負人に誰が選ばれようが、その人をみんなで応援していこうと「アブラツ 9 (ナイン)」を結成され、意識の高い方々

のそのような発想や人間力にも驚かされた。今でも彼らと連絡を取り合いながら、お互い切磋琢磨し合っている。

最後に、今回の選考に至るまでについては、高尾忠志選考委員長の講評(附録)もご一読いただきたい。



【写真 4】最終選考会に望んだ 9 人のプレゼンター、後のアブラツ 9 (ナイン)

テナントミックスサポートマネージャー

(日南市・油津商店街)

株式会社油津応援団専務取締役

きとう りょうた
木藤 亮太

日南市が実施したテナントミックスサポートマネージャーの全国公募の応募者333人の中から選ばれた。通称 サポマネ。2013年7月1日の着任以来、油津商店街の賑わい再生に向け先鋭的な取り組みを繰り返してきた。



体制拡大期 -2013（平成25）年度-

6 サポマネ着任、Yotten リニューアルオープン

中心市街地活性化の重要課題である油津商店街の再生に向けた事業が平成25年7月に始動した。補助金を投下する従来型の商店街再生事業ではなく、専従できる専門人材を投入する実践型の事業であることから、行政や関係者の覚悟の大きさが伺える。

「4年で20店舗誘致」、「月額90万円で人材募集」というインパクトのあるフレーズで人材を全国公募、その名も「テナントミックスサポートマネージャー（通称サポマネ）」。

応募者は予想をはるかに上回る333人。商店街で行われた二次選考の公開プレゼンテーションでは会場に入りきれないほどの市民オーディエンスが集った。

掲げたテーマは「自走できる商店街づくり」。「4年で20店舗誘致」は一つの数値目標でしかない。4年後をスタート地点として、商店街が持続的に歩んでいける状況をつくるのが最大のミッションであると常に認識し、現在まで取り組んできた。

もともと福岡市を拠点に、さまざまな地域のコンサルティング業務に携わってきた。仕事の期間だけ出張で地域に訪れる従来の業務スタイルに限界を感じていた。地域にどっぷりと入り込んで、住民と同じ目の高さで、じっくりとまちづくりに関わりたい。そんな憧れから「事業期間は日南市へ必ず住むこと」という市が提示した条件に、新たなワークスタイルへの可能性を強

く感じ応募を決意した。

本事業における私の役割は、油津の住民としての顔と専門家としての顔を両方持ちながら、地域の方々と密度の高いコミュニケーションを実践していくこと。それは、住んでいるからこそ実現可能な私の強みであり、当初から最も心がけて取り組んでいることである。

着任1ヶ月後、人と人とのコミュニケーションには「場」が必要と、空き店舗にカフェスペース「Yotten（よってん）」をオープン。徐々に高校生から70代まで多世代の市民が集まり、商店街を応援する優志のチーム「KITOTICKET（キトチケット）」が結成される。このチームが核となって、サポマネとともに店主たちとの意見交換はもちろん、あらゆる世代のニーズを聞き取り、徹底して腹を割ったコミュニケーションを繰り返していった。

こういったいわば市民応援団との対話の中で次々とアイデアが生まれはじめる。空き店舗を利用したフリマ、カープ戦のパブリックビューイング、親子で参加できる運動会や50mのレーンをつくってのボウリング大会など、「商店街を“長細い広場”と見立てる」発想でイベントを次々に開催。アパレル、美容師、カメラマン、高校生DJなどそれぞれの興味や職能をつないで実現した商店街ディスコやファッションショー、クリスマスライブなどには多くの若者が訪れ、県内メディアを賑わせた。

これらのイベントは集客や経済効果を目的とせず、「商店街で若い人たちが面白いことをやっている」という空気感をつくるためのもの。その結果、市内の中高生や県内の大学生、在京の日南出身者などが商店街に興味を示し、以降、商店街の再生プロジェクトに主体的に参加するきっかけとなった。



【写真1】Yotten（よってん）



【写真2】50mレーンボウリング大会



【写真3】商店街の道路空間を柔軟に利用
中学生による発表

日南市役所 水道課 施設計画係
主任技師

くらおか ひろのり
倉岡 宏宜

堀川運河の整備以来、油津のまちづくりに関わる。中心市街地活性化事業の前半戦では会議・WG・事務局の運営や各課との調整、直轄事業の企画運営などを担った。異動後は油津地域協議会員として「へえほおまち歩き」の持続・発展に取り組む。

【当時の所属】

- ・H22.4～H24.3 総務部まちづくり推進室
- ・H24.4～H26.3 総務部まちづくり課
- ・H26.4～H27.3 地域振興課



体制拡大期 -2013（平成25）年度-

7 夢ひろばWS

日南市中心市街地活性化基本計画では、堀川運河周辺において「水辺の集い空間づくり事業」と「水辺の憩い空間づくり事業」の2事業を実施することとしていたが、平成25年度時点では具体的な事業手法や体制などは決まっていなかった。そこで、拠点の一つである堀川夢ひろばを日常的に市民が集える空間にするために、市民参画のもとでリニューアル計画を策定することを目的として市民ワークショップを開催することとした。中心市街地活性化協議会メンバーや油津地区自治会、近隣の幼稚園などに呼びかけ、幅広い年代から意見を出していただき、集いの場、憩いの場としての利活用方法について検討した。

8月7日に行ったワークショップ1回目は、堀川夢ひろばのデザイン設計をされた小野寺康氏に、整備の経緯や設計のコンセプトについて解説をしていただいたあと、参加者を三班に分けて、利活用における問題点や提案など

多くの意見を出していただいた。

その内容をベースに夏場の利活用方法を整理し、8月25日に水遊び・涼空間に関する実証実験イベントを行った。堀川夢ひろばにゴムプールや仮設噴水をセットし、油津地区自治会長が教える水鉄砲づくり、野菜・木ん魚・ヨーヨー釣り、大人も子どもも参加する三輪車レースなど、水に戯れる様々な水遊びを行った。また、堀川運河沿いにはおしゃれなフードとドリンクに生演奏つきのオープンカフェ空間をセットし、約300名の親子連れの市民が参加して暑い夏を楽しく過ごした。

ワークショップ3回目は、実証実験の内容やアンケート結果について報告した後、堀川夢ひろばをリニューアルする際の問題点や夏場以外の利活用方法等について意見を出していただいた。その結果、当初は平成26年度から実施しようとしていたリニューアル整備については、四季を通して実験的に検証しながら堀川夢ひろばに本当に必要

な機能について時間をかけて整理することに方針変更となったが、平成27年度に人事異動により担当から外れたため最後まで見届けることはできなかった。

ここからは私見になるが、堀川運河周辺は、護岸や堀川夢ひろばの整備などにより過去のそれとは見違えるほどきれいになり、堀川運河を見て生活できる環境になった。担当をしている時は、賑わいを創出するために観光客の増加や経済波及がミッションになっていたため、集客できる機能を付加しよう意識していたが、改めて堀川夢ひろばに足を運んでみると堀川運河の水辺は大変魅力的であり、陰で過ごす場所やベンチ等は必要だとしても、堀川運河周辺は、水の流れと同じようにゆっくりとした時間を味わう場所として、地域住民が集う空間で十分ではないかと感じている今日この頃である。



【写真1】ワークショップの様子



【写真2】社会実験「ひろばで水遊び」の様子

九州大学持続可能な社会のための決断科学センター

准教授

た か お た だ し
高尾 忠志

中活事業の五年間（2012～2016年度）に「チーフディレクター」を務めた。油津まちづくり会議WGの座長として関連する約50事業のディレクションと推進体制のマネジメントを行った。



3体制拡大期 -2013（平成25）年度-

8 中心市街地活性化庁内勉強会（講師：高尾、木藤）

チーフディレクターに就任した2012年度から様々な方にお話を聞かせていただいたが、「なぜ油津が日南市の中心市街地なのか？」という疑問を言われる方が非常に多かった。また、2013年度に選考を行ったテナントミックスサポートマネージャについても、「月額委託料90万円も支払うサポマネ・キトってどんな人なのか？何をするためにそんなにお金を払うのか？」といった興味や疑問が漂っていた。

中活事業に対する懐疑的な雰囲気が漂うこうした状況は、より良い事業成果をあげていくためには望ましくない。市民にとってわかりやすい説明を発信していかなければならないが、それ以前に発信元となるべき市職員は十分にそのことを理解しているだろうかとも思った。まち会議WGにおいて関係課の職員と協議をしても、十分に腑に落ちていない感覚が残っていたからだ。

そこで中活事業を担当していた河田課長と倉岡さんに提案して職員勉強会を開催していただくこととした。そのプログラムについては、（1）幹部クラス（課長以上）の回を設定、（2）それ以外の職員は同じ内容で1日に二回開催しどちらかには参加していただく、（3）就任間もない木藤さんと高尾の二人で説明、（4）質疑応答では中活担当課が中心に応える、を基本方針として2013年8月29、30日に実施した。

木藤さんについては、彼の素晴らしい人間性、提案を目の当たりにして、選考の具体的なプロセス、サポマネに与えられた非常に高いミッションを理解すれば、皆さん十分に納得していただけではないかと思う。一方で、「なぜ油津が日南市の中心市街地なのか？」という疑問に対しては、これまでも十分な説明がされてきたとは言い難かった。

この疑問に対する担当課の回答は、内閣府に提出した「中心市街地活性化基本計画」の内容をそのまま説明するものであった。油津はかつては商人町として栄え、都市基盤としてのストックが充実している等云々。しかし、市民や職員等の地元の方々が聞きたかったのは、「なぜ油津が中心市街地なのか？」ではなく、「なぜ油津」だけが中心市街地なのか？」であったと思う。この読み替え、翻訳が欠けていた。

勉強会では、飢肥も吾田も油津も日南市の中心市街地である、と私からは

申し上げた。一方で、国の中心市街地活性化事業の適用対象となるための条件は（1）小売小業者・都市機能が集積していること、（2）都市活動・経済活力の維持に支障を生じていること（もしくはその恐れがあること）、（3）当該市街地の活性化が周辺地域の発展に有効であること、の3点であり、このうちの（1）と（3）は飢肥も吾田も該当するであろうが、（2）に該当するのが油津のみであるので、中心市街地活性化事業を油津に適用したのである、と説明した。この説明にはアンケートや勉強会後の立ち話等でも「わかりやすかった」という意見を多数いただいた。

説明会には、2日間の3回で300人以上が参加されたと思う。まちづくり事業では、とにかく市民向けのシンポジウム等に意識が偏りがちであるが、職員の正確な理解を促すための勉強会も重要なプロセスになると考えている。



【写真1】職員勉強会の様子

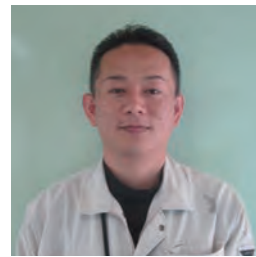
日南市 観光・水道課 管理係
課長補佐兼係長

みやした けんじ
宮下 憲二

観光振興を担当し、着地型観光「日南の幸開き」を起ち上げた。これまで着目してこなかった産業観光など、新たな地域資源を掘り起こし、観光資源に仕立て上げることで、日南市の新たな観光スタイルを確立した。

【当時の所属】

・観光課 観光係 主査



3 体制拡大期 -2013（平成 25）年度-

9 日南の幸開き スタート

1. きっかけ・着想

日南市特有の観光資源を活かした体験型・着地型メニューをとりそろえた観光誘客を図っているが、観光資源の掘り起こしがされていないため、活用できていない状況であった。よって、①新たな観光資源の掘り起こし、②着地型観光メニューによる誘客実証実験、③市民が日南の魅力に気づきそれを自慢できること 観光となりうる素材集め、というテーマを掲げ、事業を始めた。

2. 予算化から事業完了までの流れ

予算化にあたり、県に相談したところ、地域活性化のための委託料が活用できることから、単年度ではあるが、活用することとした。これにより、事業化のメドがたった。

事業化にあたっては、初年度は、前述の地域活性化のための委託料を活用したが、次年度より単費で事業を継続した。また事務局選任者2名を、観光協会食卓として新たに採用することとなった。情報収集、受け入れ先との交渉を行い、メニュー化したものを推進委員会で検討、事業実施後の検証を行った。

事業の継続に向け、経過を観察し、新たな事業の掘り起こしの効果や、体験料を徴収して採算が合うか合わないか、今後も継続するべきか、などの検討を行った。事業が完了した後も、試行錯誤しながらではあるが、人気のあ

るメニューや日南市でないと体験できないメニューなどは、継続しているところである。さらに毎年、新たな資源の掘り起こしを行っている。

3. 事業で特筆すべき点

事業の成果について、事業の前と後を比較して考えると、日南市でないと体験できない、日南市でしか作っていない、日南市が全国で流通する製品のほとんどのものを製造しているなどの工場見学などは、新しく掘り起こした観光資源のひとつであった。こうした新たな資源は、今後観光誘客につながるかどうか課題となった。

また事業の効果として、市民への広がりや、別の取り組みへの波及、認知度の観点から見ると、現在は、観光協会、雇用創出プロジェクトで実施が継続している。

4. 事業に対する私の思い入れ、事業の振り返り、これからの抱負・願い

中心市街地活性化計画のなかで、油津地区への観光誘客がもとの目的であったが、日南市全体で考えたときに、本市にはまだまだ隠れた観光資源があると再認識した。観光資源をさらに掘り起こすことはもちろんのこと、観光メニューとして、受け入れ側との調整、協力なども労を惜しまず、粘り強くお願いした結果、実施に至ったことも付け加えたい。

団体型から個人型の観光が主流となった今日、このような観光資源の掘り起こし、PRを地道に続けていくことも必要だと感じた。独立採算は、現在のところ困難ではあるが、身近な観光資源があることを知っていただくために、続けていくことが大切である。

【事業概要】

- ①事業内容：体験型観光に取り組むことで、交流人口の増を図る
- ②事業期間：平成 25 年度～
- ③担当課・関係者：商工観光課・日南市観光協会
- ④事業費： 総事業費 当初事業費 5,894,000 円
- ⑤活用した補助事業名：宮崎県委託事業「チャレンジ観光応援事業」



【写真 1】日南の幸開き冊子



【写真 2】幸開き「王子製紙工場見学」

テナントミックスサポートマネージャー

(日南市・油津商店街)

株式会社油津応援団専務取締役

きとう りょうた
木藤 亮太

日南市が実施したテナントミックスサポートマネージャーの全国公募の応募者333人の中から選ばれた。通称 サポマネ。2013年7月1日の着任以来、油津商店街の賑わい再生に向け先鋭的な取り組みを繰り返してきた。



体制拡大期 -2013（平成25）年度-

10 株式会社油津応援団設立、ABURATSU COFFEE オープン

サポマネ着任後9ヶ月（平成26年4月）、本事業による第一店舗目がオープン。商店街再生のプロセスにおいて、重視しているのが「市民がついつい巻き込まれてしまうストーリー性」。かつて商店街の入口にあった市民の思い出がたくさんつまっていたかつての名店「喫茶店・麦藁帽子」。埃をかぶった空き店舗で開催した「思い出を語る会」には多くの市民が参加し、思い出を語り合った。

店舗改修においては、古きよきものを価値として残しつつ新しいサービスを提供する、いわゆるリノベーションの考えを取り入れ、「ABURATSU COFFEE」として再生した。商店街の一角は、昔と変わらぬ空間を懐かしむ年配層、パンケーキとラテとおしゃべりを楽しむ若者でいつも賑わっている。まちの歴史を現代的解釈で次の世代に伝える。このカフェの再生プロジェクトは市民の共感を集め、商店街再生が本格的に動き出すきっかけとなった。

ABURATSU COFFEE をどうやって経営していくか、その議論が商店街自治のための組織づくりへとつながった。

サポマネ審査員の一人で飲食業を中心に九州パンケーキなどを手掛ける村岡浩司氏（有限会社一平・宮崎市）、地元商業者に多くの人脈を持つ黒田泰裕氏（元日南商工会議所）と共同出資により『株式会社油津応援団』を3月に設立。現在は35名の出資者（大半

が日南市民）に支えていただいている。「行政からの補助に頼り続けず、民間の発想にシフトしていくこと」を重視した株式会社の設立は、サポマネの動きを支え、任期終了後も商店街を持続的にマネジメントしていく体制へと進化していく。

株式会社油津応援団ではパートスタッフを含め、10名以上の雇用を生んでいる。核となる3人のスタッフは、建築デザイン、会計・経営管理、生産者との窓口とそれぞれ専門的職能を持った人材で、全て地元出身の30代。

彼らは油津商店街の再生事業に関わることで、実践経験を積み、人脈を広げ、成長を続けている。本事業2店舗目の店舗づくりはこの3名が主体的にプロデュースした。内装デザインや経営方針の検討、人材確保、材料調達の面で経営者夫婦をバックアップし、ランチが楽しめる新感覚の豆腐店「二代目湯浅豆腐店」をつくりあげた。ハートの熱い50代のご夫婦が3人の若者の一生懸命な姿に触発されて動き、完成した魅力ある店舗である。



【写真1】生まれ変わった ABURATSU COFFEE



【写真2】新旧の空間が共存する店内

日南市役所 水道課 施設計画係
主任技師

くらおか ひろのり
倉岡 宏宜

堀川運河の整備以来、油津のまちづくりに関わる。中心市街地活性化事業の前半戦では会議・WG・事務局の運営や各課との調整、直轄事業の企画運営などを担った。異動後は油津地域協議会員として「へえほおまち歩き」の持続・発展に取り組む。

【当時の所属】

- ・ H22.4～H24.3 総務部まちづくり推進室
- ・ H24.4～H26.3 総務部まちづくり課
- ・ H26.4～H27.3 地域振興課



活動人材発掘期 -2014（平成 26）年度 -

11 デザイン部会の設置

「油津まちづくり会議」は平成 24 年 8 月に設置されたが、設置当初は「油津地区・都市デザイン会議（以下、「デザイン会議」という。）」と「日南市中心市街地活性化協議会（以下、「中活協議会」という。）」が同じテーブルで議論し、情報共有や合意形成を図ることが主たる目的であったため、各事業の詳細な議論はそれぞれの組織で行われていた。また、事務局についても、デザイン会議は市建設課、中活協議会は日南商工会議所、油津まちづくり会議はまちづくり課（現地域振興課）という複雑怪奇な状態であった。平成 25 年度の会議録を見ても、ハード整備に関する詳細な検討はデザイン会議で行っており、その結果を油津まちづくり会議で報告している。このとき、中活協議会のメンバーは一部の委員を除いて詳細な議論に加わっておらず、逆にソフト事業についても同じ状況であった。平成 24 年度から 25 年度はこの状況で進めたが、午前中にデザイン会議、午後に油津まちづくり会議を開くなど、市建設課及びまちづくり課とも調整が大変で、何がどこで決まるのか不明確で非効率な感じを受けていた。

このような中、平成 26 度は中心市街地活性化基本計画の中間年度であり、終盤に入るに当たり同じ状況で議論を進めることが不安であったため組織の改編を必要と感じていた。また、この時期からグルメモールや観光拠点

施設など建築物の整備に関する議論が始まろうとしていたが、午前中にデザイン会議、午後に油津まちづくり会議で同じ説明を行うなど、委員も事務局も困惑する状況であったことから、議論の一元化を図りたいと考えた。

そこで、組織及び委員の見直しを図り、中心市街地活性化の取り組みを効率的効果的に進めていくため、平成 26 年度からデザイン会議を発展解消し、油津まちづくり会議内に「デザイン部会」を新たに設置することとなった。

デザイン部会の設置にあたっては、商業施設の検討が必要だったことから、宮崎県にも縁のある建築家鮎川透氏に部会長をお願いした。また、油津赤レンガ館や堀川資料館などの既存建造物の活用も検討が必要だったことから、リノベーションの先駆者の一人である徳田光弘氏に委員をお願いした。さらに、これまでの堀川運河の整備に

かかるデザインをされた小野寺康氏に委員として、デザイン会議の座長であった篠原修氏（東京大学名誉教授）に全体の相談役としてお願いし、市内のまちづくり団体、建築団体を含めた 9 人による幅広い検討体制が整った。

私は人事異動により途中までしか関わることができなかったが、商業施設に関するものは思うように議論が進まない中で、グルメモールについては、検討、プロポーザル、完成に至るまできちんと議論ができ事業が進められたと思う。一方で観光拠点施設は最後の最後まで方向性が決まらず未整備のまま終わるという結果に、部会長をはじめ委員の方々には大変ご迷惑をかけただろうと思う。デザイン部会を通して、公務員が商業施設の議論を進めていくことの難しさを痛感するとともに、デザインの本質とは何か考えさせられたプロジェクトであった。



【写真 1】デザイン部会の様子

日南市役所 水道課 施設計画係
主任技師

くらおか ひろのり
倉岡 宏宜

堀川運河の整備以来、油津のまちづくりに関わる。中心市街地活性化事業の前半戦では会議・WG・事務局の運営や各課との調整、直轄事業の企画運営などを担った。異動後は油津地域協議会員として「へえほおまち歩き」の持続・発展に取り組む。

【当時の所属】

- ・H22.4～H24.3 総務部まちづくり推進室
- ・H24.4～H26.3 総務部まちづくり課
- ・H26.4～H27.3 地域振興課



活動人材発掘期 -2014（平成26）年度-

12 水辺利活用社会実験（夏、秋）、ウォーキングレッスン・へえほおまち歩き試行

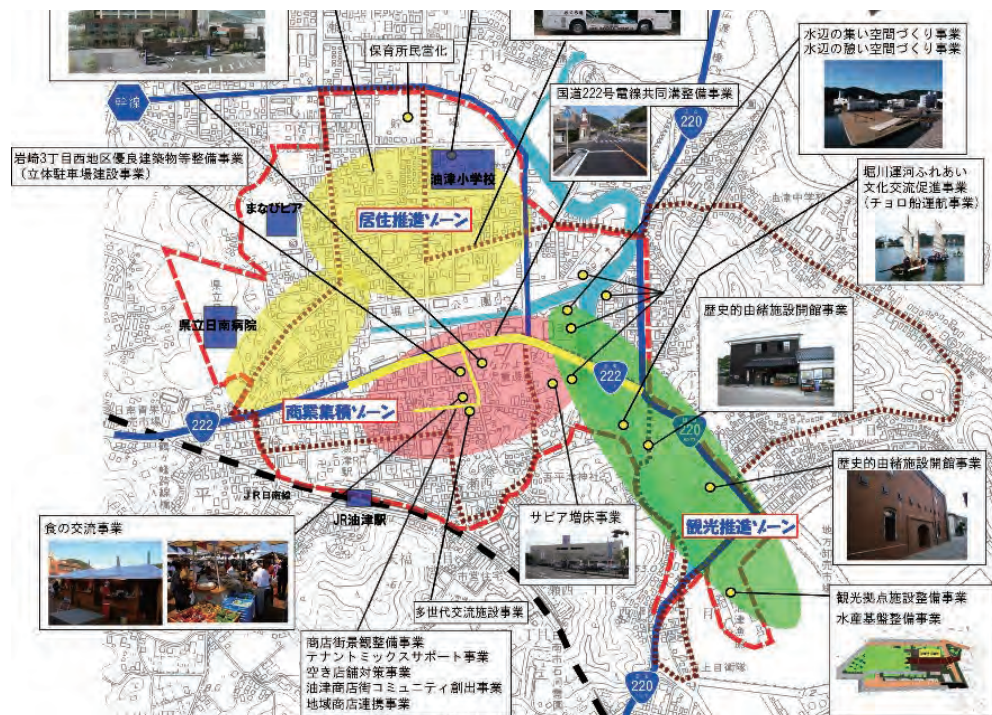
日南市中心市街地活性化基本計画では、油津商店街周辺を「商業集積ゾーン」、堀川運河沿いを「観光推進ゾーン」としてゾーニングを行っていたが、平成25年度の油津まちづくり会議WGにおいて、両ゾーン内の具体的な事業展開や機能分担等が不明瞭で更なる整理が必要とのことから「油津地区観光戦略プラン」の策定を進言された。

策定された観光戦略プランにおいては、油津商店街、堀川夢ひろば、波止鼻ひろば（当時観光拠点施設の整備予定箇所）の3つの拠点を形成し、人を回遊させるために油津赤レンガ館や堀川資料館などの中間拠点を繋ぎの役割として位置づけていた。

それでも、堀川夢ひろばの拠点としての機能や堀川運河沿いの回遊方法については定まっていなかったことや、堀川運河の水辺を生活の一部に組み込んだライフスタイルを提案するため、「堀川運河の水辺を活かした社会実験」を平成26年11月16日～30日までの2週間で実施した。具体的には、堀川夢ひろばでは、夏は水遊び、秋は本にまつわるイベントとオープンカフェ空間をセットにして拠点として必要な機能を確認した。また、回遊性を高める企画として、地域住民による「港町油津へえ～ほお～まちあるき」を2週続けて実施し、これを機に地域の記憶を継承する取り組みがスタートした。

さらに、堀川運河を美しく歩くことをテーマに、小野寺 MARIKO 氏を招いてウォーキングイベントを実施した。

まちあるきの取り組み以外は単発的なものを感じるが、参加者からの評価は好評であり、この取り組みを少しでも非日常から日常へ昇華できると良かったと感じている。あまりにもタイトなスケジュールを組んでしまったことからかなりハードな時間を過ごすこととなったが、自治会やまちづくり会社など関係者の協力があつたことで何とか最後まで実施することができ、思い出に残る仕事となった。



【図1】認定当時の日南市中心市街地活性化基本計画より



【写真1】へえほおまち歩き試行



【写真2】本イベントとオープンカフェ空間



【写真3】ウォーキングレッスン

日南市役所 商工政策課 商工係
主任主事

たかはし ななみ
高橋 奈々美

創業支援を担当し、子育て支援や社会復帰を推し進める在宅ワークの可能性を拡げるテレワーカー育成講座を起ち上げた。同時に、油津赤レンガ館の環境を活かしコワーキングスペースの開設を担当し、IT企業誘致の足掛かりを整備した。



活動人材発掘期-2014（平成26）年度-

13 油津赤レンガ館コワーキングスペース開設

1. きっかけは、「クリエイティブ」

「油津にある赤レンガ館は、クリエイティブで感性が刺激される、いい場所だよ。」とある起業家の方から評価を受けたことが、一つのきっかけとなったのを覚えています。平成26年4月、日南市では、自ら仕事を創る事のできる「起業家」を育成するため、その拠点となる「コワーキングスペース」を設置しようとする動きがありました。当時、油津赤レンガ館は、自由に見学できる施設として開放されており、観光客の休憩場所として利用されておりました。

2. コワーキングスペース

「コワーキングスペース」とは、事務所スペース、打ち合わせスペースなどを共有しながら、それぞれが独立した仕事を行う共同のスペースと言われています。ホームページを検索すると、どこもおしゃれな空間が広がっていて、パソコン1台で効率よく、かっこよく仕事をする。そんな時代なのだと感じた瞬間でした。

3. 苦労した市民への説明

自治会などを中心に説明会を開催しておりますと、横文字で、聞きなれない言葉に、「どこかの企業の事務所になる」という解釈をしていた方もいらっしゃいました。油津赤レンガ館は、平成9年に競売にかけられそうになったところ、地元の有志で合名会社を設立し、買取り、保存した歴史があります。地元の方にとって、とても大切な

場所です。市として、後世に残していくためにも時代にあった活用も必要なのではないかと思っており、想いは同じであることを丁寧に説明させていただきました。

4. 立ち上がるまんま倶楽部

平成26年11月、油津赤レンガ館の2階にコワーキングスペースがオープンしました。そのような中、施設管理を任された地元の女性グループまんま倶楽部は、「訪れる方にもっと楽しんでもいただきたい」と発起。温かい飲み物の提供や若者からお年寄りまで楽しめるカルチャーイベントを企画するなど新しい取組を行いました。特にコスプレイベントについては、共通の趣味を持つ市内外の若者達が集い交流する場となっており、毎回、好評であります。

5. 交流拠点として

現在の油津赤レンガ館は、コスプレイベントやかごバックづくりなどのイベントを楽しむ方、コワーキングスペースで、講座を受講される方、仕事をされる方もいます。コワーキングスペースでは、Webライターを育成する講座が開催されるなど、市民への新し

い働き方を提案したり、スペースの一部を年間契約してくださっている企業3社が、利用したり、市内に新しく事業所を開設するIT系企業が、準備のため、利用したりもしております。また、そこを拠点に起業された方もおります。油津赤レンガ館は、中心市街地活性化計画では、観光拠点施設の中間拠点施設と位置づけされていました。現在では、当初の役割・機能をそのままに、大正期のモダンな面影を残している空間を利用して、いろいろな目的をもった多種多様な方々が利用する交流拠点となり、賑わっております。



【写真1】コアワーキングスペース



【写真2】まんま倶楽部のスタッフ
(写真；まんま倶楽部提供)

【事業概要】

- ①事業内容：歴史的価値のある文化財にコワーキングスペースを設置することにより、最先端の技術を持つ新しいビジネスをつくる方々を呼び込む。
- ②事業期間：平成26年度
- ③担当課：商工観光課
- ④事業費：1,368,200円（机、椅子等購入費）

日南市役所 地域振興課 まちづくり係
主任主事

みずぐち しょう
水口 将

中心市街地活性化事業の後半において、会議・WG・事務局の運営を担当した。交通社会実験の方針転換に伴い、日南海岸のサイクリストを日南市内に呼び込むべく、自転車ライフ談議所の運営に取り組んだ。



□□□□5□ 拠点整備活発期 -2015（平成27）年度-

14 自転車ライフ談議所の開始→日南海岸サイクルラインへの発展

自転車ライフ談議所は、中心市街地における自転車の利活用を目的として立ち上げた会議体である。市役所、サイクリング協会、日南海岸地域シーニックバイウェイ推進協議会（以下日南海岸きらめきライン）、まちづくり団体等で構成されている。目的としては、中心市街地の交通モードを考える際に、自家用車、公共交通に加え、中心市街地内の商店を回ることや観光客による観光ゾーンの回遊など、これまで検討されていない新たな交通として「自転車」があるのではないかと考え、立ち上げられたものである。

事業検討にあたり中心市街地での自転車の利活用を考えた際、一般の方向けのエリア内回遊と、市内外のスポーツサイクル利用者に、市内を回遊してもらう拠点として、中心市街地に立ち寄ってもらう二つの案が考えられた。中心市街地は、宮崎方面から日南を回る際に結節点となる場所であり、近年、スポーツサイクル利用者が増加していることもあって、まずは市外から来るサイクリング愛好家に、中心市街地へ立ち寄ってもらえないか、動向調査を含めたサイクルラック設置の実験を行うこととなった。

当初このような目的からスタートした事業であったが、サイクリング愛好家の動向を知るためにサイクリング協会の方との協議が増え、また、油津へ立ち寄りってもらうことを考えた場合に、日南海岸というフィールドの魅力

を発信することが、結果的にサイクリング愛好家を多く呼び込めるのではないかと多くの意見も多く、日南海岸の道路と景観に関する活動をされていた、日南海岸きらめきラインともつながりが生まれてきた。日南海岸きらめきラインも、東九州自動車道が日南まで開通した際には、日南海岸の車の交通量が減り、地域の元気がなくなるのではないかと考えており、自転車を含む多様なモビリティで道を楽しむ方法を模索していた。

様々な団体に協力いただきながら事業の検討を行っていたが、「日南海岸×自転車」というキーワードの持つ力は大きく、中心市街地へのサイクリング愛好家の引き込みという当初の目的を飛び越え、きらめきラインや民間のまちづくり団体、サイクリング協会などが協力し、県産の杉材を使ったサイクルラックの開発や、登録制の立ち寄りポイントを設けインターネットでの閲覧できるような環境整備など様々な動きが生まれてきた。さらには、隣市である串間市のサイクリング協会やまちづくり団体も加わり、県南全体で

日南海岸をサイクリングロードにという大きな動きに繋がっていった。結果として、商店街や道の駅にもサイクルラックが置いてあるという情報も少しずつ広がり、サイクリングの昼食に商店街を利用してもらえるなど、少しずつではあるが、当初目的であった新たな誘客につながっている。今後は、まちなか回遊の取組みについても協議していきたい。

自転車ライフ談議所は、当初こそ行政の呼びかけにより立ち上がったが、その後は日南海岸サイクルラインとして、民間主導で定期的な意見交換がなされており、行政は参加者の立場となっている。サイクリングというキーワードで考えた場合、行政は市境や県境を気にするが、走る人にとってはひと続きの道であり、地域を盛り上げたいと活動している方にとっても同様である。現在は、市域をまたがったサイクリングルートの設定など、行政の枠にとらわれない活動が進行しており、このような地域をまたいだ取組みが、今後のまちづくりの一つのヒントになるのではと考えているところである。



【写真1】自転車ライフ談議所の様子



【写真2】社会実験用サイクルラック作成

日南市役所 地域振興課 まちづくり係

課長補佐兼係長

ながもと こうすけ
長本 公介

中心市街地活性化事業に係る会議・WG・事務局運営を担当した。「港町油津“へえ～”“ほお～”まち歩き」の持続可能な実施体制づくりに向け、客観的な視点で地域協議会の自立運営に関する検討や調整を行った。



□□□□5□ 拠点整備活発期 -2015（平成27）年度-

15 へえほおまち歩き本格実施

油津地区は、江戸時代に掘削された堀川運河をはじめ、昭和初期まで東洋一のマグロ基地を誇った油津港や赤レンガ館などをはじめ、「水辺」「歴史的資産」が点在するエリアであり、このような豊かな資源を後世に伝え、魅力を市内外に発信する取り組みは、地域の有志たちによって、取組まれてきた。

今回、中心市街地活性化事業において商店街の再生事業や市子育て支援センターの整備、複合機能ビル整備など、官民が主体となって事業が展開されている中、地域住民によるまちづくりへの参画の機運づくりが課題と考えていた。

幸いにも、油津地区には、住民主体が自ら考え行動する組織「油津地域協議会」が存在していたことから、油津地区に点在する「魅力ある空間」を活用した、市内外の方に地域資源を散策していただく「まちあるきイベント」の実施を検討することになった。

まず、取組みにあたって、地域の魅力を情報発信するだけではなく、誰でも・いつでも地域の方が案内役に携わるなど、多くの住民が参画する機会を創出すること、更に、事業を通して地域コミュニティの再生と地域資源を後世に伝えることもテーマとして掲げ実施している。

そのため、まちあるきコース内にある資源に精通した地域の方を案内役として担っていただき、普段、耳にすることの出来ない昔話や出来事、由来などを聞くことができた。参加者からは、自然と“へえ～”“ほお～”との言葉が発せられることからイベントの名称になっている。

また、自分たちのまちのすばらしさを理解していくために、油津小学校の児童にも参画いただいている。毎回、油津小学校の児童が学習している成果を参加者に披露している。子どもたちの目線で、自分たちが住むまちの魅力を発信するなど、参加者からも好評となっている。

第1回の“へえ～”“ほお～”イベント」を平成26年11月に実施し、これまで6回実施している（平成28年度末現在）。

これまでのコースは様々である。コース設定から当日の企画・運営は、油津地域協議会会員の意見によって成り立っている。当初に比べ、会員の意気込みも着々と増しており、更に、油津地域協議会の事業として定着し、我がまちに対する誇りと自信にもつながっていると実感している。また、おのずと若い会員が積極的に参加する姿勢も段々と見受けられるようになってきた。

当初、目的とした幅広い世代によるまちづくりへの参画と、まちづくりの想いを後世に伝えていく動きは達成できたと考えるが、今後の更なるチャレンジにも期待したい。



【写真1】へえほおまちあるきの様子



【写真2】第4回へえほおまち歩きでは女性スタッフがお孫さんとともに運営にあたった



【写真3】平成29年2月のまちづくりセミナーでは長崎さるくを学び、へえほおまち歩きの今後を考えた

合同会社アトリエ T-Plus 建築・地域計画工房

代 表

つじ よしひこ
辻 喜彦

平成14～24年度・堀川運河再生事業に、
そして平成25年度～市民参画の促進に携
わった。
14年の長きに亘り、油津のまちに育てて
いただきました。ありがとうございました！



□□□□5□ 拠点整備活発期 -2015（平成27）年度 -

16 ウォーキングレッスン継続実施

「100歳まで、元気に自分の足で歩くよろこびを伝えたい！」これが、デュークズウォークで著名なデューク更家氏公認ウォーキングスタイリスト・マエストロ小野寺 MARIKO さんの信条である。

平成26年夏、中心市街地活性化事業がスタートし3年目、木藤サボマネの進める商店街再生と並び「堀川運河と油津港を軸として地域文化を継承し、観光を促進しよう！」のテーマを実現するため「水辺利活用」をいかに促進・展開していくかが大きな課題となっていた。

先人たちの想いを継いで再生された堀川の水辺空間が利用されずに閑散としている状況を転換させるために、堀川夢ひろばを活用した社会実験（イベント）等を試行してきた。しかし、事務局議論の中で、イベント開催による集客よりも、水辺を普段使いできるようにすることの方が本質であり、そのためには、「油津にしかない“水辺”と“港町風情”にふれてひとときを過ご

せるライフスタイル（油津スタイル）」を提案・試行すべきであるとの方向性が打ち出された。

その発想から生まれたのが、“へえ～ほお～まちあるき”と“ウォーキングレッスン”である。

ウォーキングレッスン講師には、冒頭の小野寺 MARIKO さんを招聘した。ご主人（小野寺康氏）が設計した堀川夢ひろば広場でレッスンを行ってみたいというご本人の希望もあり、短期間でプログラムを組むことが出来、レッスン開催の運びとなった。以降、平成27年度にかけて、計3回のレッスンを開講し、各回とも日南市内外からの受講者を募集し延べ72人が参加し開催した。

第1回：平成26年11月30日（日）
14:00～16:00

（雨天の為、於・商店街アーケード下）
第2回：平成27年8月8日（日）
18:30～20:00
（於・堀川夢ひろば）

第3回：平成27年11月22日（日）
10:00～12:00
（於・堀川夢ひろば）

レッスン開催にあたっては、日南市地域振興課が担当課となり、日南市健康増進課・日南市ウォーキング協会・日南まちづくり株式会社からの協力を得ている。

小野寺 MARIKO さんの魅力的なキャラクターとユニークなレッスンスタイルによって、各回の全ての参加者からは、一様に高い評価を得ることができた（【図1、2】アンケート結果参照）。

また、第3回レッスンの際には、同日催されていた連携イベントにおいて、県立看護大・串間教授とのトークセッションも開催した。受講者からは、再度のレッスン開催を望む声も多いが、関係各課および関係者等との連携が十分とはいえず、3回の開催に留まっている。

レッスン受講者は、50歳代以上の市民が多く、リピーターも増えていたが、それ以上の取り組みの輪を拓ける主体が顕れず、未だ一般市民へレッスンの成果が浸透している状況に至っていない。



【写真1】第1回の様子



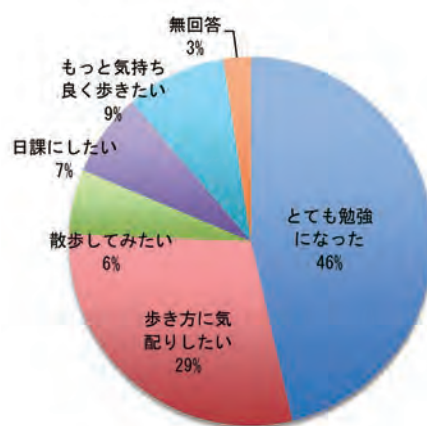
【写真2】第1回の様子



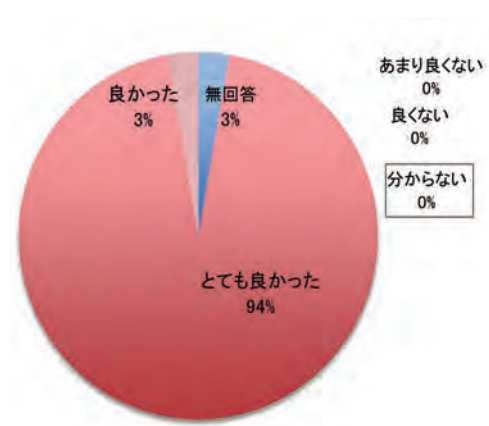
【写真3】第2回の様子

日南市全体が高齢化社会に入り医療費負担の増大等が課題となっている現在、冒頭のMARIKOさんの信条は、これからの地方都市のまちづくりに大きな意味を持っているだろう。高齢者や親子連れが、普段からまちなかへ歩いて出てきて、友人たちと食事やおしゃべりし、時には来訪者へ道案内し、堀川運河の水辺でひとときを過ごせるライフスタイルを築いていくことは、商店街再生とはまた違う側面で「日南での暮らし方」を豊かなものにすることと信じている。

中活事業が終了し、長年通い続けた油津のまちづくりプロジェクトから退く身としては、今後、第三者組織等が中心となって、より市民レベルでウォーキングレッスンを開催・浸透してもらうようになることを切に望んでいる。そして、いつの日か、「いつまでも自分の足で歩くよろこび」を伝える伝道師が日南市から生まれ育ち、水辺とふれあう「生き生きとした暮らし方」が定着していくことを心から願っている。



【図1】レッスン受講の感想（計3回分）



【図2】「歩く」ことへの関心度



【写真5】第3回の様子



【写真6】第3回の様子



【写真4】第2回の様子



【写真7】第3回（トークンセッション）の様子



【写真8】第3回（トークンセッション）の様子

建築家

(株) 環・設計工房 代表取締役
九州大学工学部・福岡大学工学部 非常勤講師

あゆかわ とおる
鮎川 透

2015年度より油津まちづくり会議デザイン部会の部会長を務める。多世代交流モール整備事業では設計者選定委員会委員長として、油津商店街の新たな賑わい空間の創出に貢献した。



□□□□5□ 拠点整備活発期 -2015 (平成27) 年度 -

17 油津 Yotten・ABURATSU GARDEN 整備

平成26年度、(株)油津応援団が中心になり多世代交流モールの創設に踏み出した。ABURATSU COFFEEの向かいにある、空き家になっている元スーパーの建物の半分(約700㎡)を賃借の上リノベーションする計画。建設費の2/3を国庫補助、1/3を市の補助と事業主の油津応援団が負担するというスキームで、設計者選定のあたり様々な議論を経て二段階の公募型プロポーザルコンペを実施することになった。どのような施設が望ましいかを油津応援団内部で議論を重ね、それを事業主の意向として参考資料とするとともに、事業費は120,000千円以内で平成27年9月竣工という条件を示した。また出来るだけ多くの建築家の参加を期待して応募条件のハードルを低く設定した。

第一段階は提出の締め切り(11月4日)に全国から78作品の応募があった一方、地元九州から14(うち宮崎3)という低調さは残念だった。翌日の審査会にて7作品を二次審査対象に選定、内訳は東京3、神奈川1、京都1、福井1、宮崎1、だった。二次審査は、11月26日現地にて100人程度の市民や関係者を前にプレゼンテーションと質疑応答による公開審査とした。終了後すぐに審査会を開催、最優秀賞は水上哲也建築設計事務所が特定された。それは商店街の活性化の可能性を感じさせるシンプルで美しい空間を減築により創造、特に20mの長い

カウンターの飲食ゾーンは独創的な提案だった。

水上哲也建築設計事務所の設計監理により平成27年11月21日グランドオープン。活動の複合空間である油津Yottenと、長いカウンターに飲食の6店が複合する油津食堂が、アーケードに直交した中庭を挟んで緩やかにつながっている快適で都会的な居場所が出現した。新生Yottenやカープ館とともに多目的な活動空間は多様なイベントや日常の活動などに多くの市民が訪れる。またクルーズ船入港の時には外国人で賑わう新しい風景を見ることもある。その向かいに12月11日オープンした「ABURATSU GARDEN」は六つのコンテナを組み合わせた、パンやスイーツの販売・イートインや美容サービス等の複合店舗群。ふらりと立ち寄れる雰囲気若い市民を引き寄せている。コンテナを活用したインスタント店づくりとリノベーションによる

複合施設づくり、いずれもイニシャルコストの負担軽減を目指した努力の結果である。空き家が広場やレストランになり、空き地に路地と店が出現するという目に見える変化が、歩行者の増加やその後の出店や事業所の入居に大きく寄与して、活性化のターニングポイントであったことは間違いない。



【写真1】第一次審査の様子



【写真2】第一次審査の作品公開の様子



【写真3】完成した油津 yotten

日南市役所 観光・スポーツ課 観光係

課長補佐兼係長

たかはし たかひろ
高橋 貴浩

観光振興や観光拠点施設整備の検討を担当した。油津港の海外クルーズ船が寄港の急増や、広島カープ人気の高まりとともに天福球場を訪れるファンの増加に合わせ、地元日南市での受入れ体制を整備した。



体制移行検討期 -2016（平成28）年度-

18 新たな観光客の急増（広島カープ・クルーズ船など）

広島東洋カープ（以下「カープ」という。）は、昨年25年ぶりのリーグ優勝を果たし、惜しくも日本一を逃したものの、ここ数年の人気ぶりは、キャンプの来場者の増加（平成24年春季2.8万人→平成28年春季5.7万人と倍増。更に平成29年春季は7.7万人を見て明らかにである。

そして、時を同じく、25年度に全国公募により選ばれたサポートマネージャーの木藤氏による、油津商店街の空き店舗対策等の事業もスタートした。

カープのキャンプ地である天福球場にほど近い油津商店街では、これまでに、油津カープ館、あぶらつ食堂、ARURATSU GARDENなどが次々にオープンし、キャンプ期間中には商店街手作りの周辺マップも配布され、球場と商店街を結ぶ「カープ一本道」が誕生するなど、新たなキャンプの楽しみ方も生まれた。

一方、キャンプ期間中は、市内の宿泊施設が土・日を中心に満室状態となり、日南市の食事・観光を楽しみたいという方にとっては、まだまだ受入環境が整っていない状況もあり、イベント民泊の実施や学生によるゲストハウスがオープンするなど、新たな動きも始まった。

今後は、カープキャンプと商店街が連携することで、これまでになかったカープファンの交流の場として賑わいや、地元住民のカープキャンプ地であることの意識が高まってきたことを踏

まえ、更に周辺の観光地への回遊に結び付けていくことが不可欠である。

そして、もう一つ、大きく油津地区のインバウンド環境に変化をもたらしたものと、油津港への大型クルーズ船寄港がある。

平成28年9月の安部首相の所信表明では、「油津港では海外からのクルーズ船が4年前の3倍に増え、英語での観光案内を地元の高校生が買って出るなど、地域に活気が生まれている。」との発言があった。

このように、クルーズ船寄港が増加した背景には、これまでの海外でのクルーズ船誘致活動の成果と、平成27年度に16万トン級のクルーズ船寄港が可能となり受入体制の整備が図られたことによるもので、28年には国内外から22隻が寄港し、大型バス100台以上の観光ツアーや、2,000人もの乗客が油津商店街に押し寄せ、食事やショッピングを楽しむ状況となっている。

あわせて、クルーズ船寄港の効果を広域的に発揮するため宮崎県南部広域観光協議会（27年3月設立。6市4町等で構成。）により、油津港を拠点とした様々な観光コースの企画・提案がなされ、「次は別のコースに行ってみよう」など、リピーターも意識した飽きさせない寄港地づくりも進められている。

今後は、クルーズ船寄港を本市ならではの地域資源と捉え、市内への経済効果の波及やインバウンド受入体制の充実などを図り、更なる油津の賑わい

の創出と、観光客に快適な日南の旅が提供できるよう、取り組みを進めなければならない。



【写真1】広島カープリーグ優勝の様子



【写真2】広島カープ優勝パレードの様子



【写真3】クルーズ船寄港時の港の賑わい



【写真4】クルーズ船寄港時の店商街の賑わい

日南市役所 地域振興課 まちづくり係
主 査

たけした みつや
竹下 光也

建設課所属時よりサイン整備を担当した。地場産材である飫肥石や飫肥杉を活かしたデザインを採用し、施設案内、通り名、総合・周辺案内など、複数タイプのサインを段階的に設置することで、油津を歩いて巡る観光ネットワークの形成を図った。



体制移行検討期 -2016（平成28）年度-

19 サイン整備完了

本市では、これまでサイン整備に対する計画がされておらず、目的地へわかりやすく案内誘導するサインやサイン同士の関連性、統一性がない状況であり、利便性もさることながら、都市空間としての景観の配慮が課題となっており、道路および歩行者への利用の目的に応じた的確な情報提供とともに、市民、来訪者に対しても、わかりやすく、かつユニバーサルデザインや景観に配慮したサイン整備の再構築が求められていた。

このため、油津地区のみならず本市全体を対象とした、サインの役割や位置づけ、設置に対する基本的な考え方や地域に応じたデザイン性を明確にし、まちなか案内サイン整備を実施することとした。

サイン実態調査などから挙げたサインネットワークやサインの充実・効果的・効率的な配置、デザインの一体性が不十分などの課題が確認され、これらの課題を整理し、目標を「まちをわかりやすくする」「まちを美しくする」「まちのらしさを伝える」に設定し、総合、周辺、誘導サイン等の仕組みやデザイン、配置場所等を定めていった。

また、サインを単に公共施設として整備するのではなく、地域住民がまちづくりに参画できる機会を促進するために通り名サインの整備にも取り組んだ。

通り名サインについては、油津地区においてシーニックバイウェイ推進協議会が設置した通り名社会実験があり、2009年に実施された社会実験では、計画段階から地区の通り名を地区住民によって命名され、それを飫肥杉看板によって設置された。

この取り組みは、地域住民が来訪者をもてなし、道案内や由来を伝える手法として評価されており、今後も地域のコミュニティ再生や市民活動促進に資するとともに、高質化された道路景観との一体化も図るため、飫肥石を使用した通り名サインの設置を本事業により実施した。

案内サイン事業は、平成22年度の基本構想から始まり、これまでに、堀川運河を中心としたエリア全体の施設を紹介する総合案内サインを3基、歴史的施設を中心に一定のエリアを紹介する周辺案内サインを6基、油津地区を代表する施設を紹介する施設案内サインを11基、来訪者がスムーズに各施設に移動できるようにする方向誘導サインを19基、地域住民のまちづくりへの参画によって命名された通り名サインを13基設置した。

これにより、利用者が円滑に移動するための視覚的情報の伝達とともに、地域の景観向上や市民、来訪者の回遊性の向上等により、地域の活性化の一つ装置になると思われる。



【写真1】飫肥杉による旧看板



【写真2】施設案内サイン



【写真3】方向誘導サイン（飫肥杉を使用）



【写真4】サイン設置場所の確認

竹林知樹スタジオ代表 九州大学学術研究員

たけばやし と も き
竹林 知樹

登録ランドスケープアーキテクト・自然再生士。九州大学工学部卒業、同大学院（旧土木工学）修了、米国コーネル大学大学院ランドスケープアーキテクチャ学科修了。Schweingruber Zulauf Landschaftsarchitekten（スイス・チューリッヒ）、大成建設株式会社を経て、福岡にて竹林知樹スタジオ開設。九州大学学術研究員。



体制移行検討期 -2016（平成 28）年度-

20 観光 3 拠点リニューアル（ゲオ跡地、赤レンガ館、堀川資料館）

私は 2016 年度の最終年のみ、中活事業に関連して行われる事業のデザイン検討役として参画した。具体的には、(1) ゲオ跡地駐車場整備、(2) 堀川資料館の改修、(3) 油津赤レンガ館 1 階の改修、そして (4) 油津地区まちなか案内サインのデザイン検討を行なった。

油津の案内サインや空間デザインを考えるため、油津を含めた日南市域を一通り回った。その中で考えたのは、長い歴史はあるもののなお捉えどころのない油津を表現する「〇〇のまち」といえる〇〇とは何、であった。飢肥地区は「城下町」、南郷は「海の絶景」、北郷は「山の癒し」、ちなみに都城は「肉と焼酎のまち」、長野県の小布施町は「栗と北斎と花のまち」……。今回関わるデザインの対象物と向き合う中で出した私なりの結論は、油津は「飢肥杉と堀川運河のまち」であった。そしてこれを共通テーマとして、案内サインや空間デザイン案を検討することとした。

○中活事業でやろうとしたこと、

やったこと

個別の案内サインや空間デザインを取り纏める全体の大きなゴールを、「飢肥杉と堀川運河のまち・油津」という街のイメージをデザインしたものを通じて来街者に感じてもらうこととした。(1) ゲオ跡地整備については、現在の建物を残すにしろ、新たな建物を建てるにしろ、建物を壊して公園兼駐車場とするにしろ、未完成の形で終わっている夢ひろばとどううまく接続させるか

を重要課題として、様々なシナリオについて検討した。(2) 堀川資料館の改修については、来街者も地元住民も気軽に集まることができ、さらには観光案内も兼ねつつパソコンを開いて仕事もできる空間、名付けて「堀川観光ラウンジ」のデザインを検討した。(3) 油津赤レンガ館の改修については、この建物自身が住民の保存運動によって生き残った、油津まちづくりの情熱の結晶である。建物一部を「油津まちづくりミュージアム」として、まちの歴史や堀川運河再生を契機とした近年のまちづくりの記録をしっかりとした設えで展示することで、ビジターも住民も油津の歴史を学び散策を楽しむ拠点として再生する検討を行った。(4) 案内サインについては、設置場所や案内対象物の選定を通じて、油津地区の各観光拠点を①エントランス拠点、②中継拠点、③目的拠点・エリアとして性格づけをし、それらを結ぶ回遊ネットワークを

考案した。ゲオ跡地、堀川資料館、油津赤レンガ館はこの回遊ネットワーク上の重要な拠点であり、将来の整備による成功が不可欠である。

○今後のまちづくりに寄せる思い

油津まちづくりは長年に渡るが、特に 2000 年代以降実施されてきたデザイン事業のディテールから染み出るデザイナーの思いを感じながら、今回のデザイン検討を行なった。今後も様々なまちづくり事業が実施されていくであろうが、継続性をもった良質のデザインがまちに蓄積されていくことで、油津らしいまちの空気感が構築されていくことを期待します。



【写真 1】日南市観光案内所（ゲオ跡地）



【図 1】堀川資料館の改修パース
（図は九州大学から提案されたものであり、あくまでもイメージです）

日南まちづくり株式会社
総括業務主任

ふじい のぶき
藤井 伸行

日南まちづくり株式会社にて複合ビル整備全般を担当した。さらにこれまでの経験を活かし、調理や音響など多彩なスキルを水辺利活用社会実験や商店街でのイベントにて発揮し、夢ひろばや商店街の賑わいづくりを支える。



体制移行検討期 -2016（平成28）年度-

21 複合ビル Itten ほりかわ 完成・オープン

事業のきっかけは約10年の平成19年にまでさかのぼる。当時、現在の複合ビル建設地にあった空きビル（旧サンシャインビル）が競売により県外企業が取得するという情報と、隣に隣接する宮崎銀行油津支店の老朽化による移設計画の情報に、今後の中心市街地の更なる衰退に危機感を募らせた当時の商工会議所会頭が、発案した計画である。

平成21年頃より、日南市中心市街地活性化基本計画の策定、国への申請作業のなかで、様々な計画内容の検証、変更を行い平成24年に最終の計画が確定。平成25年に基本設計のプロポーザルを行い本格的に事業に着手。平成27年工事に着工。その後1年10か月の工期を経て、平成29年1月に竣工。事業予算に関しては、平成25年頃より地元金融機関と協議。平成26年に優良建築物等整備事業の認定をいただき、最終的に地元3銀行の金融団の協同融資にて資金調達。計画着手から竣工までは若干タイトなスケジュールではあったが、大きなトラブルや遅れなどもなく、またテナントのリーシングや床権利売却なども、ほぼ計画通りに収まった。

苦労した点は、地権者との交渉、金融機関からの資金調達のための交渉など。事業を進めていく中で特に気を配ったのは、地元住民や近隣店舗の方々の、本事業への理解を深めてもらうための作業。そのために幾度となく

対話を行った。また、商店街との連携は本事業の着手前、当社設立当初から積極的に行っている

街全体の景観、イメージが一新したのは無論のことだが、当施設の半分以上は住居施設である。すべての入居が予定通りに埋まればこのエリアに約100名程度、住民が増える事となる。その住民増の効果が、今後どのように反映されるかが楽しみなどところである。

特にビルに入居する行政施設の利用促進などは、今後まだまだ力を注いでいかなくてはならない。また、商業店舗の方では、賃料をぎりぎりまで安く設定した効果で、新規に商売にチャレンジする方や、若い経営者のグループなどがお互いの店舗が連携した運営運営の仕組みなどが自発的に発生し始めている。

本格的に事業が動き出して約3年、無我夢中で業務に邁進してきた。完成してようやく一段落と思いたいところではあるが、これはまだ、スタートラインに立ったところであることは重々承知している。この先この施設の安定した運営をしていく事が当社の責務である。

当社が行ったのはいわゆる「ハード整備」ではありますが、これはあくまで賑わいづくりのためのしくみの「仕掛け」を作ったに過ぎません。まちを発展させるためには様々な要素を組み合わせることで良くして必要があると思います。当社は日南市のまちづくり会社の使命として、一過性の盛り上がりで終わらないよう、地に足をつけた活動で、今後もまちの発展と賑わい創出のために努力してゆきたいと思っています。

【事業概要】（事業内容、事業期間、担当課・関係者）

事業内容：「市民活動支援サービス」「子育て支援施設」「医療介護サービス」「商業施設」「居住施設」などが一体となった、複合機能ビル及び、立体駐車場を合わせた複合機能施設の整備。

事業期間：平成25年3月～平成29年3月。

事業主体：日南まちづくり株式会社。

担当 事業に関係する業務全体。

【事業費】（金額、活用した補助事業名、等）

総事業費：約21億円

活用した補助金：国交省の“優良建築物等整備事業”

補助金額は総事業費21億円のうち約4億円

日南市役所 地域振興課 協働係
主 査
谷口 雅彦
たにぐち まさひこ

日南市全域での市民協働の推進を担当した。市の総合戦略をふまえ、「創客創人」のコンセプトのもと、市民との協働を促進する創客創人センターの開設に取り組んだ。



体制移行検討期 -2016（平成28）年度-

22 市民活動支援センター開設

市民活動支援センター

（日南市創客創人センター）の開設

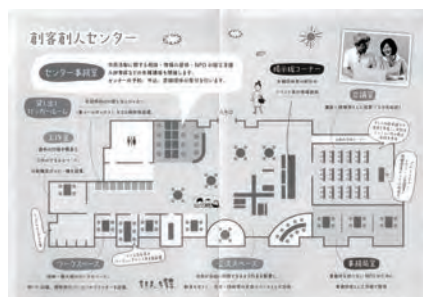
まちの元気・心の元気を形成し、まちなかの賑わいを生み出すため、地域住民相互の交流や市民活動団体の活動を促進する市民活動支援センター（施設名称：日南市創客創人センター）を平成29年1月15日に移転・開設した。

移転・開設にあたっては、平成26年度より施設の概要・仕様等の検討に入り、想定される施設利用者に対し、ヒアリングやワークショップを行ない、旧センターの機能を拡充させるとともに、利用者の目線に立った使い勝手のいい施設を目指した。

※平成27年度：実施設計

平成28年度：内装工事

また、日南市は飢肥杉の街である。飢肥杉は、日南市民なら誰もが、見たりにおいがしたりすると懐かしく癒された気持ちになる。この癒し効果がある飢肥杉を内装にふんだんに使用し、リラックスできる癒しの空間を提供した。



【図1】創客創人センターパンフレット

市民活動支援センターから

創客創人センターへ

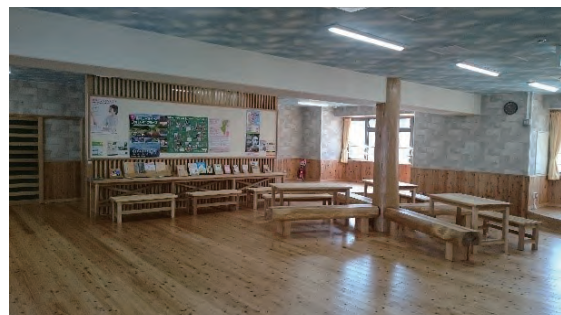
当センターについては、当初計画していた地域住民相互の交流や市民活動団体の活動を促進する市民活動支援センターに加え、市商工政策課が行う『創客創人ローカルベンチャー支援事業』の拠点施設として起業・創業支援グループが入るとともに、宮崎大学のサテライト DESK も入る事が決定した。

また、当センターが入居する複合機能ビル（Itten ほりかわ）1階には次世代育成支援の一環として市子ども課が「子育て支援センター」を設置することからも、当複合機能ビルについては、『市民活動支援』、『起業・創業支援』、『子育て支援』そして『大学教育』など人財育成・養成を行うには最高の環境ができていると考えている。

そこで、『市民活動支援』の枠を超え、日南市重点戦略プランの「人づくりこそがまちづくり『創客創人』」のコンセプトのもと、本市における人財育成の拠点施設として運営をしていきたい。

	開館時間	休館日	会議室	交流スペース	Wi-Fi	その他
旧センター	9:00～19:00	日曜 年末年始	1室	なし	なし	印刷機
新センター	9:00～22:00	年末年始	5室	あり	あり	大判プリンター 印刷機 貸出ロッカー

【図2】旧センターと新センターとの比較表



【写真1】市民が自由に利用できる交流スペース。明るい日差しと飢肥杉の香りが心地良い。



【写真2】Wi-Fi完備、パソコンやプリンタが設置されたワークスペース。少人数のミーティングもできる。

日南市役所 こども課 こども応援係
課長補佐兼係長
もりやま さちえ
森山 佐知江

子育て支援を担当する。東京おもちゃ美術館の木育スタイルを日南にて実現すべく、奔走した。当初は空間デザインの専門家が不在の中、独自に模型を製作しWGにて提案するなど、舐肥杉を用いた日南流の木育スタイルづくりに取り組んだ。



体制移行検討期-2016（平成28）年度-

23 子育て支援施設オープン

木育の拠点となる子育て支援施設を目指すきっかけは、平成26年7月に開催した東京おもちゃ美術館の多田千尋館長の講演会で、日南市内の保育関係者や木材関係者、子育て中の保護者などで木がどんなに子どもの育ちに良いのかを聴き、実際に木のおもちゃに触れ理屈ではない木の持つ温かみや香りがもたらしてくれる癒しを体験した。また、平成27年5月には、パワーブレイス株式会社の若杉浩一氏を招き、「舐肥杉のよさを活用した日南の子育て未来像」と題したシンポジウムを開催し、実際に舐肥杉を使用した園舎を建設している幼稚園園長や建設に携わった建築業者の声や木のおもちゃで遊ぶわが子の様子を保護者の方に発表してもらい、地元の舏肥杉をふんだんに使い、舏肥杉の山に入ったかのような空間を持つ子育て支援施設の建設に向けた気運作りができた。

子育て支援センターの建設スケジュールは二転三転するたびに変更となり、当初のオープン予定を大幅に遅

れることになったが、運営内容について検討したり、多くの方々に相談する時間を作ることができ、多方面からの協力をいただける機会を得ることができた。その結果、日南市子育て支援センターという入れ物を作るだけでなく、子育て支援や木育に関心を持ち、協力をしてくれる人づくりを目指す仕掛けをする時間をいただけたと、今は感謝をしている。

子育て支援センターへの協力をしてくれる人づくりの仕掛けとして、どんな子育て支援施設があったらいいかというニーズ引き出し、子育て支援センターに使われる舏肥杉のことを知ってもらうための舏肥杉見学会や舏肥杉を使ったおもちゃ作り、地元の福祉施設を市民に知ってもらうための交流、子育て支援センターで使うおもちゃ作りへの協力など、市民を巻き込んだワークショップを計17回開催し、延べ1,500人ほどの参加をしていただいた。ワークショップ開催のたびに地元の森林組合や木材関係者はもちろん、

舏肥杉が見つないでくれる市外県外の支援者の輪が広がったと感じている。

「中心市街地活性化事業の中に子育て支援施設を」という計画を聞いてからの5年間は長い道のりだったが、その中で、本当にたくさんの方々に支援、助言、協力をいただき心からの感謝の気持ちでいっぱいである。

このオープンにはようやくこぎつけたスタートラインだと思っている。これまで助けていただいたたくさんの方々への感謝の気持ちを、子育て支援はもちろん、木や山の大切さや木のおもちゃの良さを伝え、商店街との連携を深める拠点であり続けることでお返しし、5年後、10年後にも子ども連れでにぎわう場所でありたい。



【写真1】センターの活用検討



【写真2】造形作家有馬晋平氏がスギゴダマづくりを指導

あなたもスギゴダマづくり大会？
新しい子育て支援センター内にできる「赤ちゃんひろば」で赤ちゃんが遊ぶスギゴダマづくりに参加しませんか？

愛で磨きま杉

「スギゴダマ」は杉の皮から生まれます。ひとつひとつ手作りで動物を使い作り出した後、着色を施します。色とりどりの色を塗り、個性豊かな作品が生まれます。また人間に近づけることで、触れ合いの機会も生まれます。スギゴダマは杉と向かい合うことで生まれました。杉が生きてきた時の環境、生命、水、緑の力、命と人間の関わり等を表現しています。スギゴダマの大地に、感覚を研ぎ磨いていくと、杉の育ちにある物語を思い浮かべてほしいと思っています。

有馬晋平（造形作家）

9:15~12:15
場所/油津Yottenスタジオ

参加対象
小学一年～六年
※小学生は親子での参加

申込み
定員20人 ※先着順

お楽しみ
完成したスギゴダマは、「赤ちゃんひろば」に置く予定です。ご了承ください。

スケジュール
10月～受付
11月～つくり方の説明
12月～スギゴダマづくり
12月18日 片付け・終了

※詳しくはこちらのチラシをご覧ください。

問い合わせ/日南市役所 こども課 づいひのうば（おむさ） TEL: 0987-31-1372

【図1】「赤ちゃんひろば」に置くスギゴダマづくりワークショップの募集チラシ

② 中活関係者による 振り返りコメント

油津まちづくり会議 委員

デザイン部会 委員

日南市役所 担当者

市民（事業者、企画・運営者）

1〇〇〇 { 油津まちづくり会議 委員 }



出口 近士

宮崎大学
教授

油津地区・都市デザイン会議から引き続き、油津まちづくり会議の委員を務める。地元国立大学である強みを活かし、油津地区の活性化にかかわる。

「中活準備期と今後」

少し古くなるが中心市街地活性化事業に至る準備期間について振り返ることにする。私の油津地区との関係は、宮崎県が進めようとしていた堀川運河整備計画を「堀川運河の再生構想」と題して土木学会誌（平成6年）に紹介したことに始まる。この時に、日南大学や油津地区の市民のみなさんが熱

1

心に堀川運河や油津地区の再生に取り組んでいることを知った。その後、いくつかの経緯を経て、篠原修先生が中心となった軍団の猛者たちが参画して堀川運河が魅力ある空間として再生されたが、このプロジェクトが中活事業の起爆剤であったことに異存はないだろう。このプロジェクトに平行して、「通り名社会実験（平成20年度）」も実施され、横店の河野のおばちゃん達とも知り合いになり、油津地区のみなさんの地元愛パワーを知ることになった。

地元の大学としての中活事業との関わりは、宮崎大学の同僚であった吉武哲信先生が主体となり、私は協役に「油津まちづくり会議（平成24～28年度）」への参画の機会を得て“街の活性化”の視点から意見を述べさせて頂いた。

その後、中活事業での木藤亮太さん、油津応援団、田鹿倫基さん達や日南市関係者の活躍の推移を見守りながら、

宮崎県で開催された都市計画学会などの機会にプロジェクトを視察させて頂くなど、オブザーバー的に関わらせて頂いていた。しかし、コトは急変した。地域振興を担う人材を育成するために宮崎大学に地域資源創成学部が平成28年4月に開設され、この学部に変動になった。この学部の科目として1年次後期に「地域探索実習Ⅰ」があり、平成29年2月には学生達が油津商店街などの再生や日南市のまちづくりを訪問調査させて頂いた。

すなわち、今度は自らの教務である教育の一環として油津商店街のまちづくり活動への関わりが開始された。第1段が「堀川運河の再生プロジェクト」、第2段が「中心市街地活性化事業」、第3段の始まりであり、学生と一緒にまちづくりへ参画させて頂きたいと願っている。

油津を初めて訪れたのは県の堀川運河の整備の仕事だった。計画・デザインの陣容は、都市計画の佐々木政雄、都市デザインの小野寺康、ファニチャーデザインの南雲勝志に、まとめ役の篠原である。三角広場に橋をかけるという事になって、地元の大工、熊田原さんが登場した。熊田原さんは船大工の伝統を復活させ、杉板曲げ加工の橋を見事に作りあげた。今も市民に愛されている釘を一本も使わない木橋である。この広場や橋を手がけている時期から、本丸は中心市街地だよと言い続けていた。

市の英断により人材が公募され、中心市街地の活性化に福岡から木藤さんがやって来て、地元

腰を据えた取り組みがはじまった。本当にこんなに寂れた商店街が活性化するのだろうか。皆そう思っていたはずである。丸4年の今、地元資本のマンションも出来て商店街は復活し始めていると聞く。3月末に新たな商店街を歩くのが楽しみである。思えば、言い続けてきた事がやっと実現したのだから。

堀川は県と東京組が中心で地元が参加、漁港も県で東京組。商店街は福岡と地元組で復活。やっと地元が中心になってのまちづくりに辿り着いたかと思う。

東京者（よそもの）が 何時まで仕切る 地方都市

2015.8.26 素山

2



篠原 修

東京大学
名誉教授

油津地区・都市デザイン会議にて委員長を務めた。油津まちづくり会議の委員を務めるとともに、同デザイン部会では相談役として、油津地区のハード整備を見守った。

1〇〇〇 { 油津まちづくり会議 委員 }



清水 満雄

日南市中心市街地活性化協議会
会 長
(日南商工会議所 会頭)

3

私は平成18年4月に日南商工会議所会頭に就任し、その6月に中心市街地活性化法が改正された。奇しくも、油津のビルの競売の話が入り、合わせて老朽化が進む宮崎銀行油津支店の建替えの話も持ち上がったのは、この年の秋頃である。

そこで、私は会頭として、日南市の活性化には中心市街地活性化計画の認定を受けることこそが必要であると考え、商工会議所はもとより日南市に対しても中心市街地活性化基本計画の申請を急ぐよう訴えた。

当時は、計画申請はそう難しくないことだろうというのも心のどこかにあったのだが、計画申請には時間を要することから、まず、ビルについては日南市土地開発公社での取得をお願いすることにした。

そこで平成19年4月、商工会議所内に多数の団体からなる中心市街地活性化協議会準備会を発足させ、すぐに日南市、日南市議会、日南市土地開発公社に対して、中心市街地の保全のための先行取得の必要性、重要性を説き、早期の取得を要望した。

各方面の関係者の理解と実行力のお陰で2カ月後には先行取得が実行され、私は中心市街地活性化事業の達成に向け、決意を新たにしたところであった。

中心市街地にある宮崎銀行油津支店は商店街アーケードに面し、アーケード越しには県南唯一の百貨店である日南山形屋があり、日常的に利用客が多い金融機関である。その移転は、即、人通りの喪失につながると危惧し、油津支店の母店機能を維持した新店舗建設の要望を、商工会議所はもとより日南市、日南市議会とともにに行った。

一方、商店街では平成19年から商店街の活性化を図るために、既に専門家を招請しており、どう図っていくのか、商店街内の大型商業空き店舗をどう生かしていくかを、専門家と商店街が意見交換をしながら計画づくりを進め、「プラチナタウン構想(店舗と住居とポケット駐車場の開発構想)」として、その概要をまとめられた。実際には具現化しなかったが、商店街再生の方向性となるものであったと思う。

商工会議所も同時期に中心市街地の商業活性化のため、中小企業基盤整備機構の専門家をアドバイザーとして招き入れ始めた。中心市街地の活性化について学びながら、のちにタウンマネージャーとなるK氏に年間90日余り訪問いただき、協議会準備会の各委員会で協議による意見集約や協議会の設立、運営についてお手伝いとアドバイスをいただきながら、中心市街地の業種分析や商店街・まちづくりの将来像を描くことが進められた。同時に、複合機能ビル、駐車場にかかる宮崎市の視察研修の実施やビル、駐車場の簡易図面を描いてもらうことで、イメージづくりや建設概要、まちづくりの方向性を提案いただき役に立った。建設にあたっては優良建築物等整備事業の活用について方向性が示されたところである。

さて、中心市街地活性化基本計画の申請にあたっては、中心市街地活性化を協議する中心市街地活性化協議会

(法定協議会)の設立が求められており、経済活性化の向上を推進する商工会議所と都市機能の増進を推進するまちづくり会社の中核となる必要がある。

そのため、私を設立発起人代表として「日南まちづくり株式会社」の設立を急いだ。幸い、日南市の活性化に賛同する商工会議所議員などがほどなく発起人に加わり、発起人から多額の出資を得て、平成20年6月に設立することができた。

しかしながら、中心市街地活性化法では行政の出資が議決権の3%以上必要であることから、日南市と日南市議会に中心市街地活性化事業について説明を行った。出資に対する理解を得ることができたことから、市は平成21年1月に出資し、その月に法定協議会を立ち上げることができた。一步步ではあるが、着々と基本計画申請に向けて事業を進めていたと思い返したところである。

この協議会が設立されたことから、中小企業基盤整備機構・九州本部との関係が生まれ、その後大変お世話になることになった。これについては、後で述べたい。

さて、協議会設立の安堵も束の間、商工会議所職員と日南市職員のみでまちづくりを計画し、推し進めていくことは専門部署を設けない限り困難であることから、法定協議会にタウンマネージャーを設置することを決めた。経済産業省の戦略的中心市街地商業活性化補助金を活用し、商工会議所とまちづくり会社が自己負担をしながら、平成21年度から3カ年間、タウンマネージャーを設置したのである。

タウンマネージャーは、これまでこの事業にかかわってきた日南市出身のK氏にお願いした。タウンマネージャーにはまちづくり全体にかかる事

1〇〇〇 { 油津まちづくり会議 委員 }

業取りまとめや複合機能ビルと立体駐車場の構想取りまとめ、中心市街地活性化事業について住民等にも理解と協力、支援をいただくことなど様々な役割を担っていたことをお願いし、日南市や商店街、協議会での意見集約、説明などにあたっていた。

まちづくり会社に対しては、建設モデルプラン立案会議を設け、私をはじめとする取締役とともに協議を進め、建設内容、建築費用などを提案いただき、まちづくり会社の事業推進に役立ったところである。

K氏にはタウンマネージャー終了後も、まちづくり会社の事業委託先として残っていただき、複合機能ビルの建設実現のため事業に携わっていただいた。お陰で建築設計プロポーザルを実施することができ、応募者から建物デザインやコンセプト、大まかな建築費用などが示され、建築に向けて大きな一歩を進めることができた。計画調整が進むにつれ、宮崎銀行の新築移転計画との調整も必要となり、油津支店敷地と隣接する土地を持つまちづくり会社とわが社所有地の交換交渉まで携わっていただくことになり、K氏には大変なご苦勞をお掛けしたが、感謝申し上げます。

プロポーザルにより設計業者の交渉先が決まったものの、関連業者の不祥事が報道されたことを知ることになった。この先の建設準備、工事、完成オープンまでの話は、日南まちづくり会社をお願いするでしょう。

さて、話は中小企業基盤整備機構（以下「中小機構」という。）との関係に戻りたい。中小機構と

のお付き合いは、平成18年に遡る。国がすすめるコンパクトシティとは何か。中心市街地活性化とは何か。なぜ必要で、どう図っていくのかから始まった。商工会議所だけでなく、市職員にも話を聞いていただき、理解を求めた。

平成19年度、20年度は先に述べたとおり専門家による派遣アドバイザー制度を利用させていただき、商店街の将来像を描いてもらった。

平成21年度からは診断・サポート事業を活用させていただいた。平成21年度にはテナントミックス事業を図るための診断、提案を受け、平成22年度には「食」に注目し、帯広市、高知市の屋台村運営について学ばせていただいた。また、中心市街地への出店者誘致戦略の考え方や、複合機能ビル建設に係る国の「優良建築物等整備事業」の視察研修も実施し、まちづくり会社の事業計画作成の支援も行ってきた。

平成24年度以降は「食」による活性化については、函館市、鹿児島市の事業主体を招いての研修のほか、鹿児島市には実際に出向き、視察研修も行い、民間計画者の計画策定に役立てていただいたところである。大分市のタウンマネージャーを講師として招き、テナントミックスの事例、考え方も学ばせていただいた。

「優良建築物等整備事業」は複合機能ビル建設にとって要の補助事業であることから、商業計画作成について診断、支援を受けた。以前に諫早の事例を視察研修したが、唐津市での事例についても行政のかかわりや事業運営、まちづくり手法について学ばせていただいた。また、整備事業の補助内容、税制について研修会を開催、完成後に必要となる商業計画、ビル管理業務の運営計画づくりも学んだところである。

中小機構の活用は平成21年度から数えても約20回に上り、東京など遠方からの専門家をチームとして派遣いただくなど、講演、セミナー、研修と様々な形で大変お世話になった。特に九州本部の中心市街地サポートマネージャーのO氏には様々なご提案をいただくとともに、情報交換をさせていただいた。事業を進めるにあたって大変有効であり、ご協力に感謝申し上げている次第である。

「優良建築物等整備事業」は宮崎県では初めての事業である。法定開発の市街地再開発事業と違い民間主導の整備事業である。このため、唐津市の優良建築物等整備事業の手法のほか福岡市等の建設コンサルタントに教を請いながらの事業となったが、日南市地域振興課が宮崎県を経由して国に問い合わせをしていただくなど、補助事業の申請や課題解決、事業報告など様々な支援をいただいた。合わせて日南市や宮崎県に対しての建設事業説明についてもお世話をいただいたところである。担当者のご苦勞、ご心勞は計り知れず、ご担当者の多大な支援のお陰で本補助事業が進んでいったことに感謝申し上げたい。

ところで、日南市の中心市街地活性化のうち、商業の中心である商店街アーケードの活性化は不可欠である。まちづくり会社が実際に建設工事に取り組む以前の話をすれば、日南市の活性化に携わるまちづくり会社の事業は、その事務局を商工会議所に担ってもらった。

平成21年4月から商工会議所の専務理事となったO氏が「ふるさと雇用再生特別基金事業」の申請を提案し、商工会議所で計画を作成、申請し、日南市から委託を受けることができた。これによって、まちづくり会社が人材を雇用し事業を実施する流れを作るこ

1〇〇〇 { 油津まちづくり会議 委員 }

とができた。当時のまちづくり会社が商店街や堀川夢ひろばで取り組んできたにぎわい創出事業が中心市街地活性化基本計画に掲載されているが、まちづくり会社から出た芽が少しずつ育ち、若者から年配者に至る広い協力が集まり始め、テナントミックスサポートマネージャーのK氏着任後の今の油津のにぎわいづくりにつながっていると思う。

また、中心市街地活性化の大きな課題に、岩崎商店街の大型空き店舗の利用があった。長きにわたって空き店舗となっており、そこをどうするかが課題であった。「プラチナタウン構想」は計画の進捗が見られなかったため、平成23年に日南市がオラレ日南を誘致し、建物の3分の1近くの利用は図られた。これにより利用客の往来が増えたが、残りの3分の2が空いており、商店街イベントで利用する備品の倉庫として使われている状況にあった。

合わせて、「食の交流事業」にあるグルメモールをどこに設置するのかが課題であった。法定協議会事務局では計画当初に事業計画者に大型空き店舗内での開業を、私は立体駐車場1階での開業を提案していたが、事例で学んだ通り、屋外でも飲食ができる独立した屋台形式で開業したいとの意向が強いため、代行駐車場を仮想の敷地として中小機構の診断サポート事業に取り組んだところである。協議会事務局では診断サポート事業に描かれたパースのほかに、油津が港町であることから貨物コンテナを使った屋台づくりを提案するとともに、事務局員が行った佐賀市のコンテナハウスの事例を紹介するなど事業計画づくりの提案も行った。また、法定協議会事務局が国の補助金に建物の取り壊しについても補助金を使えることを知り、その利用を紹介したところである。

平成26年3月に(株)油津応援団が設立され、日南市とともに事業に取り組み、国の補助金も得て大型空き店舗とその向かいの空き地は、新たな空間として生まれ変わったのである。協議会が活用してきた中小機構の事業も大いに参考にしてもらえたものと思う。大変うれしいことである。

今年4月にまちづくり会社の複合機能ビル「ふれあいタウン ITTEN ほりかわ」がグランドオープンを迎える。これで(株)油津応援団の「Yotten」と商店街の両端に多くの市民が集う新たな空間が完成することになる。ここまで約10年の月日を要してきた。書ききれないほどの課題が山積し、今なお「まちづくり」に対する理解が進まず精神的にもきつことがあるが、一つの大きな節目が迎えられることは感無量である。

しかし、これは中心市街地活性化事業に魂を入れるため、まさにスタートを切れるに過ぎない。油津港はクルーズ船入港が増え、東京オリンピックまでは海外観光客が増えてくることが予想され、日南市も観光振興による地方創生が進んでくるとされる。そこで私の思う次なる課題は、日南市の観光拠点施設の本格的な開設である。

初期の中活基本計画では油津港に設置される予定であったが、現在は日南市が不動産を買い取った堀川沿いの大型空き店舗に観光行政の機能を移すため、日南市観光スポーツ課と観光協会が入居している。この入居は市庁舎の建て替えのために移転してきたもので、庁舎完成後には移転していく予定である。

その一方で、堀川夢ひろばの開発にあたっては、当初計画からこの建物と隣の郵便局を含めた一体的な開発がデザインされていた。商工会議所でも以前から林業会館の話があり、ここ2年

ほどは日南市が林業遺産の認定を受けたことから、この建物が取り壊されることを念頭に、建設予定地の一つとして3階建ての林業資料館、観光施設、展望台を備える「(仮称) 飢肥杉弁甲館」といった構想を立て始めている場所でもある。

そこで、私としては郵便局を日南市テクノセンターに移転してもらい、商工会議所を弁甲館に移転し、1階が観光施設、2階を商工会議所、3階を林業資料館、屋上を展望台としてはどうかと考えているところである。国産材の利用についてはCLT利用による新しい工法が生み出されるとともに、国産材の利用促進を林野庁を中心に国が省庁横断的に本腰を入れて取り組んでいる。よって、私はこの機を逃さず、国産材利用と観光拠点施設の整備による第2次なる中心市街地の活性化構想を練り始めている。商店街のアーケードの天井パネルが取り外された。今後どうされるのかも気になるところである。今年3月に基本計画の認定期間が終わり、法定協議会の解散を考えていたが、最近ではまだまだ必要であるかもしれないなどという思いもしているところだ。

終わりに、中心市街地活性化を提唱してから約10年、基本計画認定を受けた平成24年11月30日の感動は今も忘れられない。認定をもう待てない、建設だけでも着手すると決めた矢先の認定であった。

中心市街地活性化基本計画書の編製は、平成20年9月から始まった。当初は商工観光課の一部署が行なっていたが、平成21年3月の市町村合併による組織改編で商

工課に移った。平成22年4月、市のまちづくり施策を一元的に管理するまちづくり推進室が総務部内に誕生した。総務部長が室長を兼任し、専任職員3名も配置された。これにより計画策定に弾みがついたと思う。平成24年度からはまちづくり課として他課と統合され、現在は地域振興課に再編され、中心市街地活性化事業を所管している。

このような、組織変遷を経ているが、平成19年から計画策定の中心となった担当者1名については、認定まで一貫してこの事業に関わり、基本計画書を仕上げた。内閣府とのやり取りも幾度となく深夜に及んだと聞くが、計画書策定着手から5年近くを経て無事認定を受けられたのである。自前で

計画書を作成してきた彼と関係担当者の能力、頑張りに敬服する次第である。日南市と法定協議会の協議は彼の執筆に譲るとして、日南市が組織的にも本格化していくことを頼もしいと思っていたものである。

今年2月、日南商工会議所は日本商工会議所からまちづくりの取り組みが認められ表彰されることが発表された。今後も日南市が盛り上がっていくよう、日南商工会議所会頭としてまちづくりに邁進していきたい。

私は平成22年にまちづくり会社の代表取締役役に就任しました。当社は複合ビル建設事業の事業主体として、平成25年3月に基本設計のプロポーザルを行い、選考委員会にて決定した楠山設計様と基本設計の自身につて協議を行い、工事の発注を行ったのが平成27年2月の事です。工事を発注するにあたって一番ネックになったのが、工事費の高騰であります。当時円安や東京オリンピックの特需とも重なって、当初事業計画にて予定していた金額から、2～3億円ものアップとなっており、この高騰した工事費を少しでも抑えるために、当初は大手ゼネコンに一括発注する予定でありましたが、日南市からの強い意向により、地元企業にて見積もりをお願いする事となりました。当社としても、地

元の企業にビル建設の工事を請けて頂くのは、何よりもの望みではありましたが、お互いギリギリのラインでの金額交渉を重ね、何とか地元の建設会社の企業体で仕事を請けて頂くことができたのは、私にとっても何より喜ばしいことでありました。

これだけの規模の事業ですので、工事に着手してからも、大小様々な課題がありましたが、当社の取締役一同、当社の現場スタッフ、そして事業全体のコンサルタントをしていただいた九州山口都市文化創研様、事業に関わる全員が一丸となって課題解決に取り組み、結果無事に完成を迎えることができました。

関係者各位の努力で複合ビルは無事完成しました。しかし日南油津のまちづくりはやっとスタートラインに立ったところでもあります。今後この複合施

4



日高 章太郎

日南まちづくり株式会社
代表取締役

設を活用してしっかりと維持していけるよう、これまで以上に会社一丸となってまちづくりへの取組に邁進していく所存であります。

1〇〇〇 { 油津まちづくり会議 委員 }



細田 勝

油津地域協議会
会長

5

5年前に様々な分野の専門家や行政、地元住民を加えて皆で知恵を出し合い、多くの

ソフト事業、ハード事業が企画、立案されて中心市街地活性化事業がスタートした。

今では、多世代交流施設 (Yotten) や、あぶらつ食堂、アブラツガーデンの開業、まちなか案内サインの設置、複合ビル (Itten ほりかわ)、立体駐車場の完成で以前とは比較にならない程の変化をしています。又、人の交流も増え全体が明るくなった。

油津地域協議会では、ソフト事業の一つとして「へえ～ほお～油津まち歩きツアー」(油津の良い所掘り起こしと、油津そのものを多くの人々に知っていただくと同時に、油津が今後どのように変わっていくのかを知ってもら

うツアー)を行政支援のもとに実施した。中活事業終了後は行政支援は無くなるが、今後は民間だけの力でツアーを企画立案、実施して更に多くの市内外の人々に『油津』を見て知ってもらおう努力をしないといけない。中活事業は終結するが、油津の街にとっては、これからが真の意味での活性化へ向けてのスタートだと思う。

昭和30年代の昔なつかしい『油津』の繁栄を再びとはいかないが、それぞれの立場でかかわる人達や地元住民の熱意があれば、現代の新しい形の油津の活性化は確実に進んでいくと確信する。

平成24年11月30日念願の内閣総理大臣の認定を受け、平成24年12月より日南市中心市街地活性化基本計画に沿って今日まで、官民一体となり様々な事業を展開して来た。当初の計画を振り返ってみると果たしてこの事業はどこまで実行出来るのか、正直半分は机上論で終わるのではないかと思った。しかし、先ずテナントミックスサポーター、油津応援団による旧喫茶店舗での「あぶらつコーヒー」に始まり、「油津 yotten」「あぶらつ食堂」「油津ガーデン」また、IT企業の進出などで商店街が活性化し、大型クルーズ船の油津港寄港や今年は広島東洋カープのリーグ優勝が追い風となり益々活気づいた。

そして、まさに日南市の玄関口に日南まちづくり株式会社による待望の複合機能型施設「ふれあいタウ

ン～Itten ほりかわ」のオープン、また大型立体駐車場の完成など油津の街が活性化しつつある。しかしイベント、催事毎に頼らない平日の集客に問題が残る。

5年前に私達の油津中学校卒業生同窓会での県外から帰省した同窓生の一言、『久しぶりに帰ってきたら今の油津の活気のないのはどうしたことか』この苦言に対して何も反論出来なかったが、今年5月に開催する同窓会では「自慢できる油津」を報告することが出来る。しかし、ハード面では着々と進んでいるが、後のソフト面が我々に残された大きな課題である。

また、当初の基本計画の事業ひとつであった油津地区に核となる「観光拠点施設」が設置場所の方針転換で拠点となる施設が無いことが残念である。昔の油津は港から栄えてきた街であることを思うと中心市街地活性化事業の

6



益田 政司

津地区自治会会長 会長
日南市自治会連合会 副会長

市街地のエリアには一部しか入っていないが、諸事情があって利用されなくなった油津港第一突堤に何らかの観光施設をつくり、そこをマグネットとし、商店街から堀川運河沿いに赤レンガ館や歴史資料館の充実を図り、そこをジョイントとし、サイクリングや散歩で回遊できるルートをつくり、大型クルーズ船寄港の「油津港の活性化」を図りたいものである。



小野寺 康

小野寺康都市設計事務所
代表

堀川運河整備にて、堀川夢ひろばや夢見橋の設計デザインを担当した。夢ひろばワークショップでは市民らと広場の現在の利活用状況について直接対話するとともに、油津まちづくり会議デザイン部会の委員も務め、水辺利活用社会実験に尽力した。

7

デザイン部会を中心に様々な議論に参加したが、堀川運河の設計者としては、やはりメインは夢ひろばの活用WSや利活用実験ということになる。堀川運河は、水辺から油津地区を活性化させる目的で整備されたものだが、中心である夢ひろばは、郵便局の移転を前提とし、さらに隣接店舗についても長期的には移転の方向で検討すべきという考えでまとめられたものだ。しかし、結局のところ郵便局移転はとん挫し、隣接店舗も永らく残り続けた。その店舗敷地が日南市によって買い上げられたのは喜ばしい。暫定的に建物は公共施設として再生され、小さいながらも階段で直接連結する形になった。いずれ広場空間として一体化する日を心待ちにしている。

個人的には夢ひろばのウォーキングイベントが記憶に残る。自分が設計した広場で、妻がウォーキング講師として立った。その日ばかりは自分は設計家ではなくマネージャー兼カメラマンであった。多くの市民が笑顔で広場を歩き、夢見橋を抜けて運河を歩いた光景は決して忘れられない。

思えば油津に関わり始めたのが2002年。今や堀川運河は完成し、商店街は見事に再生を果たした。水辺とまちがつながる日も近い—そう願っている。

平成28年7月に、総務省より報道用資料として『地域活性化に関する行政評価・監視＜結果に基づく勧告＞』が発表された。その資料には、地方都市への実態調査の結果をもと「中心市街地活性化基本計画は所期の効果が発現しているとは見ることが困難」と明示されており、「中心市街地活性化施策を効果的に推進する観点から、効果発現のための取組を強力に実施、改めて目標達成が困難となっている原因の分析、改善方を検討、実施」することなどの勧告が示された。

果たして現行の中心市街地活性化基本計画によって中心市街地活性化は達成できるのか。それら計画、あるいは根本的な仕組みに基づく地方都市への行政投資は、持続的な効果

として十分に地方都市で発現しているのか。これまでいくつもの地方都市で、目標設定も含めて熟考して作られてきた計画と、その計画に基づき実施された上で好転しない地方情勢の現実との間に大きなズレを感じただけに、総務省から出された資料を得ても言われぬ複雑な感情とともに私なりに深く受け止めた。

事業においては、実施する事業体や周辺環境（市場）を冷静に捉えた上でKGI（Key Goal Indicator、重要目標達成指標）をまず設定し、どのような要因によって当該事業が成功するのかKSF（Key Success Factor、重要成功要因）を吟味した上で、マイルストーンとしてブレイクダウンされたKPI（Key Performance Indicator、重要業績評価指標）が導き出されていき、結果、目

8



徳田 光弘

九州工業大学
教授

油津まちづくり会議デザイン部会の委員を務める。北九州を中心としたリノベーションスクールの経験を活かし、多世代交流モール事業や観光拠点施設整備検討について、事業性の面からデザイン部会の議論を支えた。

標達成への道筋が共有体として描き出されていく。中心市街地活性化基本計画にあっては、今一度これら一連の関係と設定のあり方、設定方法自体の再構築が求められているように個人的には感じる。

○**2**○○ { デザイン部会 委員 }

もう一点、このような大局的な「計画」技術としての課題を感じつつ、一方で日南市では特筆すべき取り組みが着実に成果として見えてきている。テナントミックスサポートマネージャーとして期限付きで招聘された木藤亮太氏らをはじめとする油津商店街の再生事業である。地元住民とともに汗をかきながら、シャッター街に活気を着実に取り戻している好例と言える。当然、計画は「実行」に移されてこそ価値を持つものであるが、この取り組みで感じたのは、むしろ実行に即して計画が可変していく計画自体の適応力の難しさと可能性である。目標に対して実行に移す際に、当初計画よりも持続的な、効果的な方法が発見・発明

された場合、実行に移す際にすでに局面が変わり優先順位が変化した場合、計画はどのような適応性を持ちえるかという問題でもある。

活性化事業は対象となる相手側がいるという意味でも、次の一手が刻一刻と変化していく将棋のような難しさがある。先に述べた計画技術もさることながら、その時々状況に応じて最善手を考え（計画し）打つ（実行する）共同体が地方都市に求められているとも思われる。

〇〇3〇 { 日南市役所 関係者 }



長鶴 浅彦

観光・スポーツ課 課長
クルーズ振興室 室長

・平成28年4月～現在：現職
・平成22年4月～平成24年3月：
総務部長 兼 まちづくり推進室長
・平成24年4月～平成26年3月：総務部長

日南市中心市街地活性化事業の始動、終結そして新たな展開

日南市中心市街地活性化事業への直接の携わりは、平成22年4月に総務部の中に「まちづくり推進室」が設置された時から始まった。

それまでは商工担当部署において準備が進められていたが、本事業が多岐分野に跨ることから、全分野に行政的影響力のある総務部

の中に担当部署を移し、統括者である部長が室長を兼務することで、事業の構築や推進が円滑に行くとの判断からであった。結果としては、事業計画や財源調整等において、その機能が十分に発揮され、中活事業の認定を受けるに至った。

事業認定申請においては、内閣府のヒアリングを幾度となく受け、基本コンセプトを堅持しながら不足事業の構築など問題点の整理を重ねて行った。最終的には、港、堀川運河、商店街の回遊性の確保が論点となり、港側に観光拠点施設を整備することで、その問題を解消できるとの判断に至り、認定へ大きく前進した。

事業実施において、観光拠点施設の整備が紆余曲折することとなったようで、結果的には港への整備は見送られ、その対応が協議されていた。

平成28年4月に再び観光やクルーズを担当する部署を担当することとなり、この段階において、堀川運河に隣

接し、日南市観光の交通における結節点となる地点に立地している旧商業施設を買収し駐車場として整備する計画が進んでいた。一方で、熊本・大分地震を受けた市役所庁舎の移転の計画が進められていたため、観光拠点への思いから施設の有効活用を提言し、当分の間ではあるが観光部署及び観光協会を配した観光拠点施設として活用出来るようになった。

観光拠点施設の必要性を痛感する中で、当初の計画とは異なるものの堀川運河に隣接する旧商業施設を活用した実証が出来るようになったことは、当初から関与した者としての救いとなった。

中心市街地の活性化には、個々の施設等の充実と回遊性の向上が不可欠であるため、今後、所管する赤レンガ館や堀川資料館を有効活用し、中活エリアの回遊性の向上のための磨き上げを行わなければならない。

中心市街地活性化事業については、国から認定を受けた平成24年から26年の3年にわたり、まちづくり課長（平成26年度は地域振興課長）として、計画策定から計画全体の進行管理や評価、各事業間の調整、市民への理解や情報共有等に関わらせていただいた。最初は、学識者や関係者が一堂に会して議論し、油津地区のまちづくりを一体的に推進する「油津まちづくり会議」や事業が円滑かつ効果的に推進するための「油津まちづくり会議ワーキング」の推進体制立ち上げから始まった。油津まちづくり会議の委員長に吉武哲信氏、日南市中心市街地活性化チーフディレクターを高尾忠志氏に依頼し、本事業において短期間で成果を上げる

ための推進方策の検討や、持続可能なプロジェクトにするための助言等をお願いした。

油津まちづくり会議では、この油津地区におけるまちづくりの取り組みは、今後、日南市の他地域におけるモデル的な存在となることを意識し、官民協働によるまちづくりの推進方策について、常に評価、検証を行いながら進めることとしていた。

この油津まちづくり推進体制を振り返ると、高尾チーフを中心に、関係する課や事業関係者の合意形成や情報共有が徹底的に図られ、世代や立場を超えた市民や団体、地域外や市外からの応援団や専門家により油津地区のまちづくりが取り組まれてきたことを実感



河田 真弓

日南市 健康増進課
課長

・平成24年4月～平成26年3月 まちづくり課長
・平成26年4月～平成27年3月 地域振興課長

する。庁内組織の横串・縦串・斜め串の体制づくりや市民や団体、行政や専門家・応援団によるまるごと・ごちゃまぜの推進体制であった。

〇〇③〇 { 日南市役所 関係者 }

現在、油津地区を国道側から見ると、複合ビル Itten が完成し、創客創人センターが開設され、子育て支援センターがオープンの予定である。子どもの笑い声や保護者の笑顔が浮かぶ。さらに、商店街をあるくと ABURATSU COFFEE から Yotten、IT 会社の事務所が軒を並べ人と人との交流があり、新しい風やわくわく感を感じる。

国が認定した計画は終了するが、10 年後・20 年後・その先の油津地区のまちづくり事業は、次の世代にバトンタッチされ受け継がれていく。

余談ではあるが、油津まちづくり会議やワーキング後の専門家や関係者や市民との交流は学びの場でもあった。多くの方から堀川運

河や夢ひろば、油津商店街、赤レンガ館、まちづくり等への想いを聞き感銘を受けた。「まちづくりの一步は、右手にスコップ、左手にビールって言うんですよ」高尾チーフから最初に聞いた言葉であった。

中心市街地活性化事業終了に思うところがあるのは、私だけではない。というのも、行政職員は、定期異動という避けられない人事が行われるからである。思えば、中心市街地活性化事業という聞きなれない事業の説明会に当時企画調整課担当主査として、最初に参加したのが、平成 10 年だったと記憶している。当時は、油津商店街の衰退をどうやって止めるのか。かつての賑わいを取り戻すには何が必要か。など、議会でも質問が始まり、市としても何もしないわけにはいかない状況の中、当時の北川市長が、中心市街地活性化事業を検討するよう、私に下命があった。

その後、すぐに担当として商工観光課商工業振興係長に異動となり、中活事業を検討するも、核となる事

業が見つからないまま、国県の商店街活性化補助金等を活用し空き店舗対策事業や各種イベントを打ちながら、少しでも衰退のスピードを鈍化させるべくアイデアを練ったものである。結局何も変わらぬまま、人事異動により担当を離れた。

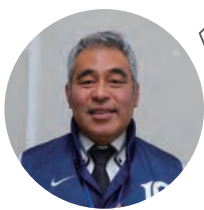
数年後、複合機能ビルという、核施設計画が生まれ、苦心惨憺の中、中活事業の完了を迎えることができ、万感の思いが湧いてくるのは、私だけではない。中活事業に関連して今までに携わった多くの職員がいることも決して忘れてはならない。



柳沼 平八郎

地域振興課
課 長

〇〇3〇 { 日南市役所 関係者 }



12

甲斐 健一

商工政策課 課長
マーケティング推進室 室長

・H20年 合併前の商工観光課 商工観光課長補佐兼商工政策係長
・H21年 合併後の商工課 商工課長補佐兼商工政策係長
・H25年 まちづくり課 まちづくり課長補佐兼まちづくり係長
・H25年 10月 現職

中心市街地活性化に取り組もうとしたのは平成20年からだった。私は商工課の担当として施策に携わっており、その当時のまちを思い起こすと、多くの市民の方々は、油津地

区が中心市街地だと思っていたと思う。

役所は油津から3キロほど離れた吾田にあり、その吾田にはロードサイド店が進出していた。人の流れが変わっていった頃だった。

当然のことながら、油津には夜の飲み屋街には行くけど、昼は誰もいかないよねと・・・実際、油津商店街では、大型スーパーの撤退以来、人通りがガクンと落ちたように思う。それに伴い、おばさんたちが集まっていた井戸端会議も自然となくなっていった。このことが、地域の商店街として一番大切なことだったと思い知らされるのは恥ずかしながら後になってのことだった。

今回は、多くの方が油津の再生は

無理だと思っていた中で、サポマネがキーパーソンとなり、実際に自分たちで活動する市民応援団が増えていったという事実がある。

そして、多くの市民の方々が主体的に参加していったというこの事実が、ベンチャー企業の方々にとっては「この町でならば自分たちも受け入れてもらえるのでは」と共感していただいたと聞いている。

そのような市民力は、商店街への店舗誘致やIT企業進出などの奇跡を起こしていった。市民力、それが今回の一番の成果だったと思う。

商店街活性化、観光振興そして子育て支援

私は、平成23年度に観光課長、24年度から26年度は商工観光課長、27年度には観光スポーツ課長、そして28年度にはこども課長として、各部署で中心市街地活性化事業に携わってまいりました。

1 商店街活性化事業

本市では、これまでも油津アーケード街の活性化のための様々な調査や計画策定を行ってきましたが、いずれも成果を上げるには至ってはおらず、もはや再興は不可能、効果のない投資はいかかなものかという雰囲気は市内にはありました。このようなことから、市では今回の事業に望むにあたって

- 商店主も市も最後の事業、背水の陣で臨むという覚悟
- 計画策定だけでなく事業の実施までをセットにした委託内容

○成果が市民にもわかりやすい明確な目標設定

○登用する人材は本物

などをあらかじめ設定したところ、月額90万円（税別）の委託料に対する市民の皆さんの批判や疑問視する声、幾度となく求められる市議会での説明や答弁など、私から見ればいい意味で油津アーケードへ注目が集まり、マスコミも様々な場面でたびたび取り上げていただきました。

このような批判的な声は事業の進捗とともに小さくなり、逆の評価の声が市外から聞こえてくるようになりました。この事業を通じて、「批判は内から、評価は外から」というある種の法則のようなものを感じましたが、市民の皆さんの真の評価はこれからの取り組みによるものと考えています。

2 観光拠点施設事業

一方の観光拠点施設整備事業につきましては、団体も利用できるレストラン、物産販売施設などの機能をもつ

13



黒岩 保雄

こども課
課長

・平成23年4月～平成24年3月 観光課長
・平成24年4月～平成27年3月 商工観光課長
・平成27年4月～平成28年3月 観光・スポーツ課長

たものとして整備する計画でしたが、民間事業者との競合、採算性、運営主体の見通しなど様々な課題に直面し、市議会や関係者の皆さんとたびたび議論させていただきました。

その中では、営利が伴う事業の難しさ、行政が担うべき役割のあり方などを考えさせられながら、立ち止まる勇気をもって計画を見直しました。その後、新たな場

〇〇③〇 { 日南市役所 関係者 }

所や機能を検討し用地の確保に至ったところですが、その間には市民の皆さんや関係者の方々から様々なご意見やご理解をいただきましたことにお礼を申し上げます。

この事業につきましては、今後も市民の皆さんのご意見や機運の高まり、観光需要の動向などを踏まえながら、更なる展開の可能性もあると考えています。

3 子育て支援

そして中活事業の最終年度では、子育て世代の皆さんの関心の高さや関係者の熱意を感じな

がら、「日本一の木育センター」を標榜する子育て支援センターの整備や商店街における民間の小規模保育園設置の支援に携わることができましたことは、貴重な経験と大きな財産となりました。

私と油津の関わりは、平成4年にNIC21が油津の歴史と文化を取り上げた『油津～海と光と風と～』という本を出版するお手伝いをしたことに始まります。その後、堀川運河の整備事業や『油津の町並みと堀川運河』の調査や油津赤レンガ館保存運動、国登録有形文化財への登録、全国町並みゼミ等、油津に関わることが多くなりました。詳しくは、「堀川運河再生と歴史まちづくり」(『新都市』62-12)に書きましたのでご参照ください。

とりわけ、堀川運河整備事業については、当時東京大学の篠原修先生から多大なご指導やご支援を受けたことが忘れられません。また、篠原先生を堀川運河へ差し向けてくださった県の井上康志さんには、その後も様々な形で油津のまちづくりをバックアップしてもらいました。

私にとっての油津は、国、県、そして役所内の建設部局の行政関係者、油津に関わったいただいた研究

者、マスコミ、そしてなによりも油津のまちづくりに関わった多くの市民とともに学ぶ場であったと思います。昭和の終わりから、歴史的港湾環境創造事業が完了した平成20年までのことです。堀川運河整備のハイライトである夢広場には、小野寺さんの発案による油津商店街からの人の流れを意識した導入ラインが描かれています。

堀川運河の整備が完成して、「日南市中心市街地活性化基本計画」が始まったのは偶然ではありません。一連の流れなのです。景観まちづくりに一定のめどがついた時点で、より多くの市民が関わって商業の再生と観光まちづくりを推進してこそ、油津の再生が可能となるのだ、と高尾チーフは我々を叱咤激励していただきました。ありがとうございました。

「堀川運河整備」と「日南市中心市街地活性化基本計画」は、我々行政の人間に、まちづくりとは大勢の人間が関わってすすめていくものだ、という当たり前のことを改めて教えてくれ

14



岡本 武憲

日南市教育委員会生涯学習課
課 長

・担当監：日南市教育委員会生涯学習課
課長補佐・係長
飢肥城下町や油津などを中心に日南市の文化財
行政を担当してきた。

ました。これからは、「港町油津へえ～ほお～まちあるき」のように、地元の人が地域の魅力を語るような取り組みが油津でもっとも魅力的な観光資源となり、「日南市中心市街地活性化基本計画」における観光推進ゾーンの整備とあいまって観光まちづくりが進んでいくものと確信しています。



山田 一

油津地域協議会
地域活性化部会長

15

油津地域も日南まちづくり株式会社や木藤サボマネ、油津応援団や多くの関係者によって大きく変わってきました。特に商店街においては、複合ビルや立体駐車場の完成、20店舗を超える店舗やIT企業誘致等によってハードの部分は目に見えて変わってきました。しかし、集客については以前より少しは良くなってきたもののイベントをしないと人が集まらない状

況はあまり変わっていません。中心市街地活性化事業の一つに、以前あった家賃補助ではなく、販売促進費として援助してきた事業もこの3月で終了します。終了することによって店舗等の撤退がないように今後はソフトの部分においても積極的に取組んで行く必要があります。地域づくりは人づくりであると思います。

現在の状況が成功事例かどうか分かりませんが、全国から多くの視察があると聞きます。今後は「オール日南」で自他認める商店街にすることが大事です。

現在は、油津地域協議会の活性化部会の部会長として中心市街地活性化事業のアドバイスや資金的補助を受けながら「油津“へえ～”“ほお～”まち歩きツアー」に取組んでいます。“地域の記憶”を掘り起こし“地域の魅力”

を発信していくための新たな取り組みをしながら、市内・市外の参加者に対して油津のまちを案内すると共に、油津のまちが活性化するように頑張っています。今後は我々住民も地域づくりに積極的に取組んで行く必要があると思います。

私としては「油津“へえ～”“ほお～”まち歩きツアー」を絡めながら、油津港・赤レンガ館・堀川運河・人情深いひととのふれあい等を含め、油津の魅力を再発見し油津の活性化に取組んで行きたいと思っています。

20年ほど前は、歩行者の通行量調査では日南で一番多いとされていた油津の商店街。スーパー撤退後は、年を追うごとに空き店舗が目立ち始めた。関係機関の協力を得て、空き店舗対策など色々な施策を打ってきた。しかし、時代の流れといってしまうとおしまいが、なかなか歯止めになる効果的な手段がなかった。中心市街地活性化が始まる頃に、商店街メンバーで「プラチナタウン構想」という商店街の未来を考えたものを作成した。でも、それを実行する組織・体力・財力がなかったし、自助努力での回復は限界があるし極めて困難だと思った。いろんな街に視察に行き気づいたことがあった。組織が弱いところには、周りに応援してくれる方々が集まっているということだった。今回の基本計画

に行政の方から、テナントミックスサポート事業を提案してもらい、このような方法しかないと思っていたので、ものすごく喜んだ覚えがある。特定商業集積法の頃から関わってきた立場からすると、構想実現の困難さは理解しているつもりである。今回の取り組みでは、行政と民間が一体となって実現できた事業といえると思うが、ここまで行政が踏み込んだ事業は今まではないといえる。我々としては、商店街という名前にとらわれてしまい、なかなか抜け出せないままにいた。でも、守り続けてきたから今があるし、衰退した現実もある。時代の移り変わり、取り巻く環境の変化を考えると、衰退した商店街を元に戻すことは不可能に近い。商店街という認識を変え、新しい街として再生する道を考える必要があるだろう。物販の少ない商店街が、今

16



吉川 弘範

油津商店街振興会 会長
岩崎商店街振興組合 代表理事

後市民にとってどのような位置づけになってくるのだろうか。買い物をする街、楽しむ街、必要とされる街など、街としてのコンセプトを常に時代を見据えながら考えていかないと魅力的な街にならないのだろう。そのためには、商店街組織だけではなく、今回関わっていただいた人、関係団体等を含めた組織の構築が必要ではないだろうか。

〇〇〇4 { 市民（事業者、企画・運営者） }



17

黒田 泰裕

株式会社 油津応援団
代表取締役

屋台村からあぶらつ食堂へ

日南商工会議所に勤務していたこともあり日南市の中心市街地活性化事業には事務局として関わってきた。

かたわらかねてから地域資源（特に食）を活かした活性化こそがもっとも効果的！と考えていた。

その実践例として飢肥の食べ歩き町歩きや日南1本釣りカツオ炙り重が生まれた。

どちらも成果を上げているがやはり日帰り、宿泊でないため地域に落ちるお金には限りがあった。

どうにかして宿泊に結びつけたい！

その強い想いから屋台村、あぶらつ食堂は生まれた。

あぶらつ食堂は6の店から成り立っていて日南出身の若いオーナーが参加している。

まだまだ伸びる余地は充分ある。狭いエリアで客の奪い合いをすることが目的ではない。

域外から宿泊の客を呼び込むことこそがねらいなのだ。

私は、3年前からアブラツコーヒーの内装工事をきっかけに商店街・サボマネに関わり始めました。その後、株式会社油津応援団に入社し、油津ヨッテン、油津食堂、コンテナガーデンとメイン事業の社内建設調整役として、よりよい建物ができるよう事業に携わることができました。

それから、昨年のIT企業の日南市参入に伴って、関東から来る企業さんのオフィス作りのお手伝いとして、設計・デザインをやらせていただくこととなり、現在も引き続き工事に携わらせていただいております。

私は、中心市街地全体というよ

りは、商店街メインですので、この場所のことだけでいうと、関わらせていただいた当初からすると劇的に変化をしていると思います。

一年目、二年目のなにもない時期から、広報に力をいれ、商店街でなにか元気なこと・面白いことをやっているという発信ができたことで、メイン施設が完了したときの爆発力に繋がっているのではないかと考えております。メイン施設ができてからも、質の高い発信（ブランディング）と、広島カープの優勝等も重なり、さらなる発展に繋がっているのではないかと思います。

現在は、ほとんどの事業が終わりを迎え、これからどのように発展し

18



鬼束 準三

株式会社油津応援団

ていくかを考えている時期ではあります。現状維持だけでは、いままでのように廃れていくだけです。なので、個店、各事業者、個人が小さい発展を重ね、それを継続していくことが、この商店街を維持していく方法だと思っています。



19

鈴木 美貴子

株式会社油津応援団

わたしは2年半くらい関わらせていただいております。

身近な市民にでも、なかなか成果として受け入れてくれない中での動きで、どこまで見える化＝仕事化の表現ができたか、まだまだかなあと感じている段階。

今までにない動きとともに、横のつながりの組織化へ向けての基礎的土台

というか、メンバーは揃っているといます。でも、まだまだ関わりたい人、参加者、関係者を増やしたい！のが本音です。行政にお願いしたいのは、市民に興味を持ってもらう口説き文句を自信をもって発信していく、そして、もっと認知度をアップさせて支えてほしいです！！



加藤 伝

株式会社油津応援団

20

私は、(株)油津応援団へ入社したのが平成26年8月で、入社してからすぐに、油津まちづくり会議等に参加させていただきました。

(株)油津応援団は、油津商店街活性化を目的として設立していることもあり、中心市街地活性化事業を理解しておくことは必須だったので、会議や地域活動に参加出来て、学ぶ機会が増えたこと

は、非常に良かったと考えております。また、企画会議に参加することが増えたことで、ネットワークが広がり、新たな企画の提案や実施に繋がりましたし、(株)油津応援団の仕事は、人との関わり合いが非常に大事なので、地域とのパイプを増やす為の大切な参加の機会を与えていただいたと感じております。

その中でも、特に、私が感じたことは、中心市街地活性化事業は、油津地区だけでなく、日南市民としても何らかに関わる機会を増やすこと。機会を増やすことで、関わった方の次のイメージに繋がること。その方にまた、新たな人が加わり、新たなことが起こりうる可能性が増えることに繋がったと考えています。

これらのことは、普通に生活しているとあまり考えずに済むことかもしれ

ませんが、中心市街地活性化事業によって、それぞれの立場で、関わった人や企画に参加した人達のまちづくりに対する意識付けになったのではないかと思いますし、今までとは違う街に、触れる機会になった人にとっても良かったと思っております。

この事業が終わった後でも継続的に、このような機会があるように出来るといいと思いますし、今後も人を巻き込みながら、まちづくりに関わって、地域づくりに貢献していきたいと考えております。ありがとうございました。

いち学生としてこの事業に関わらせていただきました。当初は日南について全く知識がありませんでしたが、市民ヒアリングや+C、まちづくり懇談会の取り組みを通じて、日南各地の海の幸、山の幸、そして熱い思いを持つ市民の方々に出会い、日南にある多くの魅力を体感することができました。そして、私自身がどんどん日南のファンになっていきました。こうした魅力溢れる日南に愛着を持つ人たちが、住んでいる市民の方々はもちろん、他所の人もファンになり益々増えていくことを期待しています。

また当時学生だった私にとって、日南の将来について本気で考え試行錯誤しながら取り組む市役所職員、専門家の方々の姿に心揺さぶられた記憶が強く残っており、その姿を追いながら私もいま仕事に取り組んでいるように感じます。

こうした思い出深い日南との縁をこれからも大切にしていきたいです。

21

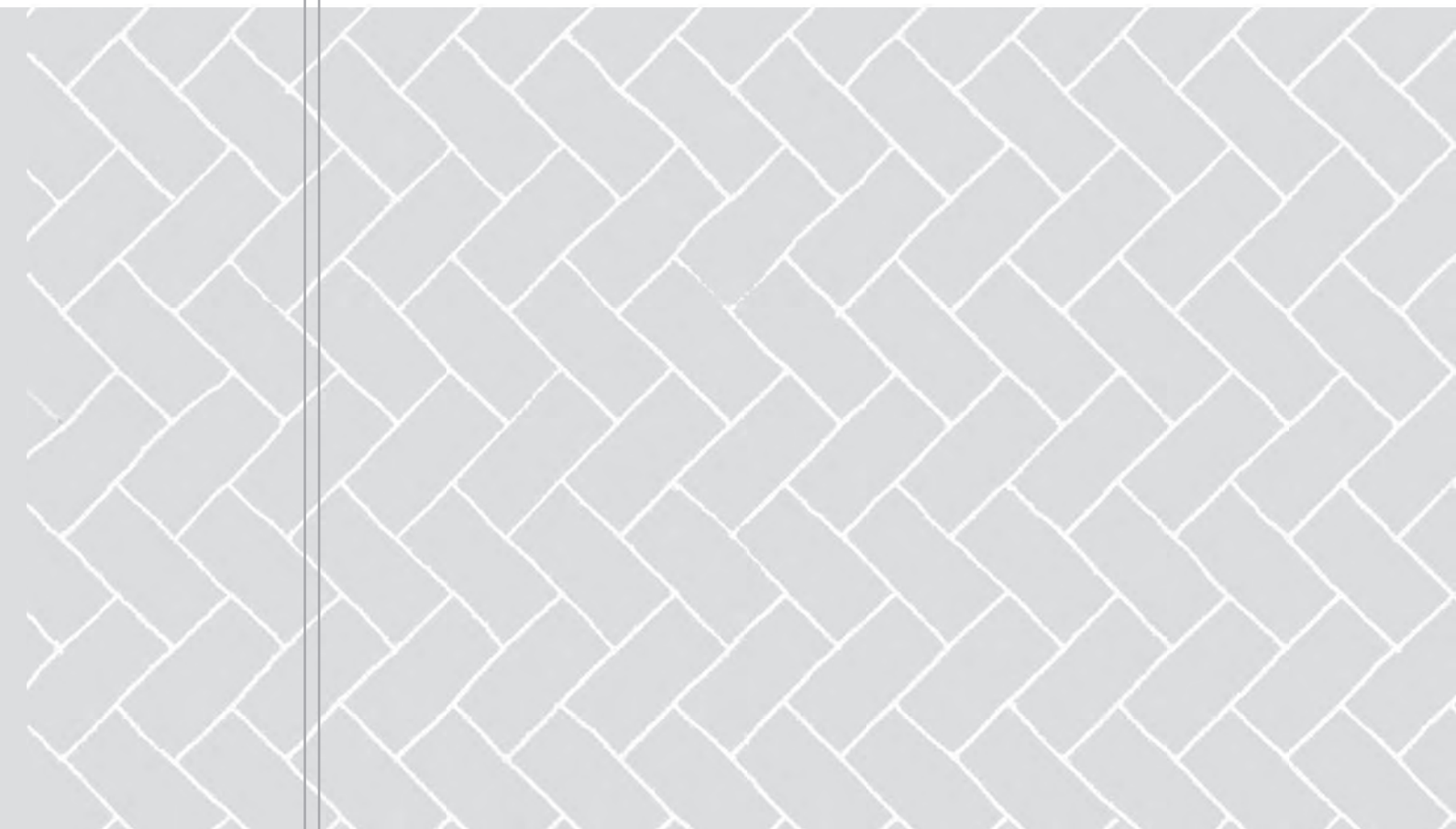


平野 哲也

大分県職員
(元 九州大学景観研究室)

附録

テナントミックスサポートマネージャー審査 講評



附録 テナントミックスサポートマネージャー審査 講評（2013 年 6 月）

日南市テナントミックスサポート事業委員会委員長 高尾忠志

日南市にとっては大きな賭けであったと思う。人口 6 万人の小さな地方都市。その商店街の再生に 4 年間、しかも住み込みで心血を注いでくれる人がどれくらいいるだろうか。しかも、この難題に取り組むサポートマネージャーには、多彩でレベルの高い専門性と、豊かな人間性、そして強い覚悟が求められる。そんな都合のよい人間が現れるだろうか。全国公募を決断した日南市の職員は期待よりもはるかに大きな不安を抱いていたことだろう。

しかし、蓋を明けてみると、「全国公募」「月額 90 万円」の情報が独り歩きをし、公募のニュースは全国、いや世界に広がり、最終的には 333 人の応募があった。嬉しい悲鳴をあげた事務局からは委員のメンバーに大量の応募書類が送られてきた。日南市の PR 戦略は、とりあえずは成功した。なお、ここで念のため書いておくが、この 90 万円という金額は「給与」ではなく「委託費」であり、経費等も含んだ事業費だと理解していただきたい。

平成 25 年 5 月 15 日に第一次審査が開催され 333 人のなかから第二次審査に進む 9 人を選定した。若きは 21 歳から最年長は 73 歳まで、北は北海道から南は沖縄まで、なかにはヨーロッパ等の海外在住の日本人からも応募があった。

第一次審査は、事前に応募書類に目を通した中で、気になった人物を各委員が挙げていきながら、その評価を委員全員で議論する形で進めた。技術力、経験、実績等の専門能力、コミュニケーション能力、交渉力、バランス感覚等の人間力を紙面からできる限り読みとり、サポートマネージャーにふさわしい候補者を選んでいった。人生経験が豊富で見識の高い委員の評価は不思議とずれがなく、皆の自然な総意として 9 人が選ばれた。第一次審査は約 5 時間の長時間に及んだが、委員会に一体感がうまれる感覚があったためだろう、楽しさと充足感に満たされた時間となった。

そして、平成 25 年 6 月 8～9 日に第二次審査が行われた。第二次審査では、空き店舗を会場として候補者が市民の前で商店街活性化策を提案する「公開プレゼンテーション」、アーケード街に机と椅子を並べた市民と候補者の「交流会」、委員による「個別面接審査」を行った。公開プレゼンテーションの会場には市外からを含めて 200 名以上の来場者があり、立ち見がでるほどの盛況であった。候補者のプレゼンに熱心に耳を傾ける市民は、前のめりで聴いたり、ウンウンと頷いたり、難しそうな顔をしたり、笑顔になったり、その反応から関心の高さが伝わってきた。会場は熱気に包まれた。

交流会と個別面接を終え、いよいよ 9 人から 1 人を選ぶための委員会が開催された。さすがは 333 人から選ばれた 9 人のレベルは高く、おそらく会場に来た市民も事務局を担っていた日南市も、候補者全員に日南市に来て欲しいと思ったことだろう。なお、余談だが、長時間の公開プレゼンの間、控え室にずっと缶詰になっていた候補者同士は、呉越同舟かすっかり意気投合し、誰が選ばれても皆で日南を応援しようと話していたと聞いた。日南市に強力な応援団ができたのだ。これは全国公募に踏み切ったことの意外な副産物だった。

しかし、委員会としては一人を選ばなければならない。であれば、そうした外部からの応援団の中心に座れるような人でなければならない。いや応援団だけではなく、商店街関係者やまちづくり団体、油津地区住民、日南市民、そして行政も含めた体制のなかで中心にうまく収まってくれるような人間がほしい。地域の人々と一緒に走ってくれる人、地域の人々が一緒に走りたいと思えるような人であってほしい。しかし、そうしたバランス感覚やコミュニケーション能力だけでは物足りない。時には強引なくらいのリーダーシップや問題を解決に導く提案力も求められる。

候補者 9 人のなかで、こうした要請すべてに応えられるオールマイティな人は当然の如くいなかった。皆、それぞれの強みと弱みがあった。では一体どのようにして選考するのか。委員会での議論は、我々が選ぶとしていくサポートマネージャーに向き合ってもらいたい「問題」とは何なのかに至った。

商店街が抱える問題とは、お店が空いて、シャッターが閉まっていることなのか。そう考えて、これまでお店を埋めるための施策を実施し、日南市は失敗を繰り返してきた。そのことは商店街関係者も市民もよく知っている。今回も同じ問題を設定すれば、同じ失敗を繰り返すだろう。モノを売るということだけで商店街を再生しよ

うとする考え方を直さなければならない。昭和期に形成された近代的な商店街の概念は、明治以来進められてきた政治や経済における東京一極集中とグローバリゼーションが極まり、人口減少・少子高齢化時代に突入した現代においては根本的な見直しが要請されるはずだ。時代が変わり、地域社会と地域経済のあり方も変わったのだ。そのことに真摯に向き合わなければ油津の商店街は活性化しないだろう。

事業委員会では、これまで日南市や商店街が行ってきた従来型のお店を埋める式の施策を繰り返すことはやめようと議論した。もっと持続性の高い方向に向けて新しい可能性にチャレンジしようと。そして、それは商店街関係者自身が、油津地区住民自身が、日南市民自身が、未来に向かって考え、動く、そういう地域をつくっていくことだった。誰かにお願いして、商店街の活性化ができたとしても、その人がいなくなったらまた元に戻ってしまうだろう。

ここまで議論が進んでくれば誰がふさわしいかは自ずと見えてきた。委員からの「あなたは商店街の一員になってともに汗を流し、一緒に走ってくれますか？」という趣旨の質問に対して、「私は、可能であればオフィスを商店街におきたいし、家族と一緒にその上に住みたい」と明快に答えたのは木藤亮太さんしかいなかった。油津商店街の4年後を明確なストーリーを持って具体的に提案できたのも彼しかいなかっただろう。この1ヶ月間、二次審査に向けてどれくらいの密度で油津の未来を考えてきたのか、公開プレゼンをみれば明らかだった。彼の地域に対する姿勢、熱意、覚悟、誠実さは、審査過程を通じて委員全員に確実に伝わっていたのだろう。全会一致での審査結果であった。

公開プレゼンの来場者に対するアンケート調査における「印象に残っている発表者」（複数回答可）という問いに対しても62%の方が木藤さんを挙げており、二位以下の40%台に大差をつけた結果であった。委員会の評価と市民の感覚も一致した結果となった。

全国公募という日南市が選んだ賭けは、上々のスタートを切った。しかし、言うまでもなく重要なのはこれからだ。4年後に木藤さんが「このまちを離れたくない」と思ってくれるような時間を積み重ねることができれば、きっとこの事業は成功するであろうし、油津のまちもその活気を取り戻していくだろう。木藤さんの覚悟に応えられるかどうか、今度は市民の覚悟が試されている。

附録

平成 27 年度 日南市中心市街地活性化シンポジウム 「自分のまちは自分で〇〇 ～私はこんげしてえとよ～」記録

この記録は、平成 27(2015) 年 11 月 25 日に開催されたシンポジウムでの市民発表内容を収録しています。サポマネ木藤氏の着任から 2 年半弱、市民活動が活発に行われ、住民のまちづくりに対する意識も高まっていた時期に、多世代交流モール（油津 Yotten、油津食堂）のオープンという、油津のまちの大きな変化に際して、市民代表 16 名に「自分のまちは自分で〇〇 ～私はこんげしてえとよ～」と題して、3 分程度、思いの丈を語っていただきました。平成 27(2015) 年当時の言葉をできる限りそのまま掲載しておりますため、時系列も当時のままとなっています。

附録 平成 27 年度 日南市中心市街地活性化シンポジウム

「自分のまちは自分で〇〇 ～私はこんげしてえとよ～」記録

収録内容

- (1) 油津地域協議会 細田氏
- (2) 油津地区自治会 益田氏
- (3) 油津商店街振興会 吉川氏
- (4) 直ちゃんラーメン 山下氏
- (5) カーティスクリーク 山口氏
- (6) まんま倶楽部 山田氏
- (7) 一本道の会 北井氏
- (8) 日南山形屋 河野氏
- (9) イーナプリン 森山氏
- (10) 日南市 PTA 協議会 戸村氏
- (11) 日南市サイクリング協会 羽有氏
- (12) 堀川灯ろう流し実行委員会 黒木隆介氏
- (13) ABURATSU Youth street
- (14) 油津小学校 山下さん、小玉さん



シンポジウム発表者

油津地域協議会会長 細田 勝氏

油津地域協議会は、平成 25 年 11 月 24 日に発足し、現在 5 年目には入っています。油津地域内にある小中学校の校長先生、PTA、商工会議所、消防団、民生委員、当然自治会関係、地域内で活躍されている多岐に渡る方々が委員となって、現在 64 名が在籍しています。

地域協議会の活動ですが、4 つの部会で構成されています。

「安心安全部会」は、地域の方や子どもたちの安心安全を確保するために、毎週金曜日 4 時からと 6 時から青色回転灯の防犯パトロールカーで巡回しています。

「生活環境部会」は、地域地域でいかにすれば生活環境が良くなるのかという取組をしており、見法寺橋橋詰めにおいて、油津中学校の生徒と一緒に花壇を作っています。

「地域活性化部会」は、地域がいかに活性化するかという視点でスポーツ大会、ミニバレー、グランドゴルフ、それに加えて油津を内外の人に知ってもらふまちあるきツアー等を開催し、油津に来た人に“油津ってすばらしいな”と感じていただけるような取り組みを行っています。

そして「総務広報部会」の 4 つの部会です。

油津地域協議会では、“自分のまちは自分でつくる”ということで、油津地域の課題を解決し、活性化を図り、住みよいまちづくりを進めていこうとしています。2 月のまちあるきツアーでは、広島カープにちなんだ地元の方々のお話やキャンプの様子などと共に、多くの人々に、商店街も見てもらおうということでツアーを展開しています。

ぜひ、油津をもっと知りたいという方はまちあるきツアーに参加していただきたいと思います。

油津自治会会長 益田 政司氏

私は、油津生まれの油津育ち。商店街が大変にぎわった頃を経験しています。私が二十歳のときは、5 時以降に商店街へ行くと、若いご婦人方が大勢歩いていました。昔のようににぎわいを取り戻そうと商店街に Yotten ができたことは大変嬉しく思っています。しかし、ただ嬉しいだけではなく、着々と進んでいるハード面の整備に

対して、今度はソフト面、これら施設 (Yotten 等) やこの場 (油津地区) を市内外からいかに PR していくかが、私たちの役割であり、日南の課題だと考えています。

油津は、港で栄えたまちだと云われていますが、今度は商店街から、再整備された堀川運河や港の方に足を運んでいただきたいと思います。

そして現在、“へえ～ほお～まちあるきツアー”を企画し開催しています。油津の港にも大変昔からあった旧跡がたくさんあります。それらを掘り起こして、情報発信して、油津に来られたお客さんたちに堀川散策をしていただき、杉村金物本店や赤レンガ館、そして港のあちこちにある名所旧跡を見ていただいて、それらを全てジョイントし、油津全体を活性化していくことを望んでいます。

前述のように、まちづくりのハード面は着々と進んでいます。ソフト面は、われわれ市民が担うべきものだと考えています。

油津商店街振興会会長 吉川 弘範氏

最近、昭和 30 年代・40 年代頃の話をよくしますが、15～16 年前までは空き店舗も少なく、人も通っていました。だから、何十年前は賑やかだったというイメージだけが先行していますが、つい 15～16 年前、中高生の方には分からないと思いますが、20 歳以上の方はこの辺りが賑やかだったということは覚えておられると思います。その賑やかさを取り戻したいという思いで、商店街も取り組んでいます。

その一つに、修理屋さんという事から始まった「なおしえるじえ」という取り組みがあります。現代は使い捨ての時代と言われることが多くなっていますが、商店街には、生活に根ざした店があります。良い物を大切に使う、思い出のある物や、使えないだろうと思う物を仕舞っておくのでは無く、“商店街に行ったら、もしかしたら使えるようにしてくれるんじゃないか”、“困ったときに何とかしてくれる”。昔は、店の方と地域の方が楽しく話ができたといいスタイルを取り戻したいと考え、このような取り組みを行っています。

個人的な思いになりますが、必要とされているものが商店街にあれば、地域の方も喜んで来てくれるのではないのでしょうか。“何かあったら油津に行こう”、“暇だったら油津に行こう”、“どこに行こうかと悩んだら油津に行こう”、“ランチをしようと思ったら油津に行こう”、“今夜は、飲もうと思ったら油津に行こう”、“買い物しようと思ったら油津に行こう”、という風に、常に“油津”という言葉思い浮かべてもらえるような商店街・油津地域にしていきたいと考えています。

特に“中活事業”についての話はできませんが、忘れ去られかけている“商店街”という場所を覚えておいていただき、“宮崎に行くよりは油津に行こう”、“油津に行ったら何かやっているぞ”と思っていただけるような商店街にしていきたいと考えています。皆さんの協力が必要だと思いますので、これからも応援してください。

直ちゃんラーメン 山下 勢伊子氏

「直ちゃんラーメン」は、今年で 58 年目に入りました。私がこのようなまちづくり活動に参加したきっかけは、県外の皆様や、地元の方々に「直ちゃんラーメン」を残したいという思いからでした。

3～4 年前にも、経営者の仲間では何か活動したいと集まったりしていましたが、まず、やり方が分からないし、続かない。それでも地域を変えていかなければいけないという結論に辿り着き、何かしたいとはずっと思っていました。飲食店を経営する立場でもありイベントへの参加等、いろいろな事に協力したくても現場を離れられず、何年もモヤモヤし、この状況を何とかしたいと思っていました。丁度そんな時期に、サポマネ木藤さんが現れて、今に至っています。子育てもだいぶ落ち着き、子どもたちもまちづくりに関心を持ってくれるようになってきたということもあり、油津応援団が立ち上がった際には、仲間に入れてもらう事で、直接現場やイベントに参加はできなくても、会議に参加したり、アイデアを出し合ったり、周りの友人の生々しい賛否両輪の声を聞いて、そ

れを受け止めて、正しい情報を一人でも多くの方に伝えられるとようと活動しています。

今後は、私のようなサービス業の方でも、このようなまちづくりに参加していけるやり方があるという事を、多くの皆さんにも知ってもらい、一人でも二人でも仲間を増やしたいと考えています。

私の三人の子どもは、みな20代になりました。私の強みは、子どもたちの年代も仲間に巻き込めることであり、親御世代の方々や店のスタッフたちにも毎日のように油津の話をしていることです。“どうせダメやろう”という人たちに“ダメじゃないよ”と写真を見せて、“こういうかっていいところがあるよ”と言って巻き込み、人数を一日一人ずつ増やそうかと思っています。

カーティスクリーク 山口 日登美氏

私は、商店街で服屋をしています。私は8年前までは、別のところで商売をしており、実家が商店街で父と母が商売をしていました。こちらへ戻ってくるという考えも無く、それもこのような寂しい町だと商売も成り立たないだろうし、特に服屋という立場上、立地条件やお客の流れというものもあるため、なかなかこちらに戻ってくるという心が決められなかったのですが、時々実家に帰ってきた時に商店街を見て、“すごく寂しいなあ”、“店舗も少なくなったなあ”と心を痛めていました。そこで心を決めて、私の店ができたからといって町が活性化するわけでもないのですが、一石投じられたらなという思いで油津へ帰ってきました。

しかし、それから3年、5年経ってもお店は増えるどころか、一店舗二店舗と無くなっていきます。私も“何かしたいな、何かできないかな”とずっと思っていたのですが、残念ながら、市役所の方々と組んで何かをやるうとしても堅いことしかできません。

“私たちは柔らかい事がしたいんだ”、“柔らかい事をして、みんなを盛り上げたいんだ”というようなことを考えていた5年前に中心市街地活性化事業が始まり、これはチャンスなんじゃないかと思い、志のある、熱い人達を集めて「キトチケット」というグループを作りました。

このグループは、いろいろなイベントをやったり、地域の皆さんに笑顔を与えるようなことをやりたいという有志が集まってできたものです。皆でアイデアを出し、知恵を絞りながら音楽祭や、日南まちづくり株式会社と手を組んでダイバーシティ（歌の祭典）、ファッションショーなどを開催しました。少し参加する年代を絞ったイベントではありましたが、私たちはまさに、そういうことがやりたかったのです。私も年齢は少し上ですが、小さい子どもからお年寄りまでではなく、その中の一番大事な30代、40代に絞ってイベントをやりたかったのです。

また、そのような活動の中から「CAPPE（カッペ）」という雑誌も出しました。“キトチケット”のメンバー4人でやったのですが、町の風景を出しながら、日南の人たちをおしゃれに撮っていこうという雑誌を発売しました。この雑誌タイトル「カッペ」は、田舎っぺの「カッペ」ですが、田舎っぺでも強くたくましく生きていってほしいという願いを込めて名付けました。宮崎県立図書館からもこの雑誌を置かせてくれないかという連絡があり、すごく嬉しかったです。

もっともっと言いたいことがあります。聞きたい方は、ぜひ私の店に来てほしい。たくさんの思いがあるので、是非話したい。私は、「自分の町は自分で考える」「自分で行動する」ということを訴えていきたいです。

まんまクラブ 山田 昭子氏

私は、“まんまクラブ”代表と“へえ～ほお～まちあるき”ツアースタッフをしています。

“まんまクラブ”って何だろうと思われるでしょうが、上町の女性グループで、名前は食べる“まんま”とイタリア語でママの事を“マンマ”ということから名付けました。

“へえ～ほお～まちあるき”のスタッフとしても参加していますが、これは住民参加型のとても良い取り組みだ

と思っています。この事業が定着・発展して、多くの観光客が来てくれると良いなと思います。

観光客誘致ということを考える時に、以前放送された「ナポレオンの村」というドラマを思い出します。もうすぐ廃村予定の限界集落に一人の公務員がやってきてその土地ならではの価値を活かして復活を目指すという内容で、その主人公は、その村の美しい日本の原風景にとっても感動しますが、村人はその価値に気づかないというものでした。その気づかないという点では、今、“まんまクラブ”は赤レンガ館の管理運営をしていますが、以前は私自身も“杉村金物さんの奥の方に古い建物があるよね”というくらいの認識だったものが、その後、この仕事に携わるようになり、赤レンガ館の歴史・良さを知って愛着を感じるようになりました。やはり、自分が住んでいる町の良さに気づくということが大切だと思います。油津の町には、もっと良いところがたくさんあると思いますが、私も含めて、まだまだ気づいていない事がたくさんあります。これからはそれらを掘り起こして、自分たち自らがそれらを知って観光へと結びつけられればと思います。

私の出身地・岩手県三陸地方には「津波てんでんこ」という言い伝えがあります。津波がきたら、自分の命を守るために、一人一人それぞれ高いところに逃げなさいという言い伝えですが、96歳の女性の方が言われた言葉が印象に残っています。その方は昭和8年の三陸大津波、また先の東日本大震災、この二つの大きな津波を経験されていて、未だ仮設住宅に住んでいらっしゃいます。その方がテレビのインタビューでこのように答えていました。“津波はてんでんこで良いけれども、復興はてんでんこではできません”。私には、その言葉が本当に印象的で、中心市街地の活性化という大きな事業を成し遂げるには、みんなそれぞれ、行政、事業に従事されている方、地元の方等が一体となって同じ思いでやらなければ成し遂げる事はできないと思っています。今、皆さんそれぞれの立場で頑張っていると思いますが、私は、何だかバラバラの気がしています。もう少し皆で一緒になって、いろいろな知恵を出し合い、是非ともこのすばらしいまちづくり、活性化を進めていけると良いと考えています。

カープ一本道の会 北井 一郎氏

平成 27 年 3 月 24 日、NHK・にっぽん紀行「鯉の思い出の一本道」の放送がありました。普段は、5,000 人しかいない油津の町が、広島カープのキャンプの時には 10 倍の 5 万人になるという事も含めて、地元の高橋さん達が一所懸命、鯉のぼりで歓迎をされている姿が放映されました。それを見て、これは翌年、必ずキャンプの時はあの一本道を見に、「どこにあるんだろう？」と油津を訪れる方がたくさんいるのではないかと考え、これまで以上にあの一本道を我々が何とかしようじゃないかという思いが生まれてきました。

そのような思いを太田川さんや皆さんにお話しをすると、“そうや！俺たちも思った！何かしないといけない”ということで、沿線の住民約 18 名の人達が、会議室に集まって、話し合いをしました。そうすると“昇り旗を立てよう、一本道を賑やかにして、商店街との導線にしよう”等のいろいろな意見が出てきました。最終的にはいろんな意見を出し合い、“広島カープ歓迎一本道”という昇り旗を作ることとなり、市の地域をつくる交付金事業の認可を受けて、まずは 60 本の昇り旗を立てました。

会員のほとんどの方が 65 歳以上の高齢者ばかりですが、皆さんの話を聞くと、老人力というか、皆いろいろな意見を持っておられました。“次には、一本道をカラーの舗装にしようじゃないか（これは今年実現しました）”とか、カープをお願いをして“監督はじめ、選手達にも一本道を歩いてもらおうじゃないか（優勝パレードで実現）”とか、“キャンプを見に来た人達がここに取りあえず集まって、いろんな事ができるんじゃないか”とか・・・そして今度は、“鯉に掛けて、一本道を歩いたら恋が叶う”とか、そういったいろいろな思いが出てきました。

私が思ったのは、まちづくりで一番大切なのは、若い人も大切だけど、経験豊かな“老人力”というものも大きいのではないかと思います。今後もこの“老人力”を大いに発揮しながら、まちづくりに頑張っていきたいと思っています。

日南山形屋専務 河野 伸宏氏

私は、「自分の町は自分で動く」ということが一番大事なのではないかと思っています。日南山形屋も今年で創業 57 年、昭和 36 年 7 月に店がオープンし、平成元年 9 月には増床もしました。その頃は、商業もすごく伸び盛りで、自分の店だけが大きくなれば良いという考えも若干あったと思いますが、時代は変わり、私も日南に来て 12 年となり、その間いろいろな動きもしてきましたが、やっとここに来て、いろいろな動きの中で“出来る、出来る”と云っていたものが、ついに出来てきました。商売のやり方も変わってきている中で、“こんげして一とよ”と私が一番感じているのは、やはり商売だけのベースではないということです。大型店があって、大型店が独り占めする時代もありましたが、今では、商店街の方々と一緒になって協働して取り組んでいくことが非常に大事だということを痛感しています。

商店街の中では、合同黄札市を開催したり、皆さんと一緒に朝ミーティングをしたりと、私も商店街の一員として動いていかなければいけないし、そのためには、いかに動くかということが大事だと感じています。

今、我々もそうですが、親・子・孫この三世代が町に来ることによって、孫がいれば、祖父母は必ずついてきます。お金を出すのも祖父母で、父母はその保護者として来てもらいます。我々の店も今、親子孫三世代を取り囲もうという動きをしています。商店街も一緒だと思います。そして百貨店業界には逆風が吹いている中で、こうして 57 年間も店を継続できたということは、地元のお客様の応援、ご支援もあるからだと思っています。

やらなければならないこと、動くこと。この商店街に来られたお客様たちに対して、私たちや商店街のメンバーも含めた皆で、一番大切なことは、やはりソフトな面、「挨拶」だと思っています。いろいろな通りがかりのお客様に、“こんにちは！”“よくぞ油津へいらっしゃいました！”“商店街へいらっしゃい！”“ありがとうね！”……。このような一言がある町にしていきたいと思います。それが共有された形で商店街と一緒に動けばいいなと思っています。

油津のまちを“こんげして一とよ”と言う前に、私自身、これからも「動く」という言葉をキーワードを大事にしていきたいと考えています。

イーナプリン 森山 忍氏

イーナプリンの森山です（油津ガーデンがオープンした際に出店）。

以前まではあまり日南には興味がなかったのですが、木藤さんから是非出店をという話をいただきました。なぜ出店することになったかという、私自身が日南出身、細田の大窪というものすごい山の中の出身だということもあり、“日南出身の森山さんが油津に出店することによって、少しでも町の活性化になるんじゃないか”と頭を地面にこすりつける位の感じでお願いされ、そこまでお願いされるとやってみようかなという思いがあり、僕も「自分の町は自分で動く」という考えですので、やはり、とりあえず行動しないと何もはじまらないと思いました。今回出店にあたり、両親に油津に出店するという話をすると、“油津に出さんでもいいやろう”“まずは吾田あたりに出せよ”“油津になんが人が行こか”みたいな感じで言われてしまい、そう言われれば言われるほど、“よし！出してやろう！”みたいな思いになり、平成 27 年 12 月にオープンする事になりました。

今、実際日南に来ると、地元日南、油津で何とか頑張ろうという方々が、行政の市役所の方も含めてすごくたくさんいらっしゃることに一番びっくりしました。こんなに皆さんが地元日南、油津の事を考えて行動しているということで、僕自身も、自分のできる範囲ですが、できる事があれば、皆さんに喜んでいただけるのかなと思っています。

毎年年末には高校の同窓会がありますが、その席で必ず出てくるのが、“日南は何してもどんげもならんわ”という話です。僕はずっとそこに違和感を感じて、“そんなことは無いだろうがなぁ”とは思っていましたが、ずっと地元に住んでいる同級生はそういう認識でした。地元にも何か頑張っていきたいという方はたくさんいらっしゃる

るのに、同級生たちは、“木藤は、何してるんだろう？”みたいな感じで全然接点がないようです。
“地元で頑張っている方々がいるよ”、“こんな感じで町を盛り上げていっているんだよ”、ということ友達にも伝えて、一人でも多くの人たちが町を盛り上げるように少しでも力になればと良いと思います。

日南市PTA協議会副会長 戸村 美百氏

先日、県教育委員会主催 宮崎県学校教育改革推進協議会というものに会合しました。その日の討議内容は「地方創生をふまえた宮崎県の学校教育のあり方について」というもので、教育界でも人口減少率が高くなる中、地域に貢献できる人材の育成、地産地学ということで積極的に取り組まれているようです。総務省が行っている国勢調査の平成元年の統計によると、私たちの世代が中学三年生だった頃は、宮崎県の中学三年生は約2万人いましたが、これが平成27年の統計によると11,000人となり、僅か30年の間に子どもの数は約半分になっています。地元への進学率を高め、地方に仕事と人の流れをつくる上で今後重要だと考えられる事の一つに、産・官・学の連携ということが、これからは必要ではないかと考えています。私の主人が事業をしている関係で一企業としての見解で申し上げますと、小学生の社会科見学、中学生の職場体験学習など、積極的に企業として取り入れています。官と学の連携は充分に取れていると思いますが、さらに、そこへ産業界が積極的に加わることによって、地元の学生を企業が一緒になって町を育てていくという流れを作るという上でとても重要なことではないかと思っています。その一例として、企業は、大学生のインターンシップなどを積極的に取り入れて行くべきだと思います。地域と保護者、学校、そして地元の企業、行政、これらが手を組み、地域の産業を支える人材づくりをしていかなければならないのではないかと思います。私個人、保護者としては、かわいい子には旅をさせたいということで、一度親元を離れて自立して都会に出て、新しい世界を見て欲しいという考えも少なからずはありますが、その上で、将来的にまた宮崎に戻ってきて、地元で活躍してくれたら良いのに、という思いもあります。そのためには、子どもには小さい頃からたくさんの楽しい経験をさせて、地元のお祭りに参加し、自然を満喫して、おいしい食事をたくさん食べて、都会に出たときにもう一度、宮崎に帰って来たいなど思えるような子育てを私たち子育て世代が、今後していくべきではないかと考えています。

日南市サイクリング協会 羽有 光久氏

現在、自転車談義所という活動に取り組んでおり、社会実験として市内7ヶ所にサイクルラックを設置します。自転車に乗る人の事をサイクリストと呼びますが、サイクリストのためのサイクルラックを設置することで、サイクリストに優しいまちづくりを日南市として、日南市民サイクリング協会として目指していきたいと思っています。サイクリング協会からのお願いとしては、市民の皆様、行政の皆様、どうか県外・市外から来るサイクリスト、市内から来るサイクリストにも優しいまちづくりをお願いしたいということです。

堀川灯ろう流し実行委員会 黒木 隆介氏

私たち、堀川灯ろう流し実行委員会は毎年9（8月？）月15日にサピアの横でご先祖を弔う灯ろう流しをやっています。活動としては基本的に年1回ですが、他には国交省のシーニックバイウェイなどで、観光客を出迎えたこともあります。また、堀川灯ろう流しメンバーが8、9割方参加している「地藏会」というグループもあります。油津の赤レンガ館周辺が昔“地藏区”といわれていた由来もあって、その辺りに住む僕たちがほとんどメンバーになっています。この地藏会という団体では、毎年、夏に子ども向けの祭りをやっています。これは僕たちが小さい頃に行っていた祭りで大変長い歴史があるものです。僕たちが小さい頃に行っていた祭りを自分たちが大人になり、今度は自分たちの子どもたちを自分たちがもてなす、と、すごく感慨深いものがあります。

自分たちの子どもたちが自分くらいの歳になって、孫ができる、その子たちに自分の子どもたちが祭りを提供

してあげられるよう、大きく無くてもいいので、細々とでも祭りや団体を続けていきたいと考えています。

また観光関連の仕事をしていますが、特別魅力のある観光地ではなくても地域作りに成功し、観光客が来てくれるところがあります。そういう所を見ていると、地域づくりができている観光地というのは強いものがあります。観光地として特別な人がいなくなっても、周りの人が支えてくれる、同じような人たちが何人も出来ている、カバーしてくれるというためにも、観光のために地域づくり、地域づくりのために人づくりが重要だと思います。

僕たちのメンバーの中でも一番人数が多く、活動的なのは 60 代以上の自分たちの親世代です。この方たちの力（“老人力”）は本当にすごいものがあります。しかし、その人たちが元気なうちに自分たちがノウハウやいろいろな事を受け継いで、その人たちが少しづつ力が弱くなっていっても、自分たちが引き継いでいけるようにしていきたいと考えています。

Aburatsu Youth Street

Aburatsu youth Street の高橋です。私はこのまちづくり企画に参加して、お客様とのコミュニケーションの中で笑顔が生まれ、また、周りにいる人達も笑顔になっていくというとても良い機会になったと思います。「Yotten」も日南市を盛り上げていく第一歩だと思います。これから先日南市が笑顔になれるようにするためには、自分たち高校生が地域を盛り上げていく中心だと思っています。たくさんのイベントに積極的に参加し、共に日南市を盛り上げていきたいと思っています。

Aburatsu Youth Street に参加した八木です。参加するごとに人数が多くなり、人とのコミュニケーションが多いなと感じました。木藤さんや田鹿さんをはじめ多くの方や地元の高校生とたくさんコミュニケーションを取ることによって、いろいろと考えることができました。僕は、油津をもっと活性化するために必要なのはコミュニケーションだなと思っています。そのコミュニケーションを取る場所の一つとして、やはり「Yotten」が重要な油津の活性化の第一歩となっているので、ここからもっと交流する場所を広めていき、子どもから大人までが交流できる場所をつくり、僕自身が多くの人達と交流することによって、もっと油津を活性化することができるのではないかと考えています。まだまだ人前で話すのは苦手ですが、これからコミュニケーションできるようになり、より良い油津・日南市にできるように頑張っていきたいと思っています。

油津小学生 山下祐里奈さん、小玉眞碧さん

油津小学校 6 年の小玉です。

私がこれまでにやってきた活動を紹介し、これからどうしたいのかを説明します。

まず、これまでの活動について紹介します。山下さんや西さんと「油津活性化ノート」を作り、キャンドルナイトやポスターなど様々な提案をしてきました。例えば、キャンドルナイトは、餌肥杉の板で組み立てたオブジェを制作するもので、毎年の恒例行事となりました。ポスターは、油津なおしえるじえのポスターになり、傘屋さんなどの PR に繋がりました。私の母も実際に壊れた傘を修理に出していました。このような事を提案することで油津の活性化に少しでも繋がったのではないかと思います。また、サポマネ木藤さんに学校に来ていただいた時に、同じクラスの人たちと油津が活性化するにはどうすればいいのかを考えたのですが、その中には、ワンコインランチを提供すると良いのではという考えがありました。

このような取り組みを通して、今後行いたい活動が 3 つあります。一つ目は、アブラツコーヒーなどの油津にしかない店で食事や買い物をして、若い世代に油津に関心を持ってもらい、たくさんの人に広めてもらうことです。アブラツコーヒーは店名に“油津”と付いていて、地域に密着したまちづくりに繋がり、口コミで広がれば人もたくさん来て活性化に繋がると思います。二つ目は、油津にしかない限定ショップを作ることです。例えば、日南で作られた全てのお土産が結集した店などがウケると思います。その店に観光マップを置いておくと、観光客の方も便利になります。三つ目は日南・油津の特産品や名物にちなんだグッズを増やすことです。日南・油津にしかないグッズが少ないので、もっと増やすといいと思います。例えば、チョロ船のマスコットストラップやカツオのストラップなどを製作して、二つ目に挙げた限定ショップなどで売ると、実際に見ることで特産物がどのようなものか分かり、関心を持てるようになると思います。そのような活動によって、もっと日南・油津が活性化すると良いなと思います。

油津小学校6年山下です。

私が町のためにやってきたことを6つ紹介したいと思います。一つ目は油津商店街を活性化するための企画で、この企画は私、小玉さん、西さんと始めた黄金ノートで考えたことを基にしています。企画の内容は油津PRポスター作り・キャンドルナイトでのランタン作り・小学校へチラシを作るというものです。ランタンはYottenにある飢肥杉の木を使い、積み上げて作りました。二つ目は農園での野菜作りです。アーケードでは以前、子ども農園を開いていました。その農園に参加し、商店街の方々、来てくれる子ども達と交流を深めることができました。三つ目はアブラツコーヒーの壁塗りです。私は、商店街活性化の第一歩としてできたアブラツコーヒーの店内の壁を少し塗らせてもらいましたが、新しく出来る店の手伝いをできたことは、子どもにとって新鮮でうれしかったです。四つ目は「こんな日南になったらいいな」の発表です。この発表で、小玉眞碧さんと一緒に日南のカルタを作るということを提案しました。カルタを作るためには、もっと町について知り、考えることが必要だと思い、いろいろな地区の方にインタビューをさせてもらい、町の人達との交流に繋げることができました。五つ目は油津小のクラスでとったアンケートです。7月にサボマネ木藤さんが6年生にプレゼンをしてくれ、そのプレゼン後、6年2組のクラスでアンケートを書き、考えを出し合いました。アンケートの内容は、「どのようなことをすれば商店街を活性化できるのか」ということで、この動きはクラスにとっても商店街にとっても、良いことだと思いました。このアンケートを生かせるように話合っていきたいと思います。最後の六つ目は、“へえ～ほお～まちあるき”に参加したことです。このまちあるきでは、地区について知ることができ、油津の古き良き町並みを見学することができました。このような六つの取り組みが、私が町でやってきたことになります。最後に少しでも提案をしたと思います。今年度油津小学校は創立140周年を迎え、ちょうど私たちも最後の学年となり節目の年となることから、記念として6年生のタイムカプセルを作りたいと考えています。このことも4年生の時から、黄金ノートで企画してきたものです。タイムカプセルをこの町のどこかに埋め、二十歳になったときに、自分と町の成長を見てみたいです。私は自分の町を理解しながら、考えを出し合って、町について皆で考えられる機会を少しでも作れたらと思います。



日南市中心市街地活性化事業報告書

—これまでのまちづくりの想いを未来へつなげる—

発行日

2017(平成29)年3月

監修

高尾忠志(九州大学持続可能な社会のための決断科学センター)

発行

日南市／油津まちづくり会議

企画

油津まちづくり会議事務局

編集統括

永村景子(日本大学生産工学部環境安全工学科)

編集・デザイン

南奈緒子(合同会社アトリエ T-Plus 建築・地域計画工房)

執筆

【第1部】

高尾忠志(第1部1、2-(1))

永村景子(はじめに、第1部1、2-(2))

【第2部1】 ※順番は掲載順

白坂昭仁(1)／倉岡宏宜(2,7,11,12)／萩原岳(4)／釈迦郡崇吉(5)／木藤亮太(6,10)／宮下憲二(9)

高尾忠志(3,8)／高橋奈々美(13)／水口将(14)／長本公介(15)／辻喜彦(16)／鮎川透(17)

高橋貴浩(18)／竹下光也(19)／竹林知樹(20)／藤井伸行(21)／谷口雅彦(22)／森山佐知江(23)

【第2部2】 ※順番は掲載順

出口近土／篠原修／清水満雄／日高章太郎／細田勝／益田政司／小野寺康／徳田光弘／長鶴浅彦

河田真弓／柳沼平八郎／甲斐健一／黒岩保雄／岡本武憲／山田一／吉川弘範／黒田泰裕

鬼束準三／鈴木美貴子／加藤伝／平野哲也

シンポジウム記録作成

辻喜彦(合同会社アトリエ T-Plus 建築・地域計画工房)

グラフ作成・データ分析補助

大森真央／太田裕貴(日本大学生産工学部環境安全工学科)

データ整理

日本大学生産工学部環境安全工学科 永村景子研究室

